親並不做聲。待了一會又問道。當初這項地。若不用計買。須用多少錢纔能買來。克家說。按作墳地而論。就算買得便宜。也得花三百串錢。纔能買妥。國瑞聽畢哼了一聲。便坐車回家。

並不做聲（一と言も物を言はない）
待了一會（暫らく經つてから……）
若不用計買（若しも手段を廻らさないで買ふたなら……）
按作墳地而論（墓地として云ふたなら……）
就算……（……としても）
得花……（……を費やさねばならぬ）
哼了一聲（ウンといふて）

（一）「卻」は「なか〳〵」の如くに譯す。（二）眼前に困難して居る人を見れば。（三）「把心一横」の「横」は「横着をする」の意で、茲では利益さへあるならば人の迷惑などは眼中に置かず、自分の良心を曲げ横着の精神を發揮しての意に解す。（四）これが卽ち富んで不仁を爲すといふことである。（五）「便宜」は凡そ何事に限らず自己の利益になることをいふたものである。（六）「値十個錢」は十個の錢だけのネウチがあるもの。（七）目的が卽ち此所に在るのである。（八）「卻說」は邦語の「さても」などいふ語に當る、以前には富んで仁ならぬ事の理屈を前提として說いて居たのを茲に一轉して本題に入るのでツマリ本文を引出す便宜上の句である。（九）此地の大富豪となりました。（十）親を葬るには必ず高燥の土地を選擇するといふことになつて居る。（十一）況してや、國瑞は大富豪であるから。（十二）富豪ではないけれ共、やはり（也是）何不足なく暮してゆく住民である。（十三）「只要」は彼が賣ることを承諾しさへすればである。（十四）窃かに思うやう＝心の中に考へる。（十五）己は手段を廻らして地主をだまし、彼が高價を吹かないやうにすべきであるの意（十六）そこで澤山の金を費はないで。（十七）私共の鐵工場へ賣つてくれて、良い價を取り、別に良い土地を買はれた方が宜いでせう。（十八）原來急いで賣るべきものではありません（賣主が掛引で斯う言ふたのである）。（十九）さういふ事であるからには。（二十）大いに手代等を誇大にほめそやして。（二十一）道々（道すがら）心の中で嬉しくてたまらぬ。（二十二）一々すッかり吩咐けで、（二十三）其日が丁度清明の佳節に相當したので。（二十四）言ひ終つてから大得意になつ

て。(三)必らすどれ程の價を出さねば買取ることが出來ないのか？

第二十三　物語の譯し方(其四)

吳鴻錫孤兒を撫育す

吳鴻錫義撫諸孤

話說前清康熙年間。福建省晉江縣地方。有一人姓吳名萬佑。乃是一個飽學秀才。娶妻趙氏。生有一子。名叫鴻錫。因爲福建地方連年有海寇擾亂。居民紛紛逃避。萬佑在本地住不住了。便帶着妻子。搬往浙江。那時候有一個旗人。名叫噶希尼。奉了清康熙帝之命。來到浙江。督造戰船。以防海寇。聞聽人說。

話說(說出す物語は)」　康熙(聖祖の朝の年號西曆1662—1722)」　飽學(學業の充分に出來たるものをいふ)」　秀才(鄉里に於ける第一次試驗に及第せる者を童生と曰ひ其詮衡を經たる者は生員卽ち秀才なり)」　連年(毎年)」　海寇(海賊共)」　居民(地方の住民が)」　紛紛逃避(混雜して逃げる)」　住不住(住んで居れなかつたので)」　帶着(を連れて)」　搬往(へ引き移つた)」　旗人(淸朝の時八旗の貫籍に屬する者をいふ)」　來到(に來て)」　督造戰船(戰をする船を監督して造つて)」　聞聽人說(人の噂するを聞けば)」

吳萬佑乃是福建有名的人。曉得海寇情形。他便備些厚禮。恭恭敬敬請吳萬佑作幕友(俗稱師爺)。賓主很是相投。誰知萬佑作幕友。一兩個月忽然患病身亡。剩下孤兒寡婦。好不可憐。那時候鴻錫纔五歲。噶希尼本是個重義的人。他見這母子孤寡可憐。便力任養贍之費(就是擔任度日的費用)日子未久。鴻錫的母親也死了。鴻錫更是伶仃可憐。噶希尼便將他接在自己家中撫養。後來督造戰船事畢。噶希尼回京。又將鴻錫帶回京城。與自己的兒子一

曉得海寇情形(海賊の樣子を能く知つて居るので……)」　些(相當の)」　厚禮(鄉重なる進物を……)」　恭恭敬敬(禮儀を盡して)」　賓主很是相投(主客共に大に意氣相投じたが……)」　誰知(思ひ掛なく……)」　幕友(顧問卽ち相談役……)」　患病身亡(病氣に罹つて死んで……)」　剩下(が取殘された)」　好不可憐(其だ可愛想な次第だ……)」　纔(やつと)」　本是個云々(原來義俠心に富んだ人なので……)」　便力任養贍之費(そこで進んで鴻錫母子を扶持する費用を引受た)」　度日的(しの)」　日子未久(間もなく)」　更是伶仃可憐(一層賴りなき孤獨の憐れなものになつたので)」　便將他接在云々(其處で鴻錫を自分の家に引取つて養育すゝことにしたが……)」　後來(其後)」　回京(北京に歸るので……)」　將(を……)」　帶回京城(北京に連れて歸つて……)」　一樣看待(同樣に待遇し

樣看待。有一天葛希尼想要把鴻錫認爲己子。因向鴻錫商量。鴻錫答道。父親自能一個。我情願稱您爲伯父。葛希尼見他年紀雖小。[三]竟能知禮。很是奇異。從此鴻錫便跟着葛希尼過活。那葛希尼雖然是個京官。卻是清貧的很。鴻錫[四]後來年紀漸長。便不肯坐食。一切僕役應辦的事。處處爭先去做。甚至放牛放羊。都不辭辛苦。葛希尼有時候給他[五]零用。他不肯妄用一文。積蓄多了。買[六]弓箭書籍。暗暗的找那射箭通文理的人。求人家指教。俗語說

た：」 想要把鴻錫云々鴻錫を自分の子にして仕舞ふと思つて……」

商量に相談したら」 答道が答へて言ふには」

父親自能一個父親は原來一人であべきものだから」 情願何卒……したい」

年紀雖小年齡は若いが……」

奇異めづらしいことだ」 跟着……に從つて……」

過活日を送つて行つた」 雖然是個京官中央政府の官吏だけれども」

清貧的很甚で寒潔で貧しかつた」

不肯坐食遊んで食べて居ることが嫌ひなので……」 一切僕役云々總て下男の爲すべき仕事を何んでも眞先に自分でする……」

甚至放牛放羊甚だしきは牛や羊を飼養することまでも……」

有時候給他云々時折彼に小遣でもやると彼は一文でも無駄使ひしなかつた……」

暗々的云々こつそりと弓術や文學の出來る人を尋ねて其人に就て敎はつた」

俗語說的好俗に能く言ふが……」

的好。世[七]上無難事。只怕有心人。不上幾年的工夫。鴻錫箭也會射了。書也會讀了。連[八]滿洲文也都精通了。這天被葛希尼知道了。親自考驗了他一番。果然射的很準。學問也通順。心中很是喜歡。有一年鴻錫一個叔伯哥哥。名叫雲麟的。因爲平台灣有功。封爲參將之職。來京引見。打聽鴻錫在葛希尼家中。因想叔[九]父止此一子。意欲去求葛希尼。把他帶回家鄉以奉叔父的祭祀。及至見了葛希尼。說了來意。葛希尼很喜歡鴻錫有了歸處。便答應了。

不上幾年云々幾年もかゝらず……」

箭也會射了弓術も會得し……」

書也會讀了書物を讀むことも出來る樣になつた」

這天或る時」 親自云々親しく彼を一通り試驗して見た所が」

果然射的云々果して射術が正確であり學問も亦能く出來るので……」

有一年或る年」

叔伯哥哥從兄」 爲因……した爲めに……」

參將中佐級の舊制の武官名」 來京引見上京して拜謁仰付けられた」

打聽……を聞いて……」

止此一子唯此子一人」 意欲しやうと思ふて……」

把……を……」 家鄉鄉里」 奉叔父的祭祀叔父の後を立てさせ樣と……」

說了……を述べたら……」

歸處落ち付く處」 答應了承諾した」

那時鴻錫也坐在一旁。慨然說道。哥哥帶我回家。固然是好。但我此時有不可以回去的道理。我從七歲受伯父的恩養。到得今日。我雖長成。伯父卻已衰老了。三位公子年紀尚幼。豈可無人照應。我必等着三位公子年皆長成。我再回家。也不爲晚。葛希尼聽說這話。心中着實難過。便拉了鴻錫的手哭起來。雲麟見兄弟如此重義。便說道吾弟既有此志。就安心在這裏便了。說完辭去。從此葛希尼更把鴻錫另眼看待。轉過年葛希尼一病不起。下

那時その時：」　慨然說道ひどく感に打たれていふには……」
固然もとより……」　但我此時云々唯私は今家へ歸へられない理由があるのです」
恩養……の惠み深き御養育を……」　到得今日今日まで無事に暮して來た」
長成成長した」　三位三人の：」　公子若樣は：」
豈可無人照應まだ世話する人がなければならぬ」　等着……を持つて：」
再其上で：」　也不爲晚でも晩いことはありません……」
着實難過實に堪らへきれなくなつて……」
便拉了云々そこで鴻錫の手を執つて泣き出した」
兄弟弟」
既有……がある以上は……」　就安心云々安心してこちらに居るがよからう」
另眼看待特に眼をかけてやつた」
轉過年翌年になつて……」　一病不起下世去了病に罹つたが治らないで死んで仕舞つた」

世去了。他的夫人因爲悲哀太過。得了一個瘋病。時常發作。成了一個癈人。三位公子。大的名叫和順。年纔七歲。二的名叫和鼎。年纔六歲。三的名叫和鱗年纔五歲。一家之中瘋的瘋。幼的幼。全虧鴻錫一人辦理喪事。纔把葛希尼安然入土。喪葬已畢。有那葛希尼的同族中無賴。看見葛希尼已死。家中無主。便上門來欺負。又虧得鴻錫諭之以理。示之以威。衆無賴見鴻錫不是好惹的。纔縮頭回去。自此鴻錫便主持家政。噶希尼死後家無餘財。

因爲悲哀太過ひどく悲んだので……」
瘋病精神病」　時常發作始終病が發作（おこる）ので……」
大的總領は：」
二的次男は：」
三的名叫……三男は名前を……といふた」
瘋的瘋幼的幼氣ちがひと幼な兒のみで……」　全虧全く……お蔭で……」
辦理喪事葬儀萬端を處理した」　安然入土無事に埋葬した」
同族中親類中の……」
看見……を見て：」　家中無主家に主立つた者がないのを……」
便上門云々どまかしに出掛けて來ました……」　諭之以理云々理屈攻めに諭したり威どした……」　不是好惹的どまかせられないのを……」
縮頭すごすごと……」
主持家政家事を統括していつたが」　餘財貯蓄」

幸虧鴻錫善於經營。一天比一天從容。凡和順弟兄一飲一啄。鴻錫必親自經手。鴻錫又延請了一位名師。叫和順弟兄入學讀書。放學以後。必將三人的書考驗一番。若熟記不忘。他便到書房裏。給先生磕頭道謝。因此先生感他的義氣。越發盡心教授。鴻錫又因他們弟兄是旗人。必須通曉滿洲文字。閒暇時候。便把自己所學的親自教授。又給他弟兄定了親。都是名門之女。光陰易過。和順已是長到十六歲了。前清的制度各旗有各旗軍籍。旗民到了

善於經營 善く繰り廻はし……」 一天比一天 一日一日と……」
從容 餘裕がついて來た……」 一飲一啄 食事は……」
經手 手がけた」 延請了云々 一人の名ある先生を招聘して……」
放學以後 課業が濟んだ後とには……」
若熟記不忘 若しも能く記憶して居られた時には……」
磕頭道謝 お辭儀をしてお禮を述べるので……」
越發盡心 益々心をこめて……」
必須通曉 是非とも……を十分に知つて居らねばならぬので……」
閒暇時候 ひまの時分には……」
定了親 結婚の約束をする」
名門 家柄のよき家」
光陰易過 月日のたつのは早いので……」
前清的制度 清朝のおきてでは……」

歲數。就得去當兵。[一四]那貧窮的自然是求之不得。稍微富足點的。便不願受那種辛苦。論起旗兵來。別的還好。只有那護軍。名爲御林軍。聽着很尊貴。其實沒晝沒夜的看守禁門。就如同門軍一般。卻是最苦不過的差使。那和順家中。自從鴻錫主持家政。未免得罪了許多小人。暗地裏在和順該管的左領處說了壞話。[一五]生生的把和順從書房裏揪了出來。去當護軍。你想和順一箇瘦弱書生。如何幹的了那箇營生。只嚇得渾身打戰。鴻錫見此光景。料知

得去當兵 兵士にならねばならぬ」
稍微富足點的 稍資産ある者は……」
那種辛苦 其樣な苦しみを……」 論起旗兵來 八旗兵のことを論ずれは……」 別的還好 別のはまだ好いが……」
聽着很尊貴云々 聞いては大層貴いが其實は晝夜の別なく御所の門番をして……」
如同門軍一般 番兵と變りはない」
苦不過的差使 極めて苦しい事此上なしの役だ」
未免得罪了云々 數多の小人共に咀はれて……」
暗地裏 陰か に……」 該管的左領處 其役所の助役の所に」
生生的 理も非もなく」 揪了出來 引つぱり出して……」
去當護軍 護軍の兵士にならした」 瘦弱書生 かよわい書生の身で……」
幹的了云々 其樣な生活が出來るものか唯吃驚して總身顫へ上つたので」
料知云々 是往かねばならぬと覺じめ覺悟して……」

不去不行。便自己跟隨前去。凡是和順到的地方。鴻錫寸步不離。夜深守門。鴻錫便令和順安睡。[一六]自己坐到天明。絲毫不倦。後來鴻錫想着如此厮守。終非常法。要想免除此難。除非作了官。就不受這害了。因想素日跟葛希尼有交情的。再沒有近過大學士阿蘭泰的。[一七]這個人還算一個長者。莫若前去求他。請他設法給和順一個官。庶可免了護軍之苦。主意已定。便領着和順兄弟三人。來至阿蘭泰門外等候。阿蘭泰下朝回來。鴻錫領兄弟三人來到

跟隨前去隨行して往つた」
寸步不離一寸も側を離れないで……」
安睡安眠」
絲毫不倦すこしも怠らない」
如此厮守此樣な役目は……」
險非作了官官吏になるのでなければ……」
素日平素」 有交情的仲の善かつ人たは……」
近過親密であつた」 還算先づ……である」
前去求他出掛けて往つて其人にお願して……」
設法何とか手段を設けて……」
主意已定考へが定つたので……」 領着……を引連れて……」
等候……を待つて居た」
下朝回來お役所から退出して來るのを……」

轎前。說明來意。阿蘭泰見故人的兒子。如此可憐。便問和順會滿洲文不會。[一八]和順答道會。阿蘭泰便道。現在內閣有一個中書缺。我明日和同官商量商量。就補你一個中書罷。你[一九]且回家聽信。鴻錫聞言令和順謝了謝。回家聽信去了。不在話下。那時內閣的首座。也是一個旗人。名叫索額圖。權位在阿蘭泰以上。那個中書缺。他意中已有了人。及阿蘭泰次日到內閣。對索額圖說。欲把中書給和順的話。已是無濟於事了。阿蘭泰無可如何。回家去。

故人的死んだ友人の……」
會滿洲文不會滿洲文字が解るかどうかと……」
便即ち」
現在目下」 中書缺書記の缺員」
同官相役」 商量々々相談して……」
你且回家聽信暫らく家へ歸つて便りをお待ちなさい」
謝了謝厚く禮を述べて」 不在話下それはさて置きの意」
首座首席」
權位權力と位置」
意中已有了人腹の中で既に定めた人が有つた」
次日翌日」 對……に向つて……」
已是無濟於事了最早だめであつた」
無可如何何んとも致し方がなくて……」

便寫了一封信。告知鴻錫這番情形。鴻錫道事雖如此。然我不爲和順得了這個缺。終不甘心。左思右想早打了一個主意。

(一)一子を生みて。(二)彼れ(カシニー)は此の母子の孤寡憐むべき有樣を見て。(三)しかも能く禮を知つてゐる。(四)後で段々年をとつて來ると。(五)「零用」は零用的錢で日常の小遣ひ錢のこと。(六)弓矢や本などを買つた。(七)世の中には面倒な事はない、只人の精神によるものであるといふ諺。(八)滿洲語までも都て精通してしまつた。(九)其從兄が鴻錫は叔父のたつた一人の子であるからと思ひ。(一〇)多くの無賴漢等も到底ごまかしきれないと看て取り。(一一)必らず三人の課業を試驗して見る(一番は語氣のかゝりで別に譯さなくても宜い)。(一二)それが爲めに先生も彼の義氣に感心して。(一三)旗人は一定の年齡になれば、軍人にならねばならぬ。(一四)貧乏な

這番情形此度の樣子を……」　事雖如此此樣な事情だと云ふものの……」　終不甘心どうも氣が濟まない」　左思右想云々色々と考へて早速方針を定めた」

者では願つても其願ひが叶はぬことは言ふ迄もないが。(一五)讒言すること。(一六)自分が(身代りになつて)夜明け方まで番をしてゐる。(一七)此の(阿といふ)人はまづ一個の上役である。(一八)和順は出來ます(解ります)と答へました。(一九)お前はまづ〳〵家へ戻つて……。(二〇)然しながら、私は和順に此の役を取つてやらねば氣が濟まぬの意。

話表さて」　立定了志向目的を定めた以上は……」　弄到手手に入れる」　不甘心氣がすまない」　左思右想彼是と思ひ廻らして……」　早打定主義早速考へを定めて」　提筆筆を執りて……」　委委曲曲……委細に一一と通り認めて……」　缺官職を云ふ」　統同すべて一所に」　寫在呈紙上歎願書中に書いて」　拿在手中手に持ちて……」　門首門口」　跪下等候云云跪いて待つて居ると折能く索額圖が人を訪問する爲め出掛やうとして……」　台階階段」

迎上來。把狀紙往上一遞。索額圖看了。不由動怒。對左右說。這箇瘋子。不用理他。氣冲冲的上轎去了。鴻錫這裏毫不介意。把狀紙拾起。依舊跪在那裏。少時索額圖回家。見他還在這裏跪着。也不理他。進門去了。次日出門。見鴻錫跪的地方。照舊不改。心中已然納悶。心中想道看他跪到幾時。如此一連跪了五日五夜。鴻錫是滴水未曾入口。眼看就要倒斃了。這日索額圖又從外邊回來。看見這種情形。心中大爲感動。不由上前喚着鴻錫的

迎上來迎へて：」 狀紙願書」 往上一遞差上げたら……」 不由動怒思はず怒つて」 左右從者」 這箇瘋子不用理他此樣な氣狂に構ふな……」 氣冲冲的非常に腹を立てゝ」 這裏そんな事は……」 拾起拾ふて：」 依舊元の通り」 少時暫らく過ぎて」 回家家に歸つて來て……」 還在這裏跪着未だ其處に跪いて居るのを」 進門去了內へ這入つて仕舞ふた」 次日出門翌日外出する時……」 照舊不改昨日の通り相變らず跪いて居るので」 納悶好に思ひ」 想道看他云云彼が何時まで跪いて居るかを見ようと思ふた」 一連引續き」 滴水未曾入口一滴の水をも口に入れないので」 眼看就要倒斃了今にも死ぬ樣に弱つて居る樣子が明白に見へた」 從外邊外から」 這種情形此樣な樣子を」 不由上前云云思はず傍へ寄つて來て鴻錫の名を呼んで云ふには」

名字說道。世界義烈男子。像你這樣的也就少了。我今因你義氣。把和順作箇中書。你也不用跪着了。使命左右扶起他來。小心把他送回家去。鴻錫聽罷。謝了一聲。便要爬起。誰知絲毫不能動轍。索宅家人早已上前兩三箇。把鴻錫扶起。僱了一輛車。送他回家不表。那時正是清康熙帝親征厄魯特的時候。旗人作官的。都要隨駕出征。立些功勞。好封妻蔭子。鴻錫見和順已作了官。便勸他自告奮勇。去隨勞効力。和順惟命是聽。鴻錫便整頓

世界世の中の」 像你這樣的汝の樣な人は」 困……の爲めに……」 作箇中書一箇の書記となす故……」 不用跪着了跪いて居るには及ばない」 便そこで：」 小心氣を付けて……」 聽罷聞き終つて……」 謝了一聲一言謝を述べて」 要爬起はひ上らうとしたが……」 誰知云々意外にも少も體を動かすことが出來ないので」 索宅家人索額圖の召使ひ共が……」 扶起扶け起して……」 不表言ふまでもない」 那時正是其時丁度」 旗人作官的八旗人の官吏たる者は」 駕天子を」 些多少の：」 好封妻蔭子好は好都合にの意。妻は封詰を受け子は優遇さるる……」 便勸他云々彼に出征を願い出で從軍して勳功を立つることを勸めて：」 整頓行李荷物を取り揃へて」

行李。自己跟隨。二人隨同大隊人馬前進。誰知鴻錫去後。舊日同族的無賴。便湊集起來。到和順家中搶奪訛詐。和鼎等無法抵禦。急忙差家人。追鴻錫回去。鴻錫聞報。囑咐和順幾句話。叫他自去。鴻錫便折回奔到家中。衆無賴見鴻錫回京。早又散得無影無踪了。後來和順在外立了功勞。升了主事。仍舊在京當差。有一天和順的朋友。請和順在家便酌。酒飯已畢。主人邀同座的人賭博消遣。原來那個主人。本是一個匪類。有意要引誘和順上

自己跟隨 自分は主人の伴をして行つた」
誰知 豈料らんや：」 舊日 先日の」 同族 一族の：」
湊集起來 寄り集つて來て：」 搶奪詐訛 强奪したり欺いたりした」
無法云々 抵抗することが出來ないので急いで家僕を差遣して」
聞報 知らせを聞いて」
囑咐 言ひ付けて：」
折回奔到家中 引返して家に驅け付て見れば」
早又散得云々 最早退散して影も形もなかつた」
在外 出征先きで：」
升了主事 中央官衙の事務官に昇つた」 仍舊 元との通り：」
差當 務めて居た」 請和順云々 和順を招待して自宅で小酒宴を開いた：」
主人云々 主人が宴席に列した人々と賭博をして遊びました」
匪類 不正なる人間」 有意 故意に：」

套。好行欺詐。鴻錫聞知。便找尋前來。正見數人呼幺喝六。賭在熱鬧中間。鴻錫一見。怒氣勃發。腰中抽出短刀。一手他便把主人的髮辮抓住。一手用刀指着罵道。你這下賤東西。引誘良家子弟爲非作歹。該當何罪。我也沒工夫細問你。我今只把你殺了。以消我恨。說畢將刀在桌上一拍就要動。嚇的那主人跪在地上。磕頭如搗蒜。只叫饒命。以後再不敢了。鴻錫見他告饒。一撒手說道再犯了時。快不饒你。說畢便用手挽了和順回家。和順自此

上套 ワナにける」 好行 を働き易い：」
呼幺喝六 賭博をして居る時の掛け聲」
賭在熱鬧中間 賭博の眞最中であつた」
抽出：：を拔いて：」 髮辮 髮」
抓出 つかむで：」 你這下賤東西 此ロクでなしめ」
爲非爲歹 惡事を働らく」
該當云々 如何なる罪に當るか私は今汝を審問して居る暇はないから：」
以消我恨 恨みを晴らすのみだ」
赫的 おどかし付けられて：」
磕頭如搗蒜云 平蜘蛛の樣にお辭儀をして以後再びしないから命丈けは助けて呉れと言ふので」 一撒手 手を放して」
快 其時は最早やの意」
挽了 手を引いて：」

不敢在外燕會了。有一年山東遭了旱災。清廷派和順前往賑濟。鴻錫對他說。這件差使。不比尋常。正。是仁人君子盡心的事情。你自己前往。難保不受人欺蔽。叫百姓不沾實惠。我只好隨你走一遭。及至到了山東。賑濟得法。涓滴無私。因此一方居民　均感和順的恩德。那知道全是鴻錫的調度。後來和順又得了密雲稅關的差使。也虧了鴻錫帮助他。纔得上不虧國帑。下不累人民。來往商民稱揚不絕。再說和順的兄弟和鼎。比他哥哥聰明。鴻

在外「外で」　燕會「宴會」　有一年「或る年…」
清廷「滿朝政府」　派「派遣して」
前往賑濟「出張して罹災民を賑恤救濟した」
差使「役目を…」　不比尋常「平常の務めとは違ふ」
難保云々「他人に瞞されないとも限らないから」
不沾實惠「實際の恩惠を蒙らない」我只好云々「私が是非お伴して參りませう…」
涓滴無私「些かも不公平な事がない」
一方居民「其地方の住民」　均「何づれも皆」
調度「切り盛り計らひ」　後來「其後」
也虧了云々「吳鴻錫を彼を助けたお蔭で」
纔得云々「始めて上は官金を缺損させず下は人民に迷惑をかけなかつたので…」
來往商民云々「往來する商賈が其功を稱揚して已まなんだ」
比他哥哥「彼れの兄よりも」

錫便想叫他巴結正路功名。鴻錫勸他用功。以圖上進。并且述說噶希尼的德業。以相激勵。說到傷心之處。往往落淚。一日和鼎稍倦。鴻錫便把自己用的一條鐵鎖練。鎖在和鼎的案頭。必要他讀到某時方罷。因此和鼎的兄弟和麟。鴻錫見他頗有才幹。但讀書卻聰明有阪。料他不能由科第出身。便設法叫他往永定河効力。那時直隸巡撫(那時還沒總督缺呢)。乃是于公成龍。派和麟去修某段堤工。鴻錫教他相度地地勢增卑培薄。工料務求堅實。原來

巴結正路功名「科擧に應じ順席に官職を得ることを勉める…」
上進「進歩上達すること」
傷心之處「苦心の處」
倦「なまける」
一條鐵鎖練「一筋の鐵のくさり」
鎖在案頭「机の側に鎖で縛り付けて置いて」
讀到云々「何時までか讀書したら始めてお仕舞にする…」
才幹「才能」　設法「手段を廻らして…」
効力「力を致すこと　即ち働らくこと…」
巡撫「清朝時代に一省の民治及兵馬の大權を綜ぶる大官」
總督「巡撫に同じ總督を置かざる省には巡撫を置く」
某段堤工「其の區域の堤防工事…」
增卑培薄「卑き處は之を高くし薄弱なる所を堅固にす…」

那永定河本名叫作無定河。水性湍急。兩岸的土又是疏鬆的性質。所以常常的決口。爲患甚大。這河和麟他辦工之時。[一四]正是夏令一日陰天欲雨。巡撫于公前來巡視。遠々看見一人在堤上向水叩頭。于公心知有異。上前詢問。[一五]乃是跟和麟修築堤工的。着實贊美了幾句。後來連日大雨。河水暴漲。堤工壞了許多。單和麟所修的絲毫未損。巡撫叙功把和麟補了筆帖式。後遂升到刑部郎中。到了此時。和順弟兄三人。全已成立。而且得了功名。[一六]鴻錫從前報答噶希尼的志願。也算達到極點了。又過了幾年。鴻錫便得病而死。他的兒子名叫常德的。也中了進士。官至某部郎中。從來人都稱鴻錫爲孝義先生。這便是吳鴻錫報恩的故事。

只要是有人心的人。感恩就能報恩。若現在風俗一天比一天薄。人心一天比一天壞。當面人家對得住我。背後我可想法子要害人家。看見吳鴻錫報恩這段故事。[一七]能不愧死麼。

水性湍急 水の流が急なること：」
疏鬆的性質 土質がバラ〳〵して堅實ならざること」
常々的決口 始終決潰するので」
辦工之時 工事に從事した時は」
遠々看見 遠くで……見た：……」
心知有異 變つた事があると思つて：」
詢問 問ひたゞす」
河水暴漲 河の水が急に增し一ぱいになつたので：」
單 唯」
所修的 修築した所は」
叙功 功績を調らべて：」
筆帖式 滿州語の音譯なり屬官の意」
郎中 事務官即ち參事官の如き職」
全已云々 皆成人して夫々世話をしたので」
從前 是迄で」
算達到極點了 目的點に達したと云ふものだ：」
得病 病氣に罹りて」
中了 及第した」
這便是 これはつまり：：」
故事 昔し有つた事柄です：」
有人心的人 眞心のある人は：」
現在 目下」
一天比一天 一日一日と：」
壞 墮落すること」
當面人家云々 面と向つては我が爲めを思ふて世話する樣であるが裏面では正反對に人を害する策を廻らすと云ふ有樣だ」
這段 此種の：」

(一)すつかり書き出して。(二)やつと玄關まで下りて來た時に。(三)こつちの方では素より豫期した事であるから少しも氣にも掛けず、嘆願書を

拾ひ上げて。(四)そこで、左右の待者に命じ彼をたすけ起した。(五)吩付けのまゝに其命を聞き。(六)急いで召使を遣はして(差は差遣するの意)。(七)片手に主人の辮髪を引掴んで。(八)言ふと同時に刀でテーブルを叩きつけ。(九)蒜を搗きつぶすことで頭をペコ〳〵下げる形容。米搗バッタのやうにの意。(一〇)正に仁人君子が心を盡すべきの事でお前自身の前途は……。(一一)次には弟の和鼎のことを話しませうに。(一二)併せて彼等兄弟の亡父が在世中の德業を物語つて勵ませた。(一三)只だ讀書の方では大體程度が解つて居て試驗を受けて及第させる見込もない所から。(一四)丁度夏の一日空が曇つて雨が降り出しさうな時に。(一五)(誰かと思へば)乃ち和麟が堤防の修築をやつて居るのであつたから、心から賞讃した。(一六)三人の子供を皆一と廉に立身させたので、自分が曾て受けた恩義を故人の望みを果したことによつて報いたといふ意。(一七)愧死せざることが出來ませうか?

第二十四　新聞雜報の譯し方

新聞雜報で口語に記述し、又は比較的口語の分量を多く用ゐて居るのは社會記事が主たるものであるが、其れも全然口頭で談ずる用語とは全然同一なものではない。次に示すものは支那各地の新聞に現はれた雜報記事である。

携槍被扣(銃器を携へて差押へらる)

前門東車站、於十日午後來車時、有某甲携帶行李、經稅丁攔阻查驗、翻出手槍一支、子彈數十粒、當經稅關扣留、將某甲放行了。

北京前門外の東部停車場に、十日午後の列車が來た時に、甲某なる者が携帶した手荷物を稅關の係員から押し止めて檢査され、ピストルが一挺と彈丸數十個が搜し出されたので、卽時稅關に差押へられ、甲某は通過を許された。「攔阻」は行李を控へて(驗べる爲)こと、「翻出」は荷物を引ッかき廻

して搜し出すこと。

檢拾幼女招領（幼女を拾ふて受取人を招く）

昨天（七號）前門外珠寶市、見有巡警領着個小姑娘兒、據說姓董、名叫二領頭、似係鄉間人、巡警帶領尋找失主、有丟失幼女的、何妨到附近派出所打聽打聽去呢

昨日（七日）前門外珠寶市（北京の市街名）に、巡査が小娘をつれて居るのがあつた、（其の娘の言ふ所に據れば）董といふ姓で、名は二領頭といひ、田舍の者らしい、巡査はつれて失ひ主を搜して居る、幼女を紛失した者があらば、附近の派出所へ住つて聞合せるが宜しい。「何妨」は「聞合せにゆくがよろしから」う」位の意味にとるのである。

鋪長虧累潛逃（店の主人損して逃出す）

朝陽門外大橋路南、聚興順米莊、鋪長陳啓順、因嗜好賭博、資本虧空、債臺高壘、現屆舊歷年關、無法償債、竟於前天夜內棄鋪潛逃了

朝陽門外大橋路南なる、聚興順米店の、主人陳啓順は、賭博が好きで、資本を損耗し、借財が山の如くになり、目下舊曆年末になり、返濟の法が立たぬ爲に、竟に前夜の內に店を棄てゝ逃亡してしまつた。「虧累」は損失の苦しさに「屆」は時期になること。

氷棚變成火棚（氷置場が火小屋に變る）

朝陽門外南河沿路東、金姓牛肉舖、前日不戒於火、將門外存肉的冰棚引着、登時火起、經坎濟水會及河陽汎弁兵趕至、極力撲救始熄、只燒蓆棚兩間、幸未延及他處

朝陽門外南河沿路東の、金といふ牛肉屋では、前日火に注意しないで、入口外に肉を貯へて置く氷小屋から火事を出し、立どころに燃え上り、坎濟消防組と河陽屯所の兵士等が驅付け極力防火したのでやつと熄んで、只圍のアンペラ二た間を燒いたばかり、幸に他に延燒しなかつた。

火警延燒數家（火事數戸に延燒す）

東四牌樓六條西口外、紹芝車行、六號下午七點多鐘、後院厨房失火、延及同和兌換所、三義棉花鋪、福昌米莊等、共燒房二十餘間、經消防預防各隊及水會等撲救、至九點半始熄

東四牌樓六條胡同の西口外なる紹芝車店では、六日午後七時過、後庭の勝手から失火し、同和兌換所、三義棉花店、福昌米店などに延燒して、合計二十餘間を燒き、消防豫防各隊が消火組合等の救防を受け、九時半になつてから、やうやう鎭火した。

世職窮迫自縊（世職が貧のために自ら縊れた）

朝陽門外南營房、住戶世襲雲騎尉常祿、年五十多歲、素以作小買賣爲生、近因生意不佳、俸銀久未開放、常某困苦難度、竟於三號晚間、在房柁上自縊身死了

朝陽門外南營房の、住民世襲雲騎尉（前清の官階名）常祿は、年齡五十餘りで、平素小商ひをして生活して居たが、近來營業が面白からず、（清室からの）俸給は久しい間貰うことが出來ない爲、常は困苦に堪へられないで、竟に三日の夜中、家の桁に縊死を遂げた。「身死」は死去する。

少婦自抹身死（少婦自殺する）

前門外延壽寺街羊肉胡同、住戶李姓婦、年十九歲、伊夫在某首飾店傭工、該婦因新年欲回娘家、直被伊夫攔阻、應許俟二月二日再去、該婦大不滿意、夫婦稍有口角、不料該婦一時想不開、乘間用切菜刀自抹身死了

前門外延壽寺街羊肉胡同の、住民李姓の嫁は、年十九歲で、彼の夫は某飾身員店に雇人となつて居るのであるが、此嫁正月に實家を歸りたがつたのを、其亭主から止められ、二月の二日になれば行つても宜しいと言はれたのを、此嫁は大不平で、夫婦が少し口論した、（然るに）想ひがけなく、該女一時に思ひ詰め、隙を見て臺所庖丁で自殺して死んでしまつた。「自抹」は自害すること、「傭工」は「雇はれて仕事をする勞働者」で必ずしも職工を意味するものでない。

姑兒毒打姪媳（小姑が甥の嫁をヒドク叩く）

德勝門外關廂住戶李某（回教人）、有個未出閣的姑兒、爲人極其烈害、前天不知因爲什麼、竟用赶麵杖、將其姪媳李馬氏痛毆、登時氣閉、經人多方救治、始得復甦、李馬氏娘家哥哥聞知大怒、卽欲赴官成訟、經多人出來調停、不知如何了結

德勝門外城壁際の、住民李某といふ回教信者は、未だ嫁入りしない娘を持つてゐるが、（其娘の）人柄が極めてヒドイ奴で、前日何事であつたか知らぬが、いきなり偸飩揑棒を以て、其甥嫁なる李馬氏をヒドク毆りつけ、卽座に氣絕したので、人々が種々手を盡して助けやうやう蘇生させた所、李馬氏の實家の兄が聞いて大怒りし、早速役所へ訴へ出やうとしたけれ共、多くの人々が出て調停したが、如何なる結末にしたかは知れない。「爲人極其利害」は人と爲り極めて辛辣なる。「經」は「……た上で」の意。

損失非小（損失が少しでない）

六日下午、謠言大起、北京女僕、大半倉卒回家、這兩天又紛紛來京、聞朝陽門內外（女僕多東八縣人、故出朝陽門較便）、六七兩日、以銅元票十枚、只換制錢四十文（四折）、雖說是自找吃虧、然可證國與民的關係了

六日の午後に、大に謠言が起つて、北京の女中は、過半大急ぎで家へ歸つたが、此一兩日又ゾロ〳〵北京へ出て來た、聞く所では朝陽門內外（女中は多く北京の東八縣下の人である故に朝陽門から出るのが比較的便利なのである）六七の兩日、銅貨紙幣十枚で只た制錢四十文に兩換し（四割）たさうだ、自ら求めた損失ではあるけれ共、然し乍ら國と民との關係を證すべきものだ。

子弟碎催小使（子弟を小使にしてゐる）

前天午後、有人行至宮門口東廊下、見某宅門前、有個肥頭大耳的男僕、吐氣揚眉、指手畫脚、督催該宅駐守隊兵、打掃門街道、該兵身穿軍服、手使長把兒笤箒、嗒嗒連聲、服從命令、按國家養兵之欵、皆係民膏民脂、原爲衛國保民、不

應撥給闊老宅裡、當這種碎催三小兒呀

一昨日の午後、宮城門口東廊下まで行つた人が有つた、某邸の門前に、肥つた大耳の下男が、大威張りで、手まね足まねしながら、該邸駐在の護衛兵に、門前の道路を掃除せよと督勵催促してゐると、該兵は身に軍服を着、手に長柄の箒を持ちつゝ、ハイ〳〵と重ね返辭で(其下僕の)命令に服從して居たのを見受けた。按ずるに、國家が兵を養ふの費用は皆人民の膏脂であつて、原來國を衛り民を保つ爲で、勢力家の邸に分遣し、此種のクダラヌ小使役に當らしむべきものではないのだ。(支那の官吏など勢力家の前には孰れも護衛兵を分遣し置くが目下北京あたりの狀況である)

老婦被砍(老婦人切られる)

本月十日上午十時、前門外頭陳市南頭路東尙靴鋪、有某甲與某乙因帳目事互相口角、經近鄰張姓老婦上前阻止、某甲不服、手持茶盌將老婦頭砍傷、鮮血直流、然後某甲又用鐵錯將自己頭部砍傷、幸經巡警赶到、將老婦等一併帶往外右五區去了

本月十日午前十時、前門外陳市南頭路東の尙靴店で、甲某と乙某とが勘定の事から互に口論をやらかし、近所の張姓といふ老婦人が來て押止めやうとすると、甲某は服せないで、手に茶碗を以て老婦の頭を傷け、鮮血を流し、然る後甲某は又鐵錯(やすり)で自分の頭を切り傷けたが、幸に巡査が急いで來て老婦等一同を右五區の警察署へ連れていつた。

第二十五　新聞雜報の譯し方(其二)

喇嘛打鬼照相(ラマ鬼拂ひの寫眞)

舊歷二十四日、雍和宮打鬼、未跳舞步扎之先、蒙藏院派司員携同英國人二名、帶去照相師數人、請各喇嘛在廟內裝扮黑白鬼、四天王及二十八宿等、一排一排的、共照了十九排、最可笑的是、照相時各喇嘛雖身多破衣、而外面穿上套子、光華奪目、倒也可觀、惟脚下破鞋爛襪實在難看

舊曆二十四日、雍和宮の鬼拂ひには、未だ舞跳を始めない先に、蒙藏院から事務官を派遣し英人二名を同道し、寫眞師數人を連れていつて、各喇嘛に寺内で黑鬼白鬼、四天王及二十八宿等に紛裝してもらひ、一組一組にして、合計十九組を寫し取つた。最も可笑しかつたのは、寫眞を取る時各喇嘛が身體には破れ着物を着込んで居るけれ共、外面は上衣(套子)を着て金ピカで中々に立派であることで、只た脚の方から破れ靴にボロ足袋が見えるので、全く見ッともないことであつた。「雍和宮」は北京で著名なラマ教の寺院で毎年一回づゝ行はれる「打鬼」の行事は非常に賑うのである。

貪小便宜受害(安物買の錢失ひ)

前天上午、有一鄉人某甲、拉了一車黑豆進廣渠門、走在門臉兒上、遺落一袋在地、後經某甲知覺、遂卽告明巡警、眼同沿路尋找、恰遇住戶侯三姑娘、同朱某氏及朱什麼興、正往家中收藏這口袋黑豆、當經巡警扭獲、將一干人證、送交清化寺街第一分庭、判罰侯三姑娘等三名口、每人四元、某甲當堂把黑豆領回、侯三姑娘跟朱某氏出了法庭放聲大哭、怕是湊不上罰欵、咳、誰教你們撿便宜來著呢

一昨日午前、田舍人の某なる者が、黑豆を一車挽いて廣渠門を這入り、表側まで來た時に、一袋を落して往つたのを、後で氣がついたので、そこで巡査に訴へて、道ぞひを一緒に見ながら尋ねた、折よく(其附近の)住民の侯の三番娘と朱某の妻と朱何とか興とが、丁度自分等の家へ此黑豆一袋を隱さうとしてゐるのに出逢した、忽ち巡査が引ッ捕へて、一件關係者等を、清化寺街の第一分署へ引致し、拾つた連中三人は一人四圓ッゝの罰金を申渡され、黑豆は其場で遺失主が受取つて行つた、侯の三番娘や朱の妻等は役所を出ると大聲揚げて泣出した、恐らく罰金は滿足に納められまい。

抓個瘸兒就罰(缺點を見付ければ罰する)

京西長辛店鎭、興隆齋切麵舖、日前有馬永和在該鋪吃麵、恰遇賣饅首家婦人某氏、向馬某索討帳目、彼此言語不周、衝突起來、馬某抓起醋盆要砍某氏、

該舖長赶緊上前攔勸、正在這個當口兒、巡警適至、卽將人證一幷帶區訊供畢、判罰馬某洋三元、無錢交欵、改爲拘留半月、後來也不是怎麼股子勁兒、過了兩天就釋放了、最奇怪的是、該舖長排難解紛、始未發生危險、總算盡地主的責任、乃該警區不分皂白、也把該舖長判罰三元、勒令繳款

北京の西方長辛店町の饂飩屋興隆齋では先日馬永和といふ者が同店に往つて饂飩を食べた所、丁度饅頭賣の女房某といふが其所へ來合はせ、馬某に貸しの催促をして双方言葉の行違から衝突を始め、馬某は酢皿で其の女房を毆らうとするので、店の亭主が急いで止めにゆく、其時に、巡査がやつて來て一同警察署へ連れてゆき取調べの結果馬某を三圓の罰金を言ひ渡したが、其金が無いので、半ヶ月間の拘留に變へられた、所が後でどんな仕かけのあつたものか知らぬが、二日ばかり過ぎると釋放された、一番不思議なことは、例の饂飩屋の亭主は紛議の仲裁をし、危險の發生しない前に之を防ぎ止めたといふことは、主人として當然爲すべき責任を果したものであるのに、其所の警察署では委細構はず、其亭主をも罰金三圓に處分して强ひて其金を納付せしめたといふ一事である。「不分皂白」は黑白を分たずで、別に理屈を論ぜずに出鱈目の處置をすること。

似乎不值一吊（首吊にも及ばぬやうだ）

平則門內順城街、住戶孫某、前天與伊妻因細故口角紛爭、孫某覺著窩心、遂於夜間上吊尋死、幸經人知覺拯救、算是檢了一條大命

題目が洒落れてゐる「一吊」はつりさがるで又錢の一吊に通ずる所が思ひつきである。平則門內順城街（城壁ぞひの町で其名としたもの）住民孫某、一昨日其の女房と下らぬ事から口論紛爭し、孫某は心中面白からずとうく夜中に縊死しやうとした、幸に人が知つて救けてくれたが、命拾ひをしたといふものだ。

遊到那里去了（どこへ遊びにいつたのか）

京西海甸六郎庄、住戶劉姓之女、乳名香兒、年十八歲、昨於二十六號上午、赴

白雲觀遊逛、至晩未回、不知那裡去了

北京の西、海甸の六郎村住民、劉某の娘に、乳名(生れた時分命名した名)を香兒と呼ぶ十八歳になるのがあつた、昨二十六日の午前に、白雲觀へ遊びに出かけ、晩になつても戻つて來ない、どこへ往つたのか知ら?「白雲觀」は著名の道士廟である。

大潑開油燙人(沸かした油をあびせて人を燒傷さす)

平則門外月墻前、擺油炸果攤兒的楊老、一號早晨、因爲給烙燒餅的王某、保了十九枚銅元的帳、未能如期歸還、彼此口角、不料楊老大動野蠻、端起滚開的油鍋、照着王某潑去、致將王某面部前胸胳膊等處燙傷甚重、王某赴阜成汎喊告、當日將兩造解送提署

平則門內月壇前に、油揚げ果子の露店を出して居る楊老は、朔日の朝、燒餅を燒いて賣る王某に、銅貨十九枚の懸を保證して居たが、期限になつても返さぬので双方口論をした、思ひがけなく楊老は大に野蠻手段を發揮し、煮い立つた油鍋を持ち上げて王某目がけてブッかけたので、王某の面部、胸先、肘などに燒傷させること甚だ重く、王某は阜成屯所に訴へ出たので、其の日の中に双方とも提署(步軍統領衙門の事)へ送りつけられた。

串門子丟鬍子(茶話しに出かけて鬚を失ふ)

西直門外昌運宮迤西、住戸某甲、年逾耳順、品行不端、日前晩間、到鄰居某姓家串門子、適値伊家男子外出、某甲也不是說些什麼混帳來著、被某姓婦連打帶罵、並將鬍子揪掉了許多

西直門外昌運宮西邊の住民甲某は、年齡七十を過ぎて、品行が正しくない、昨日の夕方、隣家の某方へ茶話しに出かけた、所が丁度其家の亭主が外出して不在なので、甲某は何か愚にもつかぬ話をしたものと見へ其家の女房に打つたり罵られたりし、おまけに鬚を隨分澤山にむしり取られてしまつた。

這總算是眞醉(此位からホントに醉ふたものだ)

地安門外某紙店內帖套作工人王永祥、前天與同鄉在南城聽戲吃飯、喝酒過量、行動不能自主、由前門雇車回舖、也沒講車價、下車時付了現洋八塊、奔到屋裏就睡了、及至一覺醒來查點財物、始知誤把洋錢當大銅子兒給了車錢、急得自己直抽嘴吧

地安門外某紙店內の上封職工王永祥といふ男、一昨日同鄉人と南城で芝居を見たり食事をしたりして、酒を飲み過ごし、身體の自由もきかぬ程になつたので、前門から車を雇うて店へ戻り、車賃も定めもせずに、下りる時銀貨八圓をやり、自分の部屋へ飛込んで睡つてしまつた。目が醒めてから財布をしらべ、始めて銀貨を銅貨と間違ひて車賃に拂つたことを知り、殘念がつて自分の頰ぺたを引ッぱつて居た。

這叫自作自受（これを自業自得といふ）

德勝門內三不老胡同、住戶德某、新近在傘子胡同姸識某姓婦人、往來甚密、不料被德妻偵知、因而與德某大打了一場、德某敗仗、竟被鎖了高牆、不准出門一步、現在德某連窩心帶想情人、已然病的不能起炕了、曾對人發恨道、等我病好、一定與這潑辣貨離婚云云

德勝門內三不老胡同の住民德某は、近頃傘子胡同に居る某姓の婦人とねんごろになつて、往來が甚だ密であつた所、料らずも、德の妻に偵知され因て德某と大騷ぎして戰爭をなし德某の負けとなつたので、一切外出差留命令の下に一歩も門を出ることを許されず、今では德某心中の煩悶と情人を思ふの情緒とで、病氣になつて身動きも出來ない、人に向つて恨みを述ぶる樣、病氣が癒りさへすれば、あの橫道婆アを追出してくれるぞと。

太太尋找老爺（奥さんが旦那を尋ねてゐる）

安定門外二道橋官廳門前、日昨有位二十多歲的婦人、手拉著四五歲的小姑娘、在該處來回打轉兒、向人打聽馬老爺在廳上沒有、也有說不知道的、也有說沒來的、後來聽說該婦是安定汎廳官世襲恩騎尉馬某的太太、因爲有好幾個月沒往家裡帶錢、現下又快到了領俸的日期、所以他的太太前來尋

找云云

安定門外二道橋官廳の門前に、昨日二十歳餘りの婦人が、手に四五歳位の小娘を引いて、其所に往きつ戻りつを繰返し、人に馬さんは役所に居られるでせうかと問ふてゐる、知りませんと言ふ者もあり、お出でになりませんと言ふ者もある。後で聞く所によれば、此婦人は安定屯所の官吏で世襲恩騎尉馬某の奥さんであるが、數ヶ月間家へ金を持つて歸らない爲、目下又直きに俸給日になるので、彼の奥さんが尋ねて來たワケであるとのことであつた。

荒唐鬼兒荒唐（極道者のなれの果て）

前門外王廣福斜街、同泰和煙捲雜貨舗、寄居人婁啓元、於前天夜十一點多鐘、自服强水身死、四號午後、經警察會同地方檢察官相驗畢、發照飭埋、聞已死婁某、河南人、年二十一歳、係某省註京辦公處楊處長之姻親、因涉獵花叢感受花柳毒症、多方醫治無效、痛苦萬分、實難忍受、遂爾輕生云、不知那一班流連花界的小荒唐鬼兒們、看見婁某這段風流史、個人的心裡、怕也不怕呀

前門外王廣福斜街の同泰和卷煙草雜貨店に、居候して居る婁啓元といふ者、一昨夜の十一時過、自ら硝酸を呑んで死んだ、四日の午後に、警察と地方裁判所の檢事と立會驗屍を遂げ、指令を下げて埋めさせたが、聞く所では死んだ婁某は、河南人で年が二十一歳、某省駐京事務所楊所長の姻戚であり、餘り放蕩した爲、花柳病を受け、種々醫者に治療してもらつたが效無く、病苦の烈しさに我慢がしきれず、とう〳〵自殺するやうになつたのであるとか、彼の樣な花柳の巷にマゴ〳〵する放蕩若造共、此の婁某が道樂の歴史を看たならば、皆其の心裡に恐ろしく思うか思はないか知ら？

「荒唐」は不眞面目の身持態度などを指す語である。

寺裡小綹何多（寺の中にどうして斯うスリの多い事だ？）

前門外笞箒胡同禮拜寺、日前有一某甲、赴該寺內淨水房沖洗身體、及至沐畢穿衣時、大組馬褂小褂等件、俱都不翼而飛了、又前天敎子胡同東禮拜寺、不

知是那個賊大爺將馬慧子的大小褂襪子等件、全行竊去、又五號那天、該巷西禮拜寺、有沙某赴該寺沖洗、也把衣服一套全丟了、浴身清心之地、竟有汚濁盜偸之事發生、然揆度情形、似乎不是外人幹的、奉告該寺教長、赶緊留心調查、嚴追懲辦、事關全體名譽、不可含糊了事呀

前門外笞箒胡同の禮拜寺(回教の寺)に、先日甲某といふ者が、該寺內淨水室へいつて身體を洗ひ清め、仕舞つてから着物を着やうとする時になり、長上衣、短上衣、胴着などの類が、全部翼無くして飛んでしまつた(紛失したこと)。又一昨日教子胡同東の禮拜寺では、どのお泥さんだか知らぬが、馬慧子(人名)の長短上衣や靴足袋に至るまで、全部窃取して往つた。又五日の日に、該町西の禮拜寺では、沙某といふのが其の寺內で沐浴してゐる間に、やはり衣服一襲(かさね)を全部紛失してしまつた。浴身清心の場所で、無暗に汚濁の泥棒事件が發生するとは(怪しからぬが)然し樣子を糺して見ると、外から盜んでゆくものではないらしい、該寺の住職たる者、急いで注意して調査し、嚴重に懲辦すべきものである。事は全體の名譽に係ることであるから、曖昧にお茶を濁してゐてはいけないといふことを忠告して置く。

第二十六　新聞雜報の譯し方(其三)

澡堂冷熱不均(湯屋の冷熱不平均)

日昨(十號)有人在西四牌樓東大院華賓園洗澡、是日半陰天氣、陣陣凉風、頗似深秋景象、該澡堂門窻大開、冷風送入、使人遍體寒戰、然其盆堂內熱度、太高無異蒸籠、甫二三分鐘、卽覺汗流夾背、呼吸滯塞不通、無怪身體虛弱之人、每生昏堂之險、遂由浴室出來、坐在櫃堂歇息、眞彷彿出火坑而入冰窖、該堂冷暖懸殊、實與衞生有碍、値此寒熱無定之際、趕到點兒上、就許鬧一場病、像這類情形、亦不只該園一家爲然、奉勸各澡堂掌櫃的們、何妨隨時的改改良呢

昨十日西四牌樓東大院の華賓園へ入浴に往つた者がある、此日は半ば曇

天で、ソヨ〳〵と凉風が吹いてゐて、頗る秋の深くなつた時の景色であつたが、該湯屋では戸から窓まで、開け放し、冷風を送り入れて、人をして全身寒さに戰はしめた、然して其浴槽の內は熱度が非常に高く、蒸籠の中と異ならぬ、最初の二三分間は、汗が背中へにじみ出て、呼吸が滯塞して通じないやうな感じがした、身體虛弱の人が每々中で昏倒するやうな危險があるのも無理がない、そこで浴室から出て、店に休んで居ると、全く火穴から出て氷室へ入つたのに彷彿して居る。此湯屋の寒暖が此樣に懸絕してゐるのは、實に衞生上有害で、此寒熱定まらぬ時に當つて、稍々ともすれば、或は病氣になるやうなことがあらう。斯の如き狀況は、啻獨り此湯屋ばかり左樣だといふわけでないから、各湯屋の支配人等は、隨時に改良を施こされむことをお勸めする。

旗況慘不忍聞（旗人の慘狀は聞くに忍びない）

京西藍靛廠旗兵潤來、年五十二歲、近因餉銀三月未發、難以生活、昨於十號赴農事試驗場後身投入長河內尋死、經中營隊兵恩桂遇見、撈救上來、未能殞命、勤慰多時、送伊回家去了、按京西藍靛廠等處旗民、向皆倚賴餉銀度日、近因數月未能關餉、家有兼充他處兵士、或有別項事務者、尙可勉强支持、其餘均嗷嗷待哺、苦不可言、據該營調查、入四月舊歷以來、闔家投河及尋死者、已有三家、其男女個人自盡者、亦竟有十二人之多云、唉、爭權奪利的闊大老們、那能想道這些事呀

北京西部藍靛廠の八旗兵（滿洲人）潤來といふ五十二歲の人は、近來俸給の不渡り三個月にもなるので、生活に困難を來し、昨十日農事試驗場後ろの長河に投身して死なうとしたのを、中營隊の兵士恩桂が見付けて救け上げてくれた、未だ死にきらなかつたので、暫くの間慰さめて、其人を家へ送つて往つた。按ずるに、京西藍靛廠等の旗民は、從前から俸給に依つてばかり生活してゐたもの であるのに、近來は數ヶ月間俸給の支拂ひを受けない爲、家に他處の兵士を兼務して居る者とか、或は別に職業を持つて居

る者ならば、どうやらこうやら生活を支へて行かれるが、其他の者は皆養ひを待つといふ有樣で、苦しさは言ふに言はれない。該營の調査に據れば、四月の月に入つて以來、全家投身した者や、自殺しやうとした者が、已に三戸もあるとの事で、其他男女各個人々々で自殺した者も、實に十二人の多數に達するに至つたといふ事である。アヽ、權力爭ひをしたり利益の奪ひッこをしたりしてゐる金持の旦那連は、如何して此樣な事のあるのを思ふことが出來ませう？

北京の市內外に於ける滿洲旗人の生活に困難してゐることは、民國になつて以來實に想像以外で、之れも政府が淸室の優待費を滿足に支拂さへすれば此人々へも生活費が幾分づヽ行渡るのであるけれ共、一回として滿足に拂はれたことがないのであるから、全く止むを得ない次第であらう。

老學究大搶生意（老學究營業上の競爭）

上海梅白格路、有兩個私塾、兩個塾師使出手段來、競爭營業端節後乙塾塾師異想天開、同他的學生說、如有能介紹兩人以上的、允許他乘自轉車半天（是他私有）普通學生也可以每星期搭小時、那些頑童、眞是投其所好、果然不上兩天、甲塾的學生漸漸稀少了

上海梅白格路に、二ッの私塾があつて、二人の塾師（其の持主兼教師）は、手段を工夫しては營業の競爭をやらかす、端午の節句以後、乙塾の先生は奇想天外の思ひつきで、其塾の學生に言ふやう、若し二名以上の學生を紹介募集した者があれば、半日の間自轉車に乘ることを許す（先生の自轉車を只で貸せるのである）、普通の學生は一週間毎に一時間づヽ乘ることが出來る、と、そこで其所の椀白共は、其好みに投じたので、果して二三日も過ぎぬ中に、甲塾の學生が段々減少して來た。「搶生意」は直譯すれば營業を奪ふであるが、玆には當然營業上の競爭を意味してゐる。「使出手段」は手段方法をめぐらすこと、「端節」は五月五日の端陽節をいふこと、「搭」は車や船などに乘

ること、「不上兩天」は二三日ならずしてゞある。

一拳驅散四車夫（一拳で四人の車夫を走らす）

前日上海江西路有四個車夫、不知何故、圍攻一中年男子、拳來脚往各不相讓、那人已經有招架不住之勢、正在危急的時候、忽來一曲背老人、一拳便將一軀幹偉梧的車夫打倒、其餘均面面相覷、鼠竄奔逃、走路的人都讚美那老者道好大的力氣啊

數日前、上海江西路に四人の車夫が何の爲か知らぬが、一人の中年男子を取り圍んで、我劣らじと打つたり蹴つたりしてゐた、其男は到底防ぎきれず、正に危險狀態に瀕するやうになつた時、忽ち一人の背の曲つた（腰の曲つた）老人が來合せ、拳固で身體の偉大な一車夫を毆り倒したので、其他の奴等は互に顏見合せて、コソ〳〵と逃げ散つてしまつた、道行く人々は皆其の老人を賞讃して曰く『恐ろして力の强いもんぢやワイ』と。「拳來脚往」は手で毆つたり足で蹴つたりする有樣を形容した成句、「老者」は老人といふこと。

不料犬兒比人忠（犬が人間よりも忠實である）

杭州旗營附近的破寺裏、有個瞎眼叫化年紀五十多、雙目視線完全沒有、討飯必同一只黑狗、好比作他的響導、夜裏也同他一起睏、瞎丐差不多完全靠狗生活、討着了飯、就與狗分吃、狗偶時離開了、丐便不能行動、幸虧、這只狗對他非常服從、大家呼這狗、叫做叫化兒子、說比人家的兒子、正要孝順忠心得多哩

杭州の旗營附近にある破れ寺の內に、盲の乞食があつた、年は五十餘りで、兩方の眼とも完全に視力を失つてゐる、物貰ひに出掛けるには必らず一疋の黑犬と一所で、恰かも犬に導き案內してもらつてゐるやうだ、夜も其犬と一所に寢起し、盲乞食は幾んど全部が犬に賴つて生活してゐるのであるから、飯を貰ひば犬と分けて食べ、時たま犬と離れた時には乞食はどうする事も出來ない、幸ひなことに、此犬が彼に服從してゐることが非

常である、世人は皆此犬を息子と呼んで居る、そして人間の子供よりも孝行で忠義な心が多いと言ふてゐる。

吃鷄肉全家殞命（鷄肉を食べて一家落命す）

浙江餘姚北鄉有一個村落叫做鄭巷庄、幾日前有一隻羽毛美麗的雉雞、從半天裏落來、恰巧落在某農家竹籬裏面死了、後來那農夫荷耨回來、看見一隻雉雞死在那裏、心窩裏歡喜的了不得、就將這隻雉雞捉到厨下、放在鍋子裏燒着到晚上闔家歡天喜地的、大吃大嚼一頓、到了次日那夫婦子女四人、都關着門一個也不起來、後來隣人破了扉走進去一看、他四人都瞑目死啞

浙江省餘姚縣の北部に一個の村落があり鄭巷庄と呼んでゐる。數日前一羽の羽毛の美麗な雉が中空から飛んで來て、丁度某といふ農家の竹圍ひの中へ落ち込んで死んだ、後で其農夫が鍬を擔いで戻つて來、一羽の雉がそこに死んでゐるのを見て、心中の喜び一方ならずで、直ぐ其雉をつかめて臺所へ持ち込み、鍋の中へ入れて煮てしまひ、晩食の時に家内中で歡天喜地の喜びで食べてしまつたが、翌日になつても其夫婦子供が四人とも、門を〆切で一人も起きて來ない、後で近所の人が戸を破つて家の中へ入つて見た所が、四人とも死んで居つた。「荷耨」は農具を肩にして「大吃大嚼一頓」は家内中が大喜びして晩飯一度に飽く迄貪り食つたことを形容した句である。

五日的小老婆（五日間の妾勤め）

北京有一位在某機關當差的、泉州人姓郭、他一向住在八條胡同的、近來因爲不慣獨宿、就託人買了二個小老婆、共計身價七百八十元、詎進門五日、忽有二個老大婆、拿一項轎子來接這位小老婆回去、泉州的老規矩新娘進門了五天就要回去會親、這位郭先生還當是他泉州的老例、那裏曉得一去不回、竟如黃鶴了、後來郭先生來這件時體告訴人家、方知道上了念秧專作上述的勾當、去騙人、名叫（叶局做親）上當的人已經不少了、現郭要想請求警廳設法偵輯云

北京に一人の某方面に就職してゐる役員があつた、泉州(福建省の人で姓を郭といふた、此男從來八條胡同に寢泊してゐたが、此頃獨り寢の寂しさに、人に賴んで二人の妾を買うた、其代金が合計七百八十元であつた所、料らずも、來てから五日目に、二人の老婆が一挺の轎子を持參して此妾を迎ひに來て連れていつた。泉州の古い習慣では、新婦が嫁してから五日目に里歸りするといふことがある。此の郭先生はやはり泉州の慣はしに從ふのであらうと信じてゐたが、豈料らんや、往つたきり戻つて來ないこと、黃鶴一度去つて又回らずの如しだ、後で郝先生其事を人に話した所でやつとソレハ念秧のペテンに罹つたのだと知れた。北京には近頃一種の念秧が有つて上述のやうな方法で人を騙ることばかりするのがある「叶局儆親」と名けて此種の詐欺に罫つた人も少くない、目下郭先生は警視廳に賴み探偵捕縛してもらはうとしてゐる。

結一對地下鴛鴦(死者の結婚談)

蘇州通和坊的程老六、是已故富翁程臥雲的兒子、老六膝下只生一子、已經死了、死的時候年十七歳、沒有婚配、老六痛子情深、很想替亡兒配一個已經作古的女郎、做陰世夫妻、久有此心、却沒有相當門戶、現在葑門帶城橋的高遠香、是前清的浙江候補知府有一個弱女、在十七歳的時候死了、生前也沒有聯婚、程氏託人和高姓說好、擇端午日迎娶、排齊全副儀仗、和生人做親一樣、把女郎神主娶回、參拜天地、送進洞房、也居然掛燈結彩、張筵請客、直是無聊到極點了

蘇州通和坊(町名)の程老六といふ人は故人となつた富豪程臥雲の子息である。此老六には只た一人の男子があつて、疾うに死んでしまつた。死んだ時が十七歳でまだ許婚も嫁もなかつたので、老六は子を思ふの情に堪へず、是非共死んだ息子の爲めに、やはり死んだ嫁を取つてやり、あの世で夫婦の契りをさせたいと、久しく其事を思うてゐたが、なか〳〵相當な家柄が無かつた。今葑門帶城橋(地名)の高遠香は、前清時代の浙江候補

知府で、一人の弱い娘があり、十七歳で亡くなつた、そして生前にも別に配遇者が無かつた。程氏は(此話を聞いて)人傳手を求めて高姓に相談を纏めてもらひ、端午の節句を吉日と擇んで娶ることにし、飾り付けはいづれも正式で、生きてゐる人の結婚と同じやうに、嫁女の位牌を娶り、天地を參拜し、床入りをさせるの儀式まで全然正式のやりかたで、宴を開いて客を招くなど、少しも略した事がなくやり通した。「作古は死去すること、陰世は冥途のこと、「聯婚」は婚姻關係、「排齊」はいろ〳〵の裝飾儀仗をとりつけること。

米貴聲中之牢騷(米價騰貴中の紛擾)

上海福州路某商店職員薪水每人總在十元之內、當此米價騰貴的時候、數元薪水自顧不週還能够養家活口嗎、他們聽得各機關特加薪水的很多、日昨遂大書『米價騰貴生計艱難、各機關都加薪水、爲什麼有幾家店主要裝聾作啞呢』字樣貼於注目的地方、該店主刮皮成性假作不見某職員見不效力、復書『咳當眞要作瞎子麼、倘你再要放出一副攻城大砲打不破厚臉出來、我們可要不對住你』了聽說、他們已經議決、如店主再無表示、就一律辭職、任其關門大吉、這也是米貴聲中的趣談呢

上海福州路の某商店店員等は、俸給が一人に付十圓以內で、此の米價騰貴の際には(わづか)數圓の俸給では自分一人ですらやり切れないどうして家族を養ふことが出來やうか?。彼等は各方面とも特に俸給を增加した所が甚だ多いといふ事を聽知り、昨日遂に『米價騰貴して生計艱難なり、各方面皆給料を增加したるに、何故ぞ、店主の聾を裝ひ啞を粧はんとするもの若干家あることや』の文字を大書して、目に付き易い場所へ貼り出したが、該店主の吝嗇橫着は極端で、見ないフリをしてゐる、某々店員等、效力が無いと見てとるや、又た『イヤ、飽迄も盲目のフリする積りなるか、若しも汝更に攻城砲で攻擊を開始しなければ、破れないやうな顏の皮が厚いならば、我々は汝に對して爲す所あるべし』と書いたとか、聞く所によれば彼

等は已に、若し店主が更に表示(增給を)しなければ一同辭職して閉店させてしまうことを決議したさうぢや、これも米が高い時の笑ひ話しである。

第二十七　傳單の譯し方

傳單とは一種のチラシで、餘程以前から支那に行はれた廣告法、社會的出事又は宣言、通告、謠言などの散布手段である。文語體と口語體の二た通りがあるが、茲に示すのは無論口語體の一種である。

京師總商會敬告商民傳單

這幾天北京的市面。無端又出許多的謠言。不是大總統要退位。就是說某天要兵變。不是說某天兵餉發不出來。[一]現在已經過了好幾天了。他們所過的謠言。就是某天大總統退位。某天兵變。某天兵餉不能發。這幾日已經過去了。[二]我大總統還是照舊的辦理國事。軍人還是照舊是保衛治安。照舊的服從命令。兵餉還是照舊的按期發給。[三]偖們這纔知道是過去的謠言。未有一句靠得住的。過去的謠言。既是靠不住。以後不知道他還要造出甚麼謠言來。[四]我們推想他們造謠言的人。可是有一個用意。[五]噌們商人。萬不可輕信他們的謠言。本會現在到處調查了一番。詳細考究了一番。纔知道謠言的利害。特意的告訴你們大家聽聽。[六]大半這個造謠言的人。不是破壞國家的亂黨。就是些無業的遊民。他們很願意我們聽信他的謠言。他就可以乘亂生事。[七]我們若是不明白這個道理。驚驚慌慌。隨便的搬家提欵等等。這就是白費錢白費力。白耽誤了工夫。於自己一點益處沒有的。[八]這種謠言。於我們商人壞處很多。市面上若有了搖動。各項商業就要受影響。銀根也要緊起來的。到那時候。可就糟了。[九]各位曾記得辛亥壬子的變故。偖們商家受了許多的痛苦。大家都是知道的。[一〇]所以癸丑贛寧的變亂。甲寅年歐洲開戰。乙卯年日本圍攻青島。緊跟著中國與日本的交涉。大家都狠鎮定的。不但市面活動。而且商界無一點損失。這是我

們商人多一番經驗。長一番見識。纔能戲得這一番利益。[一一]況且我們商人。與別界的人不同。各家都存有許多的貨物。[一二]若是聽信了這種謠言豈不是中了他人的詭計。妨害自己的營業。[一三]我們商人以後對於他們破壞黨的傳單。或是謠言。以及無意識的遊民。造出來的謠言。切切不可聽信。免得自己受累。[一四]本界探訪的狠的確。所以細細的說給大家聽一聽。

これは北京の總商會(商業會議所の如き所)から、市中の各商家へ配布したもので、『北京商業會議所商民に敬告するのチラシ』である、全文を十五節に分けて譯解してゆく。

此數日間北京の市場に、よくりなくも又幾多の謠言が發生して來た、大統領が退位しやうとするといふのでなければ、就はち某日に兵變があると言ひ、某日に兵變がありさうだと言ふのでなければ、就はち某日に兵士の給與が支給されないと言ふ。

一目下の所では已に數日間を經過してしまひ、彼等の造つた所の謠言たる、卽ち某日に大統領が退位しやうとするとか、某日に兵亂があるとか、某日に兵士の給與が支拂ひされないとかいふ、其の數日は已に過ぎ去つてしまつて。

二我が大統領はやはり元の通りに國務を處理してゐられ、軍人はやはり元の通りに治安を保衛し、元の通りに命令に服從し、兵士の給料はやはり元の通りに期日々々に支給されて居る。「照舊」は元の通り、以前と同じやうにの意。「按期發給」一定の期日々々に支給するの意。

三我々は此に於て始めて過ぎ去つた所の謠言は、未だ一句もアテになるものが無かつたことを知つた。過ぎ去つた謠言が、既にアテにならぬものであれば、將來彼等は又どの樣な謠言を造り出すか知れたものではないが。

四我々が推量して見るに彼等謠言を造る人は、一個の目的があるので

ある。我々商人は決して彼等の謠言を輕信してはならぬのである。「可是」は別に譯さないでも宜い。

五　當會では現に到る所に一とわたり調査を遂げ、詳細に研究を遂げて見て、始めて謠言のヒドイものであることを知つたので、特に諸君にお告げするのである。「你們大家」あなた方皆さん。「聽聽」は「告訴」と相應じて「お聞かする」の意にとる。

六　大部分の此の謠言を造る人間は、家を破壞するの亂黨でなければ、卽ち無職の遊民であつて、彼等は我々が彼等の謠言を聽いて信ずれば、彼は直ちに（それにより以て亂に乘じて何事かをやらうと甚だしく希望してゐるのである。「些」は幾らかの又は若干の、意味に譯す。

七　我々が若しも其の道理がわからないで、大騷ぎに慌てゝ、輕々に移轉するとか金を引出す（銀行などから）などのことをすれば、夫れは卽ち無駄に錢を費し徒らに骨折りし、徒らに暇潰しをするものであつて、自分にとりて少しの益も無いのである。

八　此種の謠言は、我々商人にとりて損害を與ふることの甚だ多いもので、市場が若しも動搖すれば、各種の商業は直ちに影響を受くるであらうし、金融は逼迫して來るであらう。其時になつては、全く失敗である。「糟了」は失敗した、しまつたなどの意。「可就」は直ぐに……であらうの意。

九　諸君は曾て記憶せらるゝ通り辛亥、壬子の事變に、我々商家が許多の苦痛を愛けたことは、皆さんが知つて居るのである。「辛亥」は第一革命のこと、壬子は民國二年の變亂を指すのである。

一〇　であるから、癸丑の江西や南京の變亂とか、甲寅の年の歐洲開戰、乙卯の年の日本が青島を攻圍した時、引續いて、支那と日本との交渉には皆々一同が甚だ靜肅にしてゐたので、曾に市場が景氣付いて居つたのみならず、其上に商業界には少しの損失すら無かつたのである、これは我々商人が一度の經驗を加へ、一段の見識を增した爲めに、そこで斯うした一番

の利益を得ることが出來たのである。「癸丑贛寧」は民國三年江西に於ける李烈鈞、南京に於ける黃興等が起した第二革命を指す。

一一況してや、我々商人は、他の社會とは同じでなく、各店とも均しく數多の商品を貯へて居るのであるから。

一二若しも此種の謠言を聽き信じやうものならば、是れ豈に他人の詭計にかゝつて自己の營業を妨害するものではない乎。

一三我等商人は將來彼等破壞黨のチラシ若くば謠言及び意識の無い遊民などの造り出した謠言などに對して、決して〳〵聽き信じないやうにして、自己の損害や迷惑を受くることを免るゝことが肝要である。

一四本會の探訪した所は甚だ的確のものであるが故に細々と諸君に說明してお聞かせするのである。

第二十八　演說の譯し方

補　菴

此演說は現今盛んに行はるゝ「白話報」の論說で一種の短かいテーブルスピーチとも見ることが出來る。

婦女職業與家庭生計

中國人男女不平等。其最大原因。卽在婦女專靠男子生活。旣然專靠男子生活。自然須受男子的驅使。久之當然生出那不平等的結果來。現在提倡女權的。議論紛紛。援歐引美。莫不持之成理。可是總辦不到。我說男女平等。本是正當的道理。可要求之有道。其道便是生活獨立。要想生活獨立。便不能不講求婦女職業。就理論說。世間凡男子可作之事。婦女都十九可作。歐戰以來。世界各國婦女職業之增進。幾乎與男子並駕齊驅。說到中國。亦不必如此。只要能把中國婦女應盡之職業。別拋棄了。便是良好之家庭。先就裁縫烹飪兩樣事說。在從前的婦女。不論他家怎樣富貴。沒有不講究裁縫烹飪的。曾文正平定南京以後。富貴亦算極了。看他的家書。常常注意他家婦女的職業。

不[五]如曾文正的更不用說。現在的婦女。可和古人大不一樣了。別說成套的衣裳。動手就雇成衣。穿鞋有鞋舖。穿襪子亦有襪子舖。簡直不知道那針線是怎麼用。舊[六]式的人家。但是有盈飯吃。都是如此。誰想那新式的人家。更是踵事增華。越發不知道婦女職業是怎麼件事。可要天天滿口講平等。恐怕歐美婦女亦不是如此。李[七]鑑堂先生在直隸作州縣時。不用廚房。幕僚都是一棹吃飯。每天是他夫人作菜。現[八]在的人家。差不多都用個廚子。再充裕一點的。婦女們亦是三天兩日下飯館。還說這叫文明。又叫開通。春[九]秋時候有個賢母敬姜。他說婦女逸則生淫。請想活活一個人。成日裡一點事亦不作。不用說就要注意到修飾上去。一個過日子人家。總是修飾的整整齊齊的。幹什麼事。[一〇]不用說就要聽聽戲。看看電影。什麼遊戲場。什麼公園。什麼市場。游遊玩玩。總不肯安然坐在家裡。[一一]再不然就得串街坊。聚賭博。生出多少閒事來。[一二]別的全不用說。要說什麼是閨範婦德。那算頑固。[一三]只是家庭生計。是一定要受的苦痛。任你算是文明。算是開通。可是是花的錢多了。這個責任。還是各家的男子擔任。[一四]男女既然平等。應該互相扶持。既不能幫助男子。還要一味給男子加負担。不管男子來錢怎麼難。在外邊挖冰取火。費盡氣力。就是喪盡天良的錢亦得弄來。弄來之後。別的事都可不辦。獨有牀頭人的衣飾費化妝費遊戲費。是不許短欠。彷彿是什麼關餘鹽欵項下。經外國人簽過字一樣。今[一五]天說的話。有點傷時。然而默察現在中國人的家庭。十家有九家是如此。越新的越加重。如此之家庭。還要天天吵着要平等。我敢替普中國的男子代喊一聲。咳呀冤哪。

支那人男女の不平等であることは、其最大原因が、卽ち婦女は專ら男子に依賴してのみ生活することにある。既に男子に靠りてのみ生活する以上、當然男子の驅使を受くべきことは言ふ迄もない所で、之を久うして當然彼の不平等なる結果を生じ來つたのであるから、現に女權を提倡す

る所の議論紛々として、歐を援き米を引き來り、之を持するに理を成さゞる所莫き有樣であるが、然し乍ら決して解決することが出來ない。

一　私をして言はしむるならば、男女の平等は、本より正當の道理であるが、之れを要求するには道がある、其道は則はち生活の獨立であり、生活を獨立することを欲するならば、則ち婦女の職業といふことを講求せなければならぬ。

二　理論上より言ひば、凡そ世間に男子の作すべき事は十中の九迄婦人にも出來るのである。歐洲戰爭以來、世界各國に婦人の職業が增進して、幾んど男子と並駕齊驅してゐる。

三　支那に就て言へば、亦た必ずしも此の如くではなく、只だ能く支那婦人として應さに盡すべきの職業を拋棄しさへしなければ、則ち良好の家庭なのである。

四　先づ裁縫割烹二た通りの事に就いて謂はゞ、從前の婦人に在りては、其の家が如何に富貴であつても、裁縫と料理の事は吟味しないものは無かつた、曾文正が南京を平定した後は、富貴も亦極點に達したのであるが、彼れの家へ送つた手紙を見ると、いつも其の家庭の婦人の職業に就いて注意してある。「烹飪」は煮炊すること料理をすることで、「曾文正」は有名なる曾國藩のことである。又此中に「算極了」の語があるが、これは富貴も極點に達した部である位の程度に譯す。

五　曾文正に如かざることは、素とより言ふ迄もないが、現今の婦人は古人と大に同じからぬやうになつた、揃へ纏まつた着物などは言はずもがな要がありさへすれば直ぐに仕立屋を雇ひ、靴を履くには靴屋があり、足袋を穿くには亦た足袋屋がある、全く彼の針仕事などは何に用ふるものかを知らぬのである。「簡直」は事實に於て、全く、實際などいふ意味に解釋する。

六　舊式の家庭でも、食べるに不自由のない家は、皆此の如き有樣であつ

て、若し夫れ彼の新式なる家庭に至つては、事毎に花々しく、愈々以て婦人の職業とはどんなものであるかを知らないので其癖毎日口を開けば平等を論じつゝある、歐米の婦人も亦たそんなものであらうか。

「有盌飯吃」盌椀で、直譯すれば椀に飯が食べるだけ有れば、卽ち飯を食べることが出來さへすれば、婦人の仕事なんぞは顧みもしないと譯す。「踵事增華」は事々何でも花やかさを加へるで、ハデやかな生活振りのこと、「越發」は益々以て、尙更、愈々益々などの意味に譯す。「怎麼件事」は如何なる事柄である乎の意で、「件」は事の數形容詞、個と見做して解釋すれば甚だ通じ易い。「可要」云々は但だ然し乍らの意を含ませてゐるので、仕事などは何だか知りもしない癖に、それであり乍ら口一ぱいに男女平等を論ずることを嘲つた語である。

七　李鑑堂氏が直隸に知州や知縣をされた時には、料理係を使はないで、幕僚が皆一つのテーブルで食事をし、毎日其の奥さんが其料理を拵らはれたのである。

八　只今の家庭では、大抵の所でコックを使用し、少し餘裕のある所では、婦女子も亦た三日にあげず料理屋へ出掛けて往つて、そして其れが文明（ハイカラの意）であると言ひ、又開化であると呼んで居る。「再」はそれから又は、それよりも更にの意に譯す。

九　春秋の時に賢母の敬姜といふ者があつたが、彼れは婦女逸なれば則ち淫を生ずと言ふて居る。考へて御覽なさい人間一人が、一日中少しの仕事もしないで、たゞおめかしにばかり意を注いで居ることは言はずともの事であるが、一個の世帶持の家庭で、只だおめかし丈けが立派に出來た所で、それが何になるものであらう乎。

一〇　言ふ迄もなく只だ芝居見物や活動見、イヤ何遊戲場であるとか、何公園であるとか、乃至は何市場へ出かけるとか、ブラ〳〵遊ぶばかりで、チツとも家に落ち付くことが出來ず。

一一若し然らざれば、則ち近所へお喋舌りに出かけるとか、賭博をやるとか、ロクでもない事を爲出來すのである。「再不然」はそれから次に左樣でなければの意「串街坊」は隣り近所を茶飲話をしてあるくこと、「閒事」は餘計な事ロクでもない事である。

一二其他は言ふに及ばずで、若し何が婦人の模範的の行ひであるかと言へば、ソレは頑固ではあるが。

一三只だ家庭の生計といふものは、苦痛を受くるに極つて居るもので、お前(婦人を指す)等のハイカラとか開化とかいふ氣任かせにして置くならば、それは費用が餘分にかゝつて、其責任はやはり各家の男子が擔任するのである。

一四男女が既に平等である以上は、應さに當然相互に扶け合ふべきものであるのに、既に男子を助けることが出來ず、おまけに一切萬事男子に負擔を加へ、男子の取る金が如何に困難であつて、外に出ては氷を掘つて火を取る程に氣力を費し盡して居るのをもお構ひなしに居る所から、良心に背いた道ならぬ金までも取らねばならぬやうになり、取つて來てから別の事には何も費さずに、獨り婦人の衣裳裝飾費化粧費遊戯費ばかりは不足あるを許されぬやうでは、宛かも關稅剩餘金とか鹽稅收入とか何とかいふ金を外國人から認印をしてもらうのと同じ樣なワケである。

「還要」云々は、其上に尙おまけの意、「一味」は何でも一切の事。「喪盡天良的錢」は天賦の良心を無くしてしまつた錢であるから、不正な方法によつて得た金のこと。「弄來」は工面して來る、得て來ること。「牀頭人」は女房又は妾などのこと。「不許短欠」は一文も不足があることを許さぬ。「簽過字」は調印したりの意。

一五本日言ふた所の語は、少しばかり時世の惡口であるが、然し目下の支那人の家庭を默察せば、十中の九家までは此の如くで、新らしがるの程其甚しさを加へて居つゝ、斯かる家庭でありながら、而かも毎日平等でな

ければならぬことを喋々してゐるのである。私は敢て普ねく支那全部の男子に代つて一言した。イヤハヤ實に馬鹿げて居るのである。

我對於定物價標準的意見

彬彬

照商業學者說。需要多而供給少。物價就貴。露要少而供給多。物價遂賤。我以爲這個定法也是對的。

一但是我看見有許多商人(不是全體)。他們因爲一樣東西需要的人多。他們雖有很多的供給。但是他們仍然加大的利錢。用高的價錢賣出去。

二他們的意思。以爲需要的多。售的必多。售的既多一定可以獲利。如果再加上高的利率。他們不是越發得利嗎。這種商人很多。三譬如賣米的。他們以爲米是必需品。所以昂貴其値。他們固然其大獲其利。那曉得貧苦的人已經是吃虧不淺呢。

四我以爲定價的標準。是不能照上法定的。因爲照那樣定來。必定有許多貧人受累。這不是壠斷麼。

五物價怎麼樣定呢。應當拿甚麼做標準呢。我以爲應當分物品爲二。一是奢侈品。一是必需品。六奢侈品就是那貴重的東西。如裝飾品之類。必需品就是日用必須的東西。如柴米油鹽之類。七奢侈品的東西。可以用大的價錢售出。甚麼緣故呢。因爲奢侈品不是人必需的。而且買的人。都是有錢的人。既然就是有錢的人來買。他們絕不吝惜幾文。就是商人加一點重的利率。也不爲多。八至於那必需品。購的人貧富都有。假若必需品用重價來賣。對於富人固無損失。一般貧人實在受了的影響了。

九所以必需品必定不能抬高。因爲抬高之後。買的人固然少些。營業也就淡些。而且對於商店信用。也很有關係。信用一失。恐怕商店就難維持了。十所以我的意思。凡必須的物品。寧可少賺幾文。切不可抬高價錢。以貽後悔。至於那壠斷的人。我也勸他回回頭纔好。

一我對於定物價的標準。就是分物品爲奢侈品同必需品二者奢侈品利率

可定高些。必需品不能。這是我的意見。諸位看對不對呢。

商業學者の說に照すに、需要が多くて供給が少なければ、物價は就はち高くなり、需要が少くて供給が多ければ、物價は遂に安くなるものであると。私は此の定義も當つて居るものと思ふ。

一但併し乍ら、私が幾多の商人(全體ではない)を見るに、一種の品を需要する所の人が多ければ、彼等は甚だ供給が豐富であつても、彼等はやつぱり大なる利益を加へ、高價を以て賣出してゐる。

二彼等の心中では「需要する者が多ければ、賣れる物も必ず多く、賣る物が既に多ければ、必らず利を獲ることが出來るから、若し果して更に大きな利益を加ふるならば彼等は益々以て利を得ることが出來るワケではない乎と。此種の商人は甚だ多いのである。

三譬へば米を賣るものならば、彼等は思へらく、米は必需品であるから其價を高くすれば、彼等は當然大に其利を獲るので、何で貧苦の人が已に損失すること淺からざるを思ふものであらう乎。「以爲」は思ふにと譯す。

四私の考では價を定むるの標準は右の如き方法を以ては定むることが出來ぬ、右の樣に照して定めやうならば、必らず澤山の貧民が迷惑するもので、此れは壟斷ではあるまい乎。

五物價は如何にして定むる歟、應さに何を以て標準とすべきものであるか、私は當然物品を分つて二と爲すべきものであると思ふ一は奢侈品である。

六奢侈品とは就はち彼の貴重なる品物で、裝飾品の如き類であり。必需品とは就はち日用必須の品物で、米薪油鹽の如き類である。

七奢侈品は、高い價で賣出すことが出來るであらう、何故であるか、奢侈の品は人の必ずしも需むるものでなく、其上買ふ所の人は、皆金の有る人である、既に金の有る人が來て買う物である以上、彼等は斷じて幾文の錢を惜むものではないから、そこで商人が多少の重き利益を加へても、亦た

多いとはしない。

八彼の必需品に至つては買う所の人には貧者も富者もあるから、假りに若し必需品を高い價で賣るならば、富める人に對しては差支へがないけれ共、一般貧民にとりては實に其影響を受くるのである。「固無損失」は直譯すれば「固とより損失無し」であるが茲には固とより大した妨げが無い位に解して宜からう。

九であるから必需品は必らず高くしてはならぬもので、價上げをした後は、買ふ所の人が當然少くなり、營業が直ぐに寂れて來る、且つ商店の信用に對しても、亦た甚だ關係がある、信用が一と度失はるれば、恐らく商店は維持し難くなるであらう。

一〇其故に私の考では、凡そ必須の物品は寧ろ幾分か儲けを少くして、決して價を上げてそして後悔を貽すやうなことをしてはならぬ。彼の利益を壟斷する人に至りては、私は亦た其人に反省すべきことを忠告すのである。

一一私が物價を定むるの標準に對し、則ち品物を奢侈品と必需品との二者に分ち、奢侈品は多少利益の率を高くすべく、必需品は則ち左樣してはならぬといふ、此の私の意見は諸君如何でありませうか。「同同頭」は反省すること、「對不對」は當れりや否やである。

財神

馮樞澄

毎到臘月三十日。是一歲之終。過了這天。就是正月朔日。一元復始。故呼爲元旦。社會人民以爲舊歲已去。萬象更新。又是一番氣象。人人歡歡喜喜。都要慶賀新年。誠爲從古至今。萬世不易的大典。惟有一種最迷信的陋俗。就是毎到三十那天晚晌。有一般幼童。挨門沿戶的去送財神。住戶不敢說不要。(那不是拿財神往外推嗎。哈哈)。多有應聲說請啦。或說早就來啦。於是再到別家去。如此跑過多處。這才許遇見一位實行迷信家。應聲而出。花數枚銅元。請進這張花紅柳綠

鬼臉神頭的紙馬兒來。您看這類風俗。可笑不可笑哇。[三]請問這些位敬財神的先生們。既然稱他爲財神。必是極有金錢勢力的嘍。可是你只要肯出倆銅字兒。他就能送上門兒來。其聲價也就可知了吧。[四]就以世俗的迷信說。當眞的有這們位財神。又何必用人送用人請呢。神者聰明正直之稱。焉有大年根底下。挨門自賣自身呀。天津衞有話。眞把個財神改透啦。這種陋俗。實在令人不解。或曰[六]你別竟說財神爺。現在歐風東漸。女權澎漲時代。眞要把財神奶奶接到家來。管保陡然而富。想什麼有什麼呦。

財[七]之一物。是人生養命根源。一時也離不開的東西。所以人人愛他求他。然[八]而求之一道。不是敎你任什麼事都不去作。每到年終。把財神請到家來。到了正月初二。闔家丑刻就起來預備供品。猪頭三牲。醇酒活魚。陳列滿棹。滿斗焚香。還點上一盅火酒。恭恭敬敬大磕其頭。心裡一個勁兒禱告。那份虔誠。斷斷乎一點含糊沒有。[九]其實往眞理上說。你若一點事兒不去作。連一個銅子兒也掉不下來。豈不是愚到極處啦嗎。[一〇]奉勸一般財迷大爺。從此把妄想發財的那條子心去掉。給他個安分守己。該作什麼。盡力去研究什麼。勿怠勿惰。永存一個自强的志願。不留一絲依賴性情。[一一]常言說。業精於勤。富根於儉。是勤儉二字。爲發福生財之本。果能把這個道理。實心實力進行。終必有富而有餘的那一天。到那時。你就是不請財神。[一二]財神還要來同你親近呢。「財神」とは福の神とでも譯すべきものである。十二月三十日になる毎に、一年の終りで、此日を過ぐれば則ち正月元日で、一元復た始まる、故に呼んで元日と爲し、社會の人民は舊年が已に去つて、萬象が更新したものとして、又もや一段の景氣を加へ、人々大喜びで、皆新らしい年を慶賀せむとしてゐる、誠に古から今日に至るまで、萬世易らざる所の大典である。

一たゞ一種の最も迷信の陋俗がある、それは三十日の晩になる毎に、一般の幼童が、戸毎に福の神送りをやることで、住民は(それに對し)要らぬと

いふ事が出來ぬのであつて(それでは福の神を拒んで押し出すワケぢやありませんか……アハヽヽ)多くは聲に應じて御招き致します、とか又は疾うにお出でになりましたとか言ふのである。「晩响」は「晩上」と同じく「夕方、夜」の意、音通で斯く用ふる。「挨門沿戸」は家々戸々卽ち門並を意味してゐる語。

二そこで又別の家へ行く、斯うして諸々方々を驅け歩き、一人の迷信を實行する者に出會せば、聲に應じて出て、數個の銅貨を散財して、此の赤色や青色に彩つた奇怪な形ちをした紙馬をお迎ひするのである(小供等から買取ること)諸君此の樣な風俗は實に笑ふ可きことではありませんか。這才許」は斯うして歩き廻る內に始めて或は迷信家に出會すことがある の意を表はす要語で「才」は普通に「纔」と書くもの「許」は或はの意である。

三此の幾多の福神を敬せらるゝ所の諸氏にお尋ねするのであるが、既に其れを福の神と稱する以上、必ずや極めて金錢の勢力を有つて居ることでありませうけれ共、然し貴下がたかつた四五錢の銅貨を出された爲に、其れが忽ち家の內へ飛込んで來たといふことでは、其價値も全く知れたものでありませう。

四卽ち世俗の迷信を以て謂へば、事實に於て此の福の神があるものとしたならば、又何ぞ必ずしも人に送り込んでもらつたり人に招き込まれたりする事がありませうや、神は聰明正直の稱であるのに、焉んぞ大晦日に門並に自分が自身を賣るやうなことを致しませうか。「當眞的」は眞なるものとして、「這們位」は「這麼位」で、神を形容する語、强ひて譯せば「このお一と方の」となる「大年根底下」は大晦日のことである。

五天津に「眞に福の神を取代へてしまつた」といふ言葉があるが、此種の陋俗は、實に人をして解せざらしむるものであります。「天津衞」は天津のことで、俗に「衞」又は「衞內」ともいふ。

六或人はいふ、君は單に福神のことばかりを言ふな、今は歐風東漸して、

女權の膨漲したる時代であるから、眞に女の福神へ家をお迎ひして來たならば、俄かに富んで、欲しいものは何でも有るやうになることが請合であると。「爺」は男神に對しての敬稱、「奶々」は女神に對する敬稱、「陡然」は「には かに」の意である。

七　財の一物たる、人生養命の根源であつて、一時と雖も離すことの出來ない品物である。故に、人々彼を好み彼を求むるのである。

八　然し乍ら、之を求むるに道は一つである。お前をして何事をも爲さないことはないとして、年の終りになる毎に、福の神を家へ招待して來て、正月二日になれば、家内中が丑の刻に起き出してお供へ物を用意し、豚の頭や三牲、良酒や生魚などをテーブル一ぱいに並べ立て、机一ぱいに香を焚き、尙更に火酒一盃を供へて、恭々敬々として大に頭を打ちつけ(おじぎすること)心の中では專念に禱りを捧げるやうな、其誠心敬虔たる一點の曇りもないことは確實であるが。

「闔家」は家中、家内中皆々の意、「三牲」は牛豚羊の三畜を神に供へること、猪の頭を神前に供することは習慣である、「大磕其頭」は神佛に祈念する時に頭を下に打ちつけること、「一個勁兒」は雜念を混へず一意に專念に一途にの意、「那份」は「虔誠」の數形容詞、「含糊」は違ふ、曖昧なるなどの意であるから、茲には其形式内容が不眞面目でないことをいふたのである。

九　其實眞理の上から謂へば、お前若し少しの仕事をも爲ず、一個の銅貨をすら出しもせずに斯くするとは、豈に愚の極ではなからうか。

一〇　一般金を欲しがる旦那方にお勸めすることは、是より以後は金持になりたいといふ妄想を一擲して、分に安んじ己を守り、當然作さねばならぬ事は、一生懸命に何事をも研究して、怠ることなく惰けることなく、永く一個自强の志願を存し、毫末も依賴の性情を留めないやうにすること が肝心であること是れである。

一一　諺にいふ「業は勤によりて精しく富は儉に根ざす」と、この勤儉の二

字は幸福富貴を生ずるの本であるから、果して能く此の道理を心を込め力を込めて進行するならば、終ひには必らず富あり餘裕あるの一日があるべきものである。

一二其時になれば、貴下方は福の神を招き呼ばなくても、福神の方から貴下に親しみ近づきたがつて來るものであります。

第二十九　演說の譯し方(其二)

泗泉

論新銀行團應注意底三點

新銀行團因拉門德和日本再三交涉底結果。已有可以復活底樣子。從我國現狀講起來。到是一個很可歡迎底一件事情。我們不主張向外國借欵。但是我們在現在這一種政治狀態之下。口說反對。於事實是毫無裨益的。他們權力在手。借者自借。我們有甚麼法子去制止。看看最近兩三年以來底情形。就可以明白了。我們消極的贊成新銀行團就是因爲有這種不得已底苦心啊。

二新銀行團底好處。就是想救濟單獨借欵底弊害。和打破從前勢力範圍底謬說。這兩層都是防止中國破滅底救急辦法。將來新銀行團能否貫澈這兩個目的。固然不可知。而當初美國提議底時候。的確是這種精神。我們盼望他們抱定宗旨。務必使當初底精神。着着表現出來。如果能夠這樣。那就不但爲中國造福不淺。爲世界除却禍根也不少。

四我們對於新銀行團有這種希望。所以爲新銀行團有三點應該注意的。

第一新銀行團代表去年在巴黎所議決底大綱之中。第五條底規定『卽列國既得而尙未着手底利權。一概讓給新銀行團』。絕對不宜稍有變更。

五這一條就是打破勢力範圍底基礎。如果虛有條文沒有實質。那麼新銀行團底存在價値必定完全失掉。日本方面。這幾天雖然有讓步底消息。究竟讓步底程度如何。讓步底實質如何。因爲他還沒有發表出來。我們很難下以精確的批評。

六但是據我們所聽見。他所讓步的。不過有廣

義狹義之差而已。換句話說。就是程度有點不同罷了。而滿蒙除外底實質。依然沒有取消。勢力範圍底主張。依然沒有拋棄。

他六只肯把滿蒙未得底權利。交出給新銀行團。既得已著手的。不用說了。既得未着手的。也不肯拋棄。你看這種讓步。可否叫做讓步。實在是一個大疑問。如何就能說他已經肯拋棄滿蒙除外底主張。如果各國不能堅持到底。因爲怕煩難底緣故。姑且承認。那麼這種新銀行團。實在是掉當初底精神。我們就不能不反對了。

第七二如新銀行團能够照當初底精神成立起來。那麼對於借款一層。一定要把政治借款和經濟借款分得明白不可。現在政府所有一切借款。都是經濟借款其名。政治借款其實。一面借款。一面揮霍。像這種狀態再下去幾年。簡直是不成一個國家。所以我們盼望新銀行團。先把政治經濟兩種借款。定一個嚴格底界線。政治一概不借。經濟借款還要嚴重監視用途。這句話說出來。我們也覺得很可恥。但是現狀如此。

不能不這樣做的。

第八三新銀行團要以發展中國扶助中國做目標。不要專替各人底本國謀利益。中國底政治。能彀修明。中國底實業。當然能够振興起來。中國底文化。也當然能發達起來。各國因此所得底利益。的確不少。不須像日本那樣專門乘火打刼。利用人家國內紛亂底時候。來攫取利權。因此爲這樣辦法。就一極短期間看起來。固然可以說是成功。若是兩國永久的國交上看來。的確是失策。所以我們盼望新銀行團莫要蹈這種覆轍。

一。以上不過我們一時底感想隨手寫出來。以後我們還想提出較精細的意見。和內外諸君討論。現在拉門德君快要到北京來了。所以我們先舉出三大要點。請拉君注意。

新銀行團はラモンドと日本と再三交渉の結果、已に復活するやうな樣子があつて、我國の現狀から論じて來れば、寧ろ甚だ歡迎すべき一個の事

たるべきものである。「底」は現今慣用せられて居る「的」の字と同じもので、昔の支那語には普遍的に慣用せられたものである、「到是一個」云々の到は「倒」と音通の混用字で、「却つて」又は「寧ろ」と譯すべきもの。

一　我々は外國に向つて借款することを主張するものではないが、然し乍ら、我々が現在に於ける此の一種の政治狀態の下に在りては、口に反對を唱へた所で、事實に於ては毫も裨益する所がない、彼等政府當局者を指す)は權力が其手にあるので、借りる者は自らにして借りる、我々は如何なる手段ありてか之を制止することが出來やうか、最近兩三年以來の情況を見れば、就はち明らかになるのである。我々が消極的に新銀行團に贊成するのは、就はち斯の如き已むを得ざる苦心あるが故である。

二　新銀行團の良い處は、則ち單獨借款の弊害を救濟することゝ從前の勢力範圍の謬說を打破せむと欲するのであつて、此の二種は都て支那の破滅を防止するの救急辨法で、將來新銀行團が能く此二種の目的を貫徹すると否とは、固とより知ることは出來ぬが、然かも當初米國の提議した時には、確實に此種の精神で、我々は彼等は主義を抱定して、是非共當初の精神をして、着々表現し來るべきことを希望する。若し果して此の多くなることが出來れば、其れは就はち啻に支那の爲に幸福淺からざるのみならず、世界の爲に禍根を除却することも亦た少なからぬのである。

三　我等は新銀行團に對し此種の希望あるが故に、我等は新銀行團は三點の應さに注意すべきことあるを思ふ、第一新銀行團の代表者が去年パリーに於て議決した所の大綱の中、第五條の規定なる『列國が既得せるものにして尙未だ着手せざるの利權は、都て之を新銀行團に讓與するものとす』は絕對に聊かたりとも變更すべきものではない。

五　此の一條は卽ち勢力範圍を打破する所の基礎で、若し果して徒らに條文のみあつて實質の無いものとせば、然らば新銀行團の存在價値といふものが、必らず全然失はれたもので、日本の方面は、此の數日間讓步した

といふ消息があるけれ共、畢竟する所、讓歩の程度は如何である乎、讓歩の實質は如何である乎。彼れは未だ發表しないのであるから、我等は精確の批評を下すことに於て甚だ難いのである。

五　然し、我々の聞いた所によれば、彼の讓歩した所のものは、廣義狹義の差別があるのみに過ぎないといふ。言葉を換へて言へば、就はち程度が多少同じでないといふばかりであつて、而かも滿蒙除外の實質は、依然として取消すことなく、勢力範圍の主張は、依然として拋棄しないのである。

六　彼れは只だ滿蒙に於ける未得の權利を新銀行團に交付することを承諾し、既得のものにして已に着手したものは勿論のこと、既得のものにして未だ着手しないものは、やはり拋棄することを承諾しない。見よ斯かる讓歩は、讓歩と呼ぶことが出來るか否や、實に一個の大疑問で、如何んぞ彼は已に滿蒙際外の主張を拋棄することを承諾したものと言ふことが出來ませうや、若し果して各國が最後まで其主張を堅持することが出來ず、煩難を恐るゝの故に因つて、先づ姑らく承諾したものならば然らば此種の新銀行團は、實に當初の精神を失ふたもので、我々は卽ち反對せざることを得ぬのである。

七　第二、若し新銀行團が當初の精神通りに成立することを得るならば、然らば借款の一事に對しては、是非政治借款と經濟借款とを明白に區別せなければいけない、現在の政府一切のあらゆる借款は、都て經濟借款とは其名であつて、其實は政治借款なので、一面には借款して、一面には濫費する、此の種の狀態にして今後數年を過ぐるが如くむば、全く一個の國家たることが出來ないであらう、故に我々が新銀行團に希望する所は、先づ政治經濟兩種の借款を、一個の嚴格なる境界線を定め、政治には凡て借款に應ぜず、經濟借款も又嚴重に用途を監視せられたいと是で、此數句を言ひ出すことは、我々も甚だ恥ずべことを感ずるのであるが、但だ、現狀が此の如くであるから、斯樣にせなければならぬのである。「能穀」は何々し得

るならばの意、「揮霍」は贅澤に金錢を濫費すること、「再下去幾年」は、更に(今後)幾年を過ぐるならばの意、「一概」は全然、全部、都て、皆、悉くと譯解する。

八　第三、新銀行團は支那を發展せしめ、支那を扶助することを以て目標と爲すことを要とし、專ら各人の本國に替つて利益を謀ることを不可とする。支那の政治にして修明することが出來れば、支那の實業は當然振興することが出來、支那の文化も亦當然發達することを得らるゝから、各國が此に因りて得る所の利益は、確かに少なからざるもので、日本の樣に火事場泥棒を專門にして、人の國家內の紛亂の時に、來つて利權を搔浚ふ必要はない、是に因り斯かる處置法は、極めて短期間から看來れば、固より成功したと言ふことが出來る、けれ共若し兩國家永久の國際關係から看來れば、的確に失策である。故に我々は新銀行團が斯かる覆轍を蹈まぬことを希望する。

一〇　以上は我々が一時の感想。手任せに書出したに過ぎぬから、將來我々は較や精細の意見と內外諸君と討論したのを提出せむと考へて居る、現にラモンド君は最早や北京に入らむとしてゐるのであるから我々は先づ三大要點を擧げ出してヲ君の注意を請ふのである。

說工商

商與工。截然兩業。但有很密切的關係。工業幼稚。商業當然不能發達。這是老生常談。記者現在再提這句話。有一個絕大的原因。一我國各大都會。如天津漢口上海各埠商業。都比工業活動得多。因爲做的買賣。都是外國貨。所以國內工廠雖少。而可以販賣的外國貨却不少。二所謂天津漢口上海三大市場。簡直是外國貨的市場。要是外國貨有一天斷絕根源。那時候的天津漢口上海。恐怕不成局面了。三現在聽說各國工業家。爲了各國所得稅的苛重。將要拿僅僅維持工廠爲條件。做製造出品數量的標準。四又爲金價的低落。不利與東方貿易。所以對於東方供給的貨物。將來定要減少輸出。

這兩種現像。已經發見端倪。請各埠商家細細的觀察。便曉得很確鑿的。要是各國的工商家不另找活路。那麼我國各埠所能吸收的歐美貨物。必定縮到極小數。而國內工業近時雖像已稍有活氣。但出品究竟微乎其微。人家的貨物不來。自已的貨物不够。怎麼可以應付市面呢。爲今之計。我們商界中人營業已經成功的。便應當分一部份資金。去經營將來市面上所需要的工廠。同時工商業依種種方法。互相聯絡。互相發達。這不是記者發見的辦法。況且工商界中有已然如此進行的。不過國外的情形變遷。我們從此要努力猛進罷了。

商と工とは、截然たる二つの業であるが、但し甚だ密接なる關係があるのである、工業が幼稚であれば商業は當然發達することが出來ぬ、これは老生の常談で、記者は今又た此話を以て、一個の絶大なる原因があるとなすものである。

一我國の各大都會、天津、漢口、上海各地の商業は、皆工業に比すれば景氣が活潑なことが夥しい、爲す所の商業が都て外國品であるが故に、其爲め國內の工場は少ないけれども、而かも販賣することの出來る外國品はなか〳〵に少くはない。

二謂ふ所の天津、漢口、上海三大市場は、全く外國品の市場であつて、若し外國品が一日杜切れることがあれば、其時には天津、漢口上海は恐らく體裁をなさぬであらう。「要是——」は「若是」に同じ。

三今聞く所によれば、各國の工業家は、各國所得稅の苛重なるが爲に、只だ僅かに工場を維持するだけの條件をもつて製造生產する所の數量の標準として居。

四又金價の低落に因つて東洋の貿易に不利なるが故に、東洋に供給する所の商品に對しては、將來必らず輸出を減少するであらうとの事である。

五此の二つの現象は、已に其端を發現して居る、請ふ各地の商家細かに

觀察せよ、便はち甚だ確實であることが解るのであつて、若し各國の商工家が別に活路を求めなければ、然れば我國各地の能く吸收する所の歐米の貨物は、必らず極く小數に縮少せらるゝのであつて、而かも國內の工業は近來已に若干の活氣があるやうであるけれ共、然し生產する所の品は結局微の又微なるもので、他(外國を指す)人の商品が來なければ、自分の品では足らぬのであるから、如何して市場を滿足せしむることが出來やうか？「發見」は「發現」であらはれること、「端倪」は其兆候又は其一端といふこと、「確鑿」は確かであること、「微乎其微」は極めて少しばかりといふこと、「應付」は需要に應ずることである。

六今の計たる、我々商界の人にして營業の已に成功した者は、便はち應さに一部分の資金をもて、將來市場に需要する所の工場を經營し、同時に商工業者が種々なる方法を以て、互相に聯絡し、互に發達を助くべきもので、是れは記者の發見したやり方ではない。

七況してや商工界中が已に比の如くにして進行すると云ふことは、是れ國外形勢の變遷に過ぎざるもので、我々は今後努力して猛進しさへすれば宜しいのである。

政貴有恒

奇光

前清末業。政令不一。以致弊竇叢生。人心離二。當是時新舊兩派未能融洽。新黨設一謀。必爲舊黨所破壞。舊黨建一策。亦爲新黨所阻撓。擧凡一切政事。不問其得失利害。皆以感情用事。究其結局。有利的皆未見諸實行。有害的悉已次第擧辦。到了改建民國之後。雖將腦筋簡單之守舊派。略事淘汰。而一班次舊之官僚派。仍側身其間。於是乎我國的政事。更屬龐雜了。號令不一。政出多門。中央政府。有如傳舍。仰武人之鼻息。受督軍之頤指。一旦激成反響。則中央卽居爲和事老人。旣無主見。更無振作。從前是新舊不合。彼此互相傾軌。互相排擠。今日是新與新舊與舊皆不合。所以每聚議一事。而發

言盈庭。無人敢執其咎。至其結果。則不但朝令夕更。甚至命令將到印鑄局。旋卽撤銷了。[三]我中華民國。照着這們一國三公的發政令。敎我們爲國民的如何適從呀。

[四]今以淺而易明的事作個證據。就知道我國的政事如何了。民國一二年的時候。當局欲在正陽宣武二門的中間。拆一段城墻。以便貫通內外城。[五]於是勘查路線。凡在路線內商之鋪住戶。皆勒令拆讓。內外城共拆數百家。經此一番更動。其中有哭的(滿拆去啦)。有笑的(拆了障碍物。而臨了大街了)。有急死的(琉璃廠中間路南。有信社舖長朱友堂。因該社拆讓二次。心中一急。遂至一病不起。嗚呼哀哉)[六]果然政府始終其事。雖被拆數百家。受了損失。而未嘗不予大多數人以便利。自南北新華大街拆竣之後。馬路亦按段修齊。萬沒想到。從這道城墻上會出了阻力。[七]據友人傳說。應拆之城墻南。有兩個煤廠子。很有點兒勢力。在欲拆該段城墻之前。該廠等卽遊說負地方責任之某公。言此段城墻若拆通。有碍風水。大不利於國家。某公爲所動。至實行拆城之日。某公卽派兵阻止。[八]你瞧我們國的官事。够多們亂哪。我今天亦說句迷信話吧。我國近年以來。南北對峙。就是因爲南北新華街。未能交通的緣故。好信風水的主兒。以我言爲如何。[九]此外尙有兩岐的政令。如警廳禁放花爆、而門局收花爆稅。賭禁森嚴。又收麻雀稅的。此類的事情很多。不勝枚擧。今略述微細事情數件。足見我國政令如何了。

嗟。

これは、政治は恒あるを貴ぶといふ題で國家の政治は一定の方針を定めて進むべきもので、改廢常なきを致してはならぬことを論じたものである。前淸の末には、政令一ならずして以て弊害の群生するを致したので、人心は分離した。此の時には新舊兩派が融洽することが出來ず、新黨が一謀を設くれば、必らず舊黨に破壞されてしまひ、舊黨が一策を建てれば、亦た新黨に阻まれてしまう、凡そ一切の政事は、其利害得失を問はない

で、皆感情を以て事を爲したのであるから、其結局する所になると、利のある者も皆未だ實行せられず、害有る者も已に悉く實行するといふわけである。

一民國に改まつてから後は、頭腦の簡單な守舊派を略ぼ淘汰したのであるけれ共、然かも一と組舊派に次ぐ所の官僚派といふのがあつて、仍ほ身を其間に挾め置くのであるから、それ故我邦の政事は更に混雜極まりないもので、號令一ならず、政は多くの門から出る、中央政府は驛舍のやうな有樣で、武人の鼻息を伺ひ、督軍の頤指を受ける、一旦反響を激成するやうなことがあれば、則ち中央政府は直ちに中間の事勿れ老人といふやうな格で、既に一定の主張もなければ、又更に振作もない。

二從前は新舊が合はないで、彼此互に相軋轢し、互に相排擠してゐたが、今日では新は新と、舊は舊と皆合はないのであるから、一事を聚まつて議する度毎には、發言庭に盈つるの樣であるが、誰も又其責任を負はうとする者がなく、其結果に至つては、則ち朝令暮改であるのみならず、甚しきに至つては、命令が印鑄局（支那政府內閣附屬の印刷局）に到らうとするのに、旋つて卽時取消すやうな有樣である。

三我が中華民國は、斯かる一國三公のやうに政令を發するのに照して見れば、我々國民たる者をして如何に適從せしむるのであらう乎。

四今卑近簡明の事實を以て證據として見れば、直ちに我國の政事如何を知ることが出來やう。民國一二年の頃、當局者は正陽、宣武二門（北京市中）の中間に、城壁を取拂ひ、以て內城と外城との聯絡をつけやうと欲し。

五爲めに其道筋を測量し、凡て其地點內に在る商店や住宅は、皆强制的に取除けしめ內外城合計數百戶を取拂はしめた、此の騷ぎの爲めに、其中には泣いた者もある（皆な壞されたので）笑つた者もある（障碍物を取拂はれた爲に自分の家が大通に面したので）憤死した者もある（琉璃廠の中程路の南側なる信社の主人朱友堂は、該社が二度迄も破壞された爲に、心中

大に痛心憤激し、遂に病氣となつて、死んでしまつた)。

六 果然政府が其事業を終始一貫してやれば、毀された所の數百家は損失を受けたとは云ふものゝ、未だ大多數の人に便利を與へないといふ譯ではなかつたが、南北新華大街を毀し終つた後、大通りの道を順次に修築した時に、思ひ掛なくも此の城壁から故障が出て來ることになつた。「一番更動」改めて動搖さする騷ぎのこと、「拆」は家屋などを毀して取拂ふの意、「嗚呼哀哉」は死去したりといふこと、「不予」は與へずと同じ「按段修齊」一區劃々々々に分つて道の修築を竣ること、「萬沒想到」全く思ひも寄らぬこと、「阻力」は故障のこと。

七 友人の傳へた所に據れば、毀さねばならぬ該區劃內の城壁南に、二軒の石炭問屋があつて、甚だ(去る方面に對し)勢力家であつたので、其城壁が取拂はれむとした前に、該問屋等卽ち地方の責任者たる某公(北京市政の責任者)に遊說して、此所の城壁を若し毀して取除けやうならば、風水に妨げがあり、大に國家の爲に不利であると言ふた爲めに某公は(其說に)動かされ、取拂實行の日になると、某公から直ちに兵士を派遣して阻止したとのことである。「風水」は古來支那人の最も氣にする所で、土地の方位を論ずる一種の習慣的臆說である。

八 御覽なさい、我々の國事といふものが、如何に亂雜なるものであるか、私も今日は一つ迷信話をして見やうに、我國が近年來、南北相對峙して居るのは就はち南北新華街が未だ交通聯絡することの出來ない爲に因るものである、無暗に風水を信ずるの諸君、私の言ふた所は如何である乎。「够多們亂」は何とまあ亂雜なものではありませんかの意。

九 此他尙ほ二た股の政令が有ること、假令へば警視廳が爆竹を放つことを禁止する(一方には)門局では爆竹稅を徵收して居るし、賭博は嚴禁せられて居るにも拘らず、而かも又(一方には)麻雀稅を徵收して居る、此種の事は甚だ多く、枚擧に遑がない。今略ぼ微細の事情數件を述べた迄であ

るが、以て我國の政令如何を見るに足るであらう。アヽ……。「門局」とは北京の崇文門稅務局をいふ。「麻雀」とは一種のカルタに類した賭博具で、上中流間に大流行を極めて居るものである。

第三十　演說の譯し方（其三）

引き續いて大同小異の演說を更に一章だけ講解する、譯すには幾度も一句づゝ句切りて讀んだ後で一語づゝ解し、更に一句づゝの意味に及ぶべきものである。

交友

筆痴

我們人處世。交朋友這件事。是短不了的。可是有損友有益友。交着益友。我們可以得好。交着損友。就要受害。這可千萬要謹愼哪。擇其良善的。我們合他交。那心術不正的。可別結爲知己呦。俗語說。畫虎畫皮難畫骨。知人知面不知心。別看他外表很是那們回事。也像個人兒似的。談吐是滿口仁義道德。其實他這一肚子……損人利己。等到他施展出那種種毒辣手段。眞能要你的命。那時你再後悔。可就無及啦。故此說我們交朋友。在未深交之先。必得品一品他這人的舉動心術如何。如其樣樣光明正大。至誠無私。我們再合他結拜。方不至於半途而廢。落一個有始無終。

我們交着良友。與他時常的在一處。他既是個完全好人。將來我們定然也增進人格。所謂挨金似金。挨玉似玉。近朱者赤。近墨者黑。我們有了過處。他來勸告我們。我們有了好處。他來贊助我們。增學問。長知識。患難相扶。輔道成仁。這們一來。我們算交着良友啦。受益實在不淺。倘若是個勢力小人。也同他結爲知己。那害處可就說不盡啦。小則損失名譽。大則傾家敗產。碰巧連命都許饒上。你有錢的時候。他很像朋友似的。偶然遇著點爲難的事。他也能爭先恐後的去替你辦。事事順着你的意思。所做的那些事情。叫你照著那樣都可心。

沒事同你吃喝走遊。到處把你捧的挺高。等到你蠟盡燈殘(沒錢了)的時候。他老先生早已溜之乎也咯。再要打算找他。連個影兒也不見了。即或無意之中遇到一處。你還沒訴苦哪。他先有套哭訴兒。眞能聽個透心兒凉。臨完了他還正顏厲色。派你許多不是。說罷。找個台階兒一下。從此見不着面兒了。到那時才想說。早知他這樣沒良心。絕不該合他結交啊(晩了)。可見交友之道。我們人千萬要愼之於始嘔。

我々人間が世の中に處するには、朋友に交るといふ此の一事は、缺く可らざる所のものである。然しながら、損失あり益友あり、益友と交はれば、我々は良いことを得るであらうし、損友と交はれば、即ち害を受けるであらうから、彌が上にも謹愼を加へねばならぬ、其善良なる者を擇んで我々は其人と交はるべく、彼の心術正しからざる者とは、結んで知己となつてはならぬ。

一諺に曰く、虎を畫くに皮を畫くも骨は畫き難い、人を知るに顏を知るも心は知られないと、其人の外面は如何にも尤もらしくて亦た人間らしく、口を利けば一言一句仁義道德であるが、其實其人間の腹の中は……人を損して己を利するで、段々其人が種々惡辣な手段を施こして來るやうになつては、眞に君の致命傷で、其時君は後悔しても、最早や及ばないであらう。「那們回事」は「那麼個事」である、「像個……似」は似て居ること、……らしくあること、「要你的命」はお前を苦しめ拔く、お前の命を取るやうなものだの意。

二此の故に、我等が朋友と交るには、其未だ深く交はらざるの前に必ず其人の擧動、心術如何を鑑別し分けることを肝要とし、若し其樣子が光明正大であつて、至誠無私ならば、我等はそこで(始めて)彼と交際を契り、契りたる以上は半途にやめるやうな事をせず、一個の始ありて終無きに落つる事のないを要すと言ふのである。「品品」は鑑別すること、識別すること、「合地結拜」彼と結拜する即ち契りを立てゝ眞の友となることをいふ「方」

はそうしたならば、そこでの意を含む。

三　私等が良友に交り、彼と常々一處に居て、其人が既に完全なる良い人であるならば、將來我等は必らず人格を增進することも出來る、所謂金に近寄れば金に似、玉に接すれば玉に似、朱に交はれば赤くなり、墨に近づけば黑くなるもので、我等に誤つた處があれば、其人は來つて我等に忠告するであらうし、我等に良い點が有る時には、其人は來つて我等を贊助するであらう、學問を增し、智識を長じ、患難相扶け、道を輔けて仁を成す、此の如くであるならば、我等が良友に交はる所の利益たる實に少なからざるものである。

四　若しも勢力に阿附するやうな小人であるならば、亦た彼と結んで知己となるの害處は言ひ盡されない、小は則ち名譽を損失し、大は則ち家を傾け產を敗り、場合によりては一命迄も或は召上げらるゝやうな事にもならう。「碰巧」は運が惡ければの意。

五　君に金がある時には、彼は甚だしく朋友のやうであると共に、偶然に少しく困難な事にでも遇はゞ、亦た彼は先を爭ふて後るゝ事を恐るゝやうに君に代つて處置するであらうし、何事でも君の意見に同じて、爲す所の仕事は、君が見て氣る入るやうにする、仕事のない時には君と一緒に飲食もし遊びにも行かう、到る處に君を持ち上げることが高いであらうが、君の蠟盡き燈殘する(金の無くなること)に及んでは、其老先生(冷嘲の語)は逸早く逃出して去るであらう。「可心」は氣に入る、意に適すること、捧的挺高」は高々と持ち上げること、おだて上げること、「早已」は疾く、逸足出して、早々となどの意、「溜之乎也」は逃げてゆく、スタコラ逃げ出す、コツ〳〵と姿を隱すこと。

六　其時彼を尋ねやうとした所で、影で形も見えない、若し又た不意に遭遇した所で、君が其苦難を訴へなくても、彼は先きに定り文句の哀しさうな慰めを言ふ、聽けば眞に淸々するのであるが、終ひになれば彼は尙顏を

正し色を厲まして、君が幾多の缺點を述べ、言ひ終つてから其場所で別れたが最後、其れから以後は更に顏を見ることがないであらう、其時になつてから、やつと考へがついて(氣が付いて)早く彼が此樣に良心の無いのを知つたならば、斷じて彼と交際するのではなかつた(晩れてしまつた)と言ふやうになる。

七友に交はるの道は、我等は彌が上にも其最初に注意を加へねばならぬことを見得るであらう。「才想說」の「才」は「纔」の音通でやうやう、やつと、始めてなどの意である。

打破商界僥倖的心理

我國現在的商界。有一種極壞的心理。就是僥倖兩個字。你看社會上投機的事業。那一樁不是從僥倖心來的嗎。就像北京上海各處的商埠。隨便什麼生意多有投機的事情。如京鈔。煤油。金子。棉紗。麪粉。花生。米麥等。統是買空賣空。有的叫做拋盤生意。中間做這種生意。因而傾家蕩產的。不知道有多少人。一吾有幾個朋友。在商界中可算殷實的。後來存了碰大運的心。也做了這種投機事業。不多幾時因爲所拋出的麵粉。忽而大漲起來。買進的人。大家向他取貨。他那裡買得進。後來越漲越大。就是每包貼價四五錢銀子。也辦不到。統計他所做的麵粉有三四萬包。倘使貼價結算。要虧二萬多兩銀子。他沒有法子。就逃走了。二又北京前者有幾家錢鋪倒閉。也是因爲買空賣空。唉。投機的事業。有這樣的結果。吾商界同人。可以當爲殷鑑。快快覺悟了。並且這種冒險的生意。失敗起來。不但一個吃了虧。甚至牽連到金融界。使得市面受極大的影響。

三現在多少營商業的人。不朋白這個道理。總以爲賺錢是要靠着運氣。所以他們做事。總是出於僥倖的心。故有種種投機的商業。總想以全不費力的原因。得收最大的結果。天下那裡有這種道理。四請看那班投機家。他們雖是偶然一次得到勝利(這實在是千百分中之一)。然而他們

如果再做第二次的投機。那必定失敗無疑。看看那些做盧布的投機家。有幾個得了好結果。所以我盼望諸位。要曉得不費心事。是得不到好效果的。勝利之權。是操在我們自己。俗語說得好。(種瓜得瓜。種豆得豆)。諸位想要好結果。便要竭力去種因。財神菩薩是靠不住的。靠了他便要倒霉了。

有人對我說。我們商家除投機家之外。何嘗不終日奔波竭力去幹。爲什麼有許多失敗的呢。

喙。雖是竭力去幹。但是亂七八糟的去做。也能得好結果嗎。老實說辛苦到死。都不行的。

我們走到各家商店去看。差不多都供了一個財神菩薩。這就是表明我們中國的商業都是僥倖的心理。他們心下作一種見解。以爲我們人是沒有力量的。我們一切的行爲。都要暗中聽運命的指示。生意的勝利或失敗。也都是運氣所指示的。我們就好像傀儡一般。全由別人提線索。因此中國的商業。就暗暗失敗在碰運氣中。成了現在這個樣子。眞是可歎可歎。因爲他們既然抱這種碰運氣的見解。所以便不曉得因果律。凡是什麼事情必要有因。然後才有果。比方我們種一顆菓子樹。天天要淋水。又要下相當的肥料。總要有番心去對付他。這便是因。將來得的菓子便是果。若是種了樹。沒有心去對他。或是少幾分心去對他。那他所結下的菓不是沒有。就是減少。因此我們曉得想收多少的果。便要種多少的因。

你看種起樹來。隨便淋些水。隨便下些肥料就行嗎。不行的。必得要懂得這顆樹的性質。要什麼原質去培養。要多少的原質才合宜。某種肥料含有什麼原質。有多少成分。下到這顆樹里。相宜不相宜。這都必得要研究的。要這樣清清楚楚下去的肥料。才能拿得定有最好的結果。我要問現在的商業家。對於商業上的道理都明白嗎。對於世界的情形都清楚嗎。我看很是少數。他們的知識。不過是他們經驗得來的。

而且這個經驗還是破碎零星。沒有系統的經驗。他們的眼光。只看見本埠。講到別個商埠便茫然了。世界情形更不消說。(一)這樣沒有知識。沒有眼光。雖終日奔波。也是徒勞。這雖不是和投機家單靠運氣一般。而帶著幾分賭碰的性質。也有點相同。

(二)諸位想操必勝之權。那我便奉勸諸位。快快打破這僥倖的心理。快快去研究統系的學問。快快去考察世界大勢。

我邦現今の商界には、一種の極めて惡い心理たる、卽ち僥倖の二字が有る、看よ、社會上投機の事業は、一個として僥倖心から來たものならざるはないでない乎。就はち北京、上海各處の商業地の如き、如何なる營業たるに論なく、多くは投機の事情がある、北京紙幣、石油、金、棉絲布、麵粉、落花生、米麥等の如き、總べて空買空賣で、拋盤生意と呼ぶものが有り、中間に此種の營業に從事する者は、其の爲めに家產を蕩盡した者が幾何あるか知る可らずである。

(一)吾輩に數名の友人があつて、商界では富裕に算へらるべき者であつたが、後ち大幸運に打當るの心を抱いた爲めに、此種の投機事業に手を出し、久しからぬ內に投出した所の麵粉が、忽ち騰貴して來て、買方が、全部彼に向つて現品の引取を迫り、彼が迚も買進むことの出來ない內、更に益々昂騰し、一包每に四五錢の銀を割增しても、取引が出來ぬやうになつて、合計彼の作つた麵粉三四萬包で若し割增して結算しやうものならば、二萬餘兩の銀を損しねばならぬ所から、彼は是非なく、逃亡してしまつた。

(二)又た北京で前きに數戶の兩替屋が倒れてしまつたのも、亦た空買賣の爲であつた。ア、、投機の事業に、此の樣な結果の有ることは、吾が商界同人が、當さに殷鑑とすべく、速かに覺りを開かねばならぬ所である。殊に此の種の冒險な營業は、失敗して來れば、啻に一人が損失を蒙るばかりでなく、甚しきに至つては金融界に迄卷添を喰はせ、市面をして極めて大なる影響を受けしむるに至るものである。

三　現今商業を營む幾何かの人々は、此の道理が明らかでなく、總て金儲けを以て運の有る無しに依るものとして居る、故に彼等が仕事をするには、總じて僥倖の心から出て、種々なる投機の商業をやり、どうしても、全然骨を折らぬ所の原因を以て、最大の結果を收めむことばかりを想うて居るが、天下に如何して其の樣な道理があらう乎。

四　彼の一組の投機家を見よ、彼等は偶然に一回勝利を得ることがあると雖(それは實際に於て千百分中の一であるが)、然し彼等が若し果して第二回の投機をやらうものならば、其れは必らず失敗に定まつて居ることは疑がない。彼のルーブルで投機をやつた人達を見ると、若干の好結果を得たものがあつたであるから、私は諸君に向つて心を費はない事は、良い結果を得ることが出來ないものであつて、勝利の權は、我々自己の手に操られるものなることを承知せられよと希望するのである。

五　諺に良く言ふてある、瓜を蒔けば瓜を得られ、豆を蒔けば豆が得られると、諸君良い結果を得られむと欲せらるゝならば、便はち力を竭して、其種を蒔きつけられよ、福神菩薩は當てにならぬものであるから、其れに賴るやうなことがあれば、便はち失敗してしまう。「去種因」は果を得やうとするならば先づ去つて因を種えよの意、「倒霉」は失敗すること、駄目になることゝ、ベケになるなどいふ意の俗なる方言である。

六　私に向つて、我々商家が投機を除くの外に、終日一生懸命に奔走するにも拘はらず、何故失敗することが澤山ある乎、と問ふ人があらば、イヤ、力を竭して從事したにもせよ、只だ無茶苦茶に從事したのでは、亦た良い結果を得能はう乎。切實に言へば、死ぬ程苦勞をした所で、迚も駄目である(と私は答へる)。「何甞不……」は反語で、甞つて終日奔走し力を竭して從事しないことはなくてもと譯解する。「亂七八糟」はダラシ無く、秩序なく、滅茶苦茶なることである。

七　我々が各商店に行つて見ると、大抵皆福の神を供へて置くが、是れ則

ち我が支那の商家が凡て皆僥倖の心理であることを表明して居る、彼等は心の中に一種の見解を作して思ふやう、我々人間は力の無いものであるから、我々一切の行爲は、都べて暗中に運命の指示する所に聽從せねばならぬ、營業上の勝利とか或は失敗とかは、亦た皆運命の指示するもので、我々はたゞ傀儡と同じやうなものであつて、全然他から手がゝりを與へらるゝものであるとして居る。此故に支那の商業は暗々裡に惡運に失敗して、目下のやうな有樣に成つたので、眞に嘆ず可きである。「差不多」は大抵、多くはの意、「供了」は神佛を飾つて置くこと、「提線索」は手がゝりを引き出すことである。

八　彼等（商業家を指す）は既に斯かる運に當るやうな見解を抱くが爲めに、便はち因果律を悟り知らないのである。凡そ何事にせよ必らず因ありてこそ、然る後に果あるものである、譬へば我等が一株の果樹を植えれば毎日水をかけてやらねばならず、又相當の肥料を施こすことが必要で

總じて其れに一廉の心を注ぐことが肝要であるが、是れ卽ち因で、將來得る所の果實は則ち果である。若し樹を植えても、氣をつけてやらないとか、若くば多少注意が足りないならば、其の樹の結ぶ果實は無でなければ、則ち減じて少ないであらう、其れ故に、我等は若干の果を得たいと思はゞ、便はち若干の因を植えねばならぬ事が解るのである。

九　御覽なさい、樹を植えるのに、隨時に多少の水をやり、ついでに多少の肥料をやればそれで宜しいでせうか、不可ません、必らず其樹の性質を辨へ知つて、如何なる原質を以て培養すれば宜しいか、どれ程の原質を以てせば、それで適當であるか、某種の肥料は如何なる原質を含有して居るか、どれ丈けの成分があるか、其樹に施こして適當であるか否や、此等の凡てを研究して知り會得せねばならぬのであつて、斯くの如く明瞭にした上肥料を施こせばそこで始めて最良の結果を得らるゝのである。「淋水」は水をかけること、「合宜」は適合する、適當する、相當するの意、「相宜」も同じ

意味「樹里」は「樹裏」の音通、樹の中である。

一〇私は今の商業家に、商業上の道理に對しては凡て明白であるか、世界の形勢に對して都て明らかに知つて居るかを問ひたいと思ふ。私の見る所では是れ甚だ少數なるもので、彼等の知識は彼等が經驗から得來つたものに過ぎないのであつて、而かも且つ其經驗たるや、やはり零碎なる破片で、系統ある所の經驗は無い、彼等の眼光は、只だ當地を觀たばかりで、他の商業地に論じ到れば便はち茫然たるものであり、世界の形勢に至つては更に言ふを要せないのである。

一一斯の如く智識なく、眼光なくしては、終日奔勞した所で、やはり徒勞である、其れは投機者のやうに、單に運氣ばかりに賴るのではないけれ共、然かも幾分まぐれ當りの性質を帶ぶるの點は、多少似寄つたものである。

一二諸君必勝の權を操らむことを考へらるゝならば、それは私が諸君に忠告する、速かに此の僥倖の心理を打破して、速かに去つて系統ある學問を研究し、速かに去つて世界の大勢を考察せられよと。

第三十一　講話の譯し方

講話は演說に似たやうなものであるが、演說に較ぶれば其說明が稍々具體的で、其內容が充實して居る。

胎教淺說

古時候周文王的母親太任。發明胎教。所以他的兒子文王。自生下來。便含有聖德。就是胎教的效力。按這胎教經驗。其義甚細。須合性理。醫道。哲學。生理。格物。各樣的學說。融合串貫起來。纔能解釋明白這胎教的理。但是說其大概。不外乎神感氣化四個字。請想。婦人懷孕。子在腹中。要叫他腹內的嬰孩。受點教育。應當怎樣教法。若講這胎教的法子。我大略說說。世界欲作賢母的人聽聽。若能彀注意。

照着所說的實行。生下孩子來。必然聰明仁義。才德過人。是最有效驗的

昔周の文王の母親なる太任は、胎教といふことを發明した、故に彼の子たる文王は、生れてから、便はち聖德を含有して居た、直ちに是れ胎教の效力である。此の胎教の經驗を按するに、其義は甚だ細かなるもので、須らく性理、醫術、哲學、生理、物理、各種の學說を、聯合貫通したものと合して、始めて能く此の胎教の理を明白にすべきものである。但し、其概略を言へば、神氣感化の四字に外ならぬ、請ふ思へ、婦人が懷孕して、子が腹中に在るとき、其の腹中の嬰兒をして、多少の教育を受けしむるには、如何なる教法によるべきものであるかといふことである。若し此の胎教の方法を講ぜんとせば、私は其大概を說いて、世界の賢母たらむと欲する人々にお聽かせしやうと思ふ、若し注意することが出來て言ふ所に照して實行し、生れた小兒が、必らず聰明仁義で、才德人に過ぐるならば、是れ最も效驗あるものである。「應當怎樣教法」は、まさに如何なる教法を以てすべきものであるか、卽ち如何なる教へ方が相當なるものであるかといふ意。

凡婦人受孕以後。平常坐着時候。必要平穩端正。不可歪倚扭靠。站立行走。必要整肅徐步。不可奔走慌張。眼不看邪僻的色相。耳不聽淫蕩兒狠的聲調語言。口不喫腐敗辛熱的物品。心性要坦然和暢。無悲哀苦惱。憂憤恚怒的感觸。言談話語。要端正和藹。孕婦若識字。叫他嘗看仁義道德的正經書。倘若不識字。可以聽人講些孝悌忠信的故事。子在胎中。感觸的全是浩然正氣(這便是感化性)。爲父母的。再都是正直慈祥的人。又得受了遺傳性(遺傳性有好有壞)。將來生產之後。長大成人。必然是一個正人君子是無疑的了。

凡て、婦人が受胎してから後は、常に腰かけて居る時には、必らず平穩端正なることを要し、斜めに歪んだり曲つたりしてはならぬ。立ちて步くには、必らず整肅に徐步することを要し、走つたり慌てたりしてはならぬ。

眼には邪僻の色相を見ないやうにし、耳には淫蕩凶狠の聲調語言を聽かぬやうにし、口には腐敗したもの辛きもの熱き品などを食べぬやうにし、心性は平らかに暢りさせるやうにして悲哀苦惱や、憂憤悲怒の感觸を無くするやうにし、言語談話は端正にして和氣の藹々たるを要とする。妊婦が若し文字を識るものならば、彼をして仁義道德の正經なる書籍を見味はゝしめ、若し文字を識らぬならば、人の孝悌忠信に關する故事を語るのを聞くべく、兒が胎中に在つて感觸する所のものは都て浩然の正氣ならしむる(此れ便ち感化性である)、父母たる者は、それから都て正直慈祥の人となつて居れば、又遺傳性を受くることを得(遺傳性には良いのと惡いのとある)、將來產れた後、成人した後には、必らず一個の正しき君子人となることは疑の無いことである。

若論這神感氣化的至理。很有幾件經驗的故事。雖然覺着離奇點。但內中實有眞理。

話說一百年前。英國獄內。有一個犯罪的婦人。進獄的時候已經身懷有孕。那時候獄墻上。畫着許多的受刑慘狀圖。還畫着許多斷頭台上。殺人的機器。這婦人天天看着。將這些形像已然映入嬰胎。十月滿足。生下來的小孩。竟自有身無頭。其實這宗事。並不算奇怪。凡婦人懷孕。若是看了殺砍殘忍的擧動。或是嘗聽這路的言語。將來所生的小孩。往往形體不能完全。

若此的神感氣化的至理を論ずるならば、幾多の經驗せられたる故事が多い、聊か不可思議的の感じもするけれ共、然しながら、中には實際に眞理があるのである。「很有」は大にある、甚だ多くあるの意。

百年以前、英國の獄內に一人の犯罪婦人があつた、入獄する時既に妊娠して居たのであつたが、其時分監獄の壁には、數多の受刑の慘狀を畫いた圖畫があり、又數多の斷頭台上の殺人機が畫かれてあつた。其の婦人が毎日眺めて居て、此等の形ちを疾うに胎兒に映らしめて居たので、十月の

月滿ちて生れた所の小兒は、竟だ身體ばかりで頭が無かつたが、事實上是等の事は、敢て奇とするに足らぬことである。凡そ婦人が懷胎して、若し殺すとか切るとかの殘忍なる擧動を見るとか、若くば其のやうな言語を聽くとかすれば、將來生るゝ所の小兒は往々にして形體が不完全なるものである。

明朝宮內。有執事的太監。都好養活小哈吧狗。直到現在淸室的太監。還有這個風氣。只爲沒有明朝那樣的講究。哈吧狗專講身小耳大。嘴平腿短爲貴。每逢哈吧狗配狗後。太監必請畫工。繪最好的哈吧狗圖。貼在孕狗臥的地方。叫他天天看。就印入胎孕。將來生出小狗。種樣必好。甚至有畫成各樣花斑。小狗的皮毛。就能改變的。

明朝の宮中に、執事の太監（宦官のこと）があつて、皆小さなチンを養ふことを好んだもので、引續いて今の淸室の宦官中にも、又其の風が傳つてゐる、只だ明朝の時分のやうに研究しない迄である。チンは主として身體が小さくて耳が大きく、口が平らかで足の短かいのを以て上等とせられたものでチンをかけ合せる度毎に、太監は必らず畫工を呼んで最も上等のチンの圖を繪かしめ、孕みチンの居る場所に貼りつけて、每日其れを見させれば、胎兒に印象して、將來生るゝ所のチン兒は、種類が必らず良い、甚しきに至つては各種のブチ模樣を畫いて置けば、チン兒の皮毛を變へることも出來るのである。

到了外國養馬。也有使他感觸改變的法子。這雖然說的是畜類。但其中的理。很與胎敎有關。因爲這宗感觸性。是最有效驗。所以古人有孕。必講許多視聽言動的胎敎。如不信但看那貧家小戶生子。不免縮頭縮脚。鄉僻村愚生子。不免獃頭獃腦。這是天然的至理。並非我說的太過。卽便偶然有成器的。也是後天的淘冶(就是生出來以後。遇着了好敎育)。習染性中所見的功效了。

外國で馬を養育するに當つても、亦た彼(馬)の感觸をして改變せしむる

の方法がある。此れは畜類の事を言ふのであるけれ共、然し乍ら其中の理は、甚だ胎教と關係が有るのである。斯かる感觸性は最も效驗が有る爲に、古人は孕むことあれば、必らず幾多の視聽言動による胎教を講究したものである。若し信じなければ、彼の貧家下流民の生んだ子が縮頭縮脚（發達せざるもの）たるを免れず、鄉僻村愚（片田舍の愚民をいふ）の生む所の子供が、頭腦の馬鹿であることを免れぬのを見よ。是れ天然の至理で、決して私のふ所に太過非るであらう。卽ち偶然に物に成る者があつた所で、それは矢張り後天的淘冶則ち生れてから後、良き敎育に遇ふたこと）によつて、習ひが性となつたに基く所の功たるものである。

這胎敎的原理。有內部外部的分別。以上所說的。便是外部的感觸性。但是還有內部的遺傳性一層。更是要緊。若是遺傳性不良。生兒育女之後。發見了不好的行爲。要歸咎在外部感觸性的胎敎、上。豈不寃枉因爲這兩種天性。一種是外界的激刺。一種是內體的秉賦。在嬰兒一方面。所感的固然全屬先天。在孕婦一方面。他所受後天的激刺。決敵不過先天的心性。就好比築墻一般。你在外面掛多白的洋灰。可是墻脚根基。鬆鬆落落。一點堅固氣也沒有。如何站的牢。所以我說嬰兒最要緊的。就是這遺傳性。

此の胎敎の原理には、內部外部の區別があり、以上述べた所のものは、卽ち外部の感觸性であるが、然し尙ほ內部遺傳性の一事に至りては、更に大切なるもので、若し遺傳性が不良であれば、子女を生み育てた後に、不良の行爲あるを發見し、之れが咎めを外部感觸性の胎敎に歸するならば、豈に寃枉（むじつ）ではなからうか。此の二種の天性たるや一種は外界の刺激に因り、一種は肉體の賦性に因るが故に、嬰兒の方では感ずる所固とより全然先天に屬し、妊婦の方は、彼れが受くる所の後天的刺激は、決して先天的心性に敵し能はざると譬ひば、壁を築くと同じことで、君が外面にばかり如何に多くの漆喰を塗りつけても、然し墻壁の土臺がグザ〳〵して居

て少しも堅固の點が無ければ、如何にして丈夫に永持ちすることが出來やうか。此故に、私は嬰兒に最も大切なものは卽ち此の遺傳性であると言ふのである。

嘗見有一種人家。由他祖父輩上。就是尖酸刻薄的脾氣。他祖母又是個無知識沒學問。蠻不講理。刁滑狠毒的性兒。所生的兒子。秉受了他父母的遺傳性。就是刻薄野蠻。這樣性情的人。他若有了兒子。是將來兩輩的性情。貫注在一人身上。請想承受這宗遺傳性的人。能好不能好。

曾て一種の人を見たことがあつたが、其人は祖父などの代からして、無情酷薄の性質で、其の祖母が又知識學問の無いもので、横着で事理を辨へず、狡猾殘忍の性質であつたので、生むだ所の子は天賦に父母の遺傳性を受けて、就ち苛刻野蠻であつた。斯かる性情の人は、其人に若し子供が有れば、父母祖父母双方の性情を、一人の身體に貫注されて居るのである、請ふ思へ、斯かる遺傳性の人間が、良くなり得るであらうか、良くなり能はぬであらう乎を。

第三十二　小說の譯し方

小說は、支那に在りて古くから戲曲と共に口語で書かれたものゝ最も主要なるものであるが、小說の中でも口語としての上から比較的解し易いのは、一種の物語りであつて、其の文學味の含蓄が多いものは、口語としてよりも、寧ろ文章語としての智識が豐富でなければ解し難いのが常があるから、茲には口語を主として居る立場から、矢張り前に解說した物語類似の短篇小說を出すことにした。ツマリ一個の事實を基礎とした物語小說と解すべきものである。

認白字

北省地方。向來讀書識字的人。是很少的。所以各樣舖戸。掛各樣的晃子。比如爐房門口掛元寶。錢舖門口掛兩串銅錢。切麪舖口掛兩串切麪。因爲不認識字的人太多。就是現今這樣風氣還沒去盡。錢舖仍然有掛着兩串銅錢的。

これは文字を知らない爲めに起つた一場の大騷ぎを記述したもので、其標題(みだし)は『空字讀み』とでも名くべきもの、知らぬ字を解らない儘にウソ讀みしたから騷ぎが起るのである。

北方の各省では、從來本を讀んで字を識る人が、甚だ少ないのであつた。それ故に色々の商店では、いろ〳〵の實物看板をブラ下げて置く、譬へば銀の鑄直し屋の門口には元寶銀(俗に馬蹄銀といふもの〻事)をブラ下げ、兩替屋の門口には二たさし三さしの銅錢を掛ける、素麵屋の門口には少しの素麵をかけて置く。それは字を識らぬ人が餘りに多い爲で、只今でも其やうな習慣は未だ無くなつて仕舞はず、兩替屋には依然として少しばかりの銅錢をブラ下げて置く。

前清的時代。京西有個小村莊。村裏有個姓張的。夫妻兩個帶着兒子媳婦度日。他父子二人全沒讀過書。都不認識字。張某向來是做鞭子的手藝。因爲北京沒甚麼生意。他湊幾十兩銀子。帶着他兒子到張家口。開了一個鞭杆舖。頭一個月生意平常。第二個月生意就很忙。他們父子二人做不過來。打算找一個人。

前清の時、北京の西に小さい村があつて、村内に張といふ苗字の人が居た、夫妻二人が息子(むすこ)と嫁(よめ)とを一しよにして日を送つて居た、其の父子(おやこ)二人は全然本を讀んだことがなく、何にも字を識らない、張は從來鞭を作る職人であるが、北京ではサッパリ商賣が無いので、彼れは數十兩の金を寄せ集め、其息子を伴(つ)れて張家口へ行つて、一軒の鞭屋を開いた。最初の一ヶ月は營業があたり前であつたが、二ヶ月目からは商賣が非常に忙しくなつて來て、彼等親子二人では作りが間に合はない所から、人を一人搜さう

と思うた。

有一天張某對他兒子說。咱們生意很好。我想找一個夥計纔好。本地人是不要他。因爲離他們家近。　很有不便。我想給咱們家裏捎個信去。讓家裏找個人來。你看好不好。他兒子說好。於最託人寫了一封家信裏頭就寫了四個字。忙雇一人。

或日張某は其子に向つて言ふやう、私等の商賣が大層良くなつたから、私は手代を一人搜したら宜からうと思ふが、此地の人では要らぬ、其人の家が近い所から、甚だ不便がある、私は私等の家へ手紙を出して、から人を雇はせやうと思うが、お前はどう思うかと、息子は良いと言ふたので、そこで人を賴んで家への手紙を一通書いてもらひ、中には只だ「忙雇一人(忙しら一人雇ふ)」といふ四字だけを認めた。「找」は搜すの意であるが茲では搜して雇ふものと解す。「很有不便」は其雇人の家が近ければ弊害があるから其事を不便といふたのである。

張某當時就說太簡便了。那寫信的人說。我常聽人說。外國人打電報。都是幾個字說明白就是了。張某因爲自己不會寫。求人的事沒有法子。將信封好。等著順便人好帶。

張某は其當時直ぐに「あんまり簡短すぎる」といふた(たつた四字だけでは)が、其の手紙を書いてくれた人が言ふには、私が常々聞いて居る所では、外國人は電報を打つには、みんな三字か五字で解るのであるさうなと。張某は自分で書くことが出來ず、人に賴んで書いてもらう事であるから、詮方なく手紙を封じてしまひ、便りのある時分にすぐ持參してもらはれるやうにして置いた。

那時代還沒有火車郵政呢。等了兩天。趕巧有一個鄉親。要回北京。張某就託他將這一封信帶回家去。又託他說。您回來的時候。求您仍然到我家裏去看看。有回信沒有。那帶信的人答應。拿着信就走了。這個人年紀輕。很是粗鹵。去了幾天到了張某門口。叫開門把信交了。

讓他裏邊坐。他不肯坐。就走了。

其の時分には未だ汽車や郵便が無いので、二三日待つ內に、折よく同鄕の知人で北京へ戻る者があつたから、張某はそこで其人に此手紙を托して家へ携へていつてもらひ、又其人に賴んで貴下の歸つて(こちらへ)來られる時分に、も一度私の家へ往つて、返事が無いか見て下さいと言ふた。其の手紙を賴まれた人は承知して、手紙を持つて出かけた。が、其人は年が若く、甚だそゝッかしい男で、數日かかつて張某の家へ着き、訪れるとすぐに手紙を手渡しし、中へお這入り下さいと言ふたが、肯かないですぐ去つてしまつた。「趕巧」は折よく、丁度よくの意、「仍然」はやはり、又前の通りにの意、「粗鹵」は粗匆なる、そゝッかしきこと。

他們家裏只有婆媳兩個沒別人。接到這封信心裏也很喜歡。他婆婆趕緊找隔壁教書的王先生。求他看看。這位王先生年紀有六十多歲。向來認識字不多。因爲沒事情做。教幾個小孩子騙口飯喫。就是教白字。

東家也不曉得的。因爲那一個村莊裏。就是他認識幾個字。王先生接過信一看。說你們家都是誰在張家口。張老太太說。我男人。合我的孩子。王先生說。事情已經到這個光景。你可不要着急。他這封信寫的也不明白。

彼等(張某の留守宅のこと)の家では只だ姑と嫁の二人きりで外に人が居ないから、此の手紙を受取ると心の中では大喜びで、其の姑が急いで隣りの教師をして居る王先生を尋ねてゆき、見て下さいと賴んだ。此の王先生といふのが年は六十餘りで、從來知つて居る字が少しばかりで、仕事が無い爲めに、幾人かの小供等にいゝ加減の字を教へて口過ぎをして居る、ツマリ嘘字教へであるが、其の雇主も又た何も知らない人で、此村では只だ彼れ(王先生)が若干の字を識つて居るばかりであるから、王先生は手紙を受取つて一見すると、お前さん方の家では誰と張とが張家口へ往つて居られるのかナ？と言ふた張の婆さんが答へるやう、私の夫と私の子

供でムりますと、王先生が言ふには、事が最早や斯ふいふ有樣となつた以上は、お前さんも心配してはいけませんよ、此の手紙に書いてあるのは、はッきりしないけれ共……と。

「教書的」は教師のこと、「騙口飯喫」は嘘ばかりいふて口すぎして居る、則ちロクに解らない字を出鱈目に敎へて其れを飯の種にして居るといふこと。

白字はうそ字、間違つて讀む字「東家」は學校の持主。「接過信」手紙を手に受けとつてといふ意。

信上寫的亡故一人。可不知道是誰死了。張老太太一聽。當時就哭起來了。拿着信回家。告訴他兒媳婦。他兒媳婦也就哭起來了。兩個人哭了半天沒有主意。心裏想兩個人一個也死不的。信上寫的亡故一人。可不知道是誰死了。街坊過來勸。這纔換孝衣。把挑錢紙挑出去(這是北省禮節南省少有)。心想靈柩不久就將來到了竟等着辦事。

(王先生は言葉をついで)手紙には一人死んだと書いてあるが、誰が死んだのかは解らないと。張の婆さんそれを聞くや、其場で泣き出して、手紙を持つて家へ歸り、息子の嫁に其事を告げたので、嫁も亦た泣き出した。二人はやゝ暫らく泣いて居たがどうして宜いかわからない、心の中で二人で一人は死にもしないのであらう、手紙に一人が死んだと書いてあるといふが誰が死んだのか知ら？と考へてゐるばかりである。近所の人が來て勸めるので、そこでやつと喪服を着て、錢形の紙を吊り下げた(これは北方各省の禮で南方には稀である)で心の內に、棺も其內に來ることであらうから(張家口から)其れの着くのを待つて葬儀に取りかゝらうと思うた。「哭了半天」はやゝ久しい間泣いたこと、「街坊」は近所隣りの知人のこと、「竟等着辦事」たゞその時を待つて其事をするばかりだの意。

有一天帶信那一位要回張家口。可是鄉親不在一村住。特意到張家去拿回信。剛到張家門口一看。門口挑出紙錢。他心一想定是張家死人了。你到進去問個明白。他也不問。回頭騎上牲口就奔張家口了(粗心

到這歩田地)。到了張家口。先到張某的鞭桿舖。說你們家死人了。張某問誰死了。那人說我沒進去問。我就看見你們家門口挑出紙錢來了。都聽心裏想糟不糟。家裏他們婆媳兩個不知誰死了。他兒子在旁邊也都聽明白了。兩個人哭了一場。商量回家辦喪事。

或日、手紙を持つて來た彼の人は張家口へ戻らうとしたが、然し其同鄕人は一つ村に住居して居るのでないから、ワザ〳〵張の家まで返書を取りに出かけて來た。今しも張の家の門口まで來て見ると、入口に紙錢が吊り下げてあるので、彼れは心の中で屹度張の家では誰か死んだなと思ひ、中へ這入つて問へば解るものを、其男は問ひもせずに、直ぐ樣家畜に飛び乘つて一目散に張家口へ走つた(斯ういふ粗匆つかしやである)、張家口へ着くや否、先づ張某の鞭屋へ往つて、お前さん方の家では人が死んだよと言ふた、張某は誰が死にましたかと問ふたが、其人は、私は這入つて問ふては見ませんでしたが、只だお前さん方の家の門に紙錢の吊り下がつて居るのを見たばかりですと言ふので、張某は心の中で煩悶しまいことか、家で婆さんと嫁と何方が死んだのか知ら？と考へる。其息子も傍に居てみんな聞いたので、二人が一としきり泣いて、家へ戻つて葬儀を營むことにしやうと相談した。

「特意」は殊更に、ワザ〳〵との意、「去拿回信」返事を取りにいつたの意、「你到云々」は此小說の作者が言ふた語で、此粗忽の男が此時に家の中へ這入つて問合せさへすれば何事もなく、萬事明白になるものを「他也不問」其男は問ひもしないで直ぐ飛出したことを筆を廻して書いたのである。

於是舖子託人照料。到了第三日雇一輛車。父子兩個回京。到家子細一問。這纔知道王先生認錯字了。這麼看起來。書總要讀。字不可不認識。張某一家人。若都會注音字母。用字母寫信。就沒有這樣的誤會了。

そこで店を人に賴んで世話してもらひ、三日目に(張家口を出立してか

ら車を一輛雇うて、父子二人が北京へ歸り、家へ着いて精しく問ふて、そこでやつと王先生が、字を讀み違つた(ウソ讀みした)ことが明らかになつた。斯うして觀ると、本はどうしても讀まねばならぬもので、字は識らねばならぬものである。張某一家の人が若しみんな寫音文字を知つて(會得して)居つて、この字母で手紙を書いたものならば、此の樣な間違ひも無かつたであらう。

「照料」世話する、「面倒」を見る、「子細一問」は正しく書けば「仔細一問」で「細々と問ふと共に」の意、これは音通で「子」を用ゐたもの「誤會」は誤解すること、間違うことである。

第三十三　小說の譯し方（其二）

玆に出す小說は、前年天津の著名なる兩替屋『春華茂』へ强盜に押込んだ一味徒黨の經歷を綴つた一種の探偵實話で、其徒黨が捕へられて訊問さるゝ一段を抄出したものである。

審判員又問春華茂的案、沈作賓說、那是舊曆十一月三十日、戴奎一又探明宮北春華茂銀號的道路、起意搶刼、約了小的跟董子揚萬瑞廷李朝權等、全拿着手槍、天有掌燈的時候、到了春華茂的門口兒、見大門沒關、大家一齊擁進去、先把事主扯到一個屋裏去、不敎言語、搶得洋元票跟現洋、不知有多少電話線就是我割斷了的、得贓後逃回河東悅來棧均分、戴奎一分給小的洋錢票二百八十元。

判事が又春華茂の事件を問へば、沈作賓が言ふ『それは舊曆十一月の三十日で、戴奎一が又宮北(天津の町名)の春華茂銀號の道を探つて來て押込まうといふことになり、私と董子揚萬瑞廷李朝權等を誘ひ合せ皆がピストルを持ち日の暮方に、春華茂の入口に行きました、所が店の戸も閉まらないので、一同が一しよに押込んで、先づ支配人を摑めて片隅の部屋へ叩き込み口を利かせないやうにして札と現銀とを奪ひ取りましたがどの

位あつたか解りません。電話線は私が切りましたのです、強奪してから河東(天津の地名)の悅來旅館へ逃げかへつて分けました、戴奎一は私に二百八十元の札をくれました。

「起意搶刼」は强奪する心を起す、「約了」は語らうた、誘ひ合せて約束したこと、「事主」は主人、「不敎言語」物を言はしめず「小的」は目上の人に對する「手前、わたくし」である。

後來看見報上登着懸賞拿賊、大家才逃回濰縣去的、審判員又問道、爲甚麼又回來呢、沈作賓說是舊曆十二月二十那天、小的跟麻子成劉樹閣馮寶明一同回來的、小的跟馮寶明住佛照樓、麻子成跟劉樹閣住長發棧、麻子成說有三枝手槍、在勝芳鎭王金庸家裏存着哪。

『それから後で、新聞に懸賞捕賊の記事があるのを見て、皆が濰縣(山東の)へ逃げましたのです。』判事が又問ふやう『なぜ又戻つて來たのか』沈の曰ふには、十二月の二十日に、私と痘瘡(あばた)成と劉樹閣と馮寶明と一しよに戻りまして、私と馮は佛照樓旅館の名)に泊り、成と劉とは長發棧に泊りました、成はピストル三挺を勝芳鎭(村の名)の王金庸の家に預けて置いたと話しました。』

「報上」は新聞紙上に、「登着」は掲載されてゐること。

後來取了槍來、賣給小的跟馮寶明每人一枝、在棧房裏起的那兩枝槍、就是小的跟馮寶明那兩枝槍、審判員又問在勝芳鎭錢鋪的案、沈作賓說、那個案是麻子成作的小的跟馮寶明全沒跟他同夥、可不知他們是怎麼搶的、審判員說你先下去、並當面吩咐差役說、這全是好漢子、煙酒茶葉飯食等類、用甚麼東西都在帳房裏拿錢、別敎他們受屈、又向沈作賓說道、用甚麼僅管跟他們要吧、沈作賓答應了一聲這才下來、跟同夥的說道、這個官倒是個好官很看得起我們、我想我們不認、也是出不去活不了、就不必敎人家費事喇、大家點了點頭、又聽見招呼馮寶明、當時又把馮寶明提出來、到了堂上。

『後でピストルを持つて來て、私と馮とに一挺づゝ賣つてくれました。

宿屋で引き上げられましたあのピストルは乃ち私と馮のでムいます。』判事は又勝芳で兩替屋を强奪した事件を問ふと、沈は『あの事件は麻子成のした事で、私と馮とはまるきり彼の仲間ではありませなんだから、如何いふ强奪のし方をやつたかは知りません』判事『お前まァ下つて居れ』と同時に下役に吩咐て『こりやみんないゝ顏の連中だから、煙草や酒や茶でも飯でも何でも入用のものは會計から金をもつて往つて買つてやつて連中に不自由さするナ』、と又沈に向つて『何でも入用の物は彼等に請求してくれ』沈は『ヘイ〳〵』と挨拶して下つて來た。そして仲間に言ふやう『此所の大將(判事のこと)はいゝ役人だ、大へん僕等を買つてくれるから僕等はどうせお互に白狀しない所でとても出て生きられる見込がないのだから人樣に面倒な手數をかけるに及ばないと思ふヨ』仲間一同が點頭てゐる內、今度は馮寶明が呼出される、すぐ又馮は呼ばれて法廷に引き据えられた。

「一枝」は一挺「怎麼搶的」はどんな工合に强盜をやりましたか、「好漢子」は無賴漢や游俠などを稱する語で、「いゝ顏の連中」「兄き」のやうな意味、裁判官が一寸おだて上げたのである。

審判員問道你叫甚麼名字、馮寶明說、小的叫馮寶明、又叫馮寶民、號叫子儀是奉天昌圖縣的人、今年二十九歲、於去年七月到的山東、投在民軍裏當稽查員、跟沈作賓麻子成劉樹閣都認識。後來因爲軍隊改組、小的於十二月二十日就跟他們三個人來到天津、分開兩撥兒住棧房、麻子成說他有盒子槍、要賣小的一枝、講好價錢九十元、是先給的錢、可是敎小的跟劉樹閣同他到勝芳取槍去、沈作賓也要到蘇橋去要帳、因此我們四個人搭伴兒去的。

判事『お前の姓名は？』馮『私は馮寶明といひ又馮寶民ともいひます、號は子儀で、奉天省昌圖縣の生れ今年二十九歲です、去年の七月に山東へ參りまして、革命軍の仲間に入り稽查員となりました時に沈、麻、劉等と知りあひになりました。その後、軍隊が編成換になりまして、私は十二月二十

日に彼等三人と一しよに天津へ參り、二た組に分れて宿屋に泊つてゐました。所が、麻がピストルや彈藥などを有つてゐて私に一挺賣りたいと申しますから、價段を九十圓といふことに定めまして先に代金をやりました、そこで私に劉と一しよに麻と同道して勝芳に品物を取りに參りまして、時に沈作賓も亦た蘇橋まで懸け取りに行きましたので、それで私共四人は連れ立つて行つたのでありました。』

次に示すのは、著名な近體小說『留東外史』の一部分である。

一民國三年十二月十五日午後三時。塵霧半天。陰霾一室。此時此景。就是不肖生兀坐東京旅館。起草留東外史的紀念。

二這留東外史是部什麼書。書中所說何事。不肖生著了這書有何好處。說來話長。諸君不必性急。待不肖生慢慢講來。

三原來我國的人現在日本的。雖有萬多。然除了公使館各職員。及各省經理員外。大約可分爲四種。第一種是公費或自費。在這裏實心求學的。第二種是將着資本在這裏經商的。第三種是使着國家公費。在這裏也不經商。也不求學。專一講嫖經讀食譜的。第四種是二次革命失敗。亡命來的。第一種與第二種。每日有一定的功課職業。不能自由行動。第三種既安心虛費着國家公欵。飽食終日。無所用心。就不因不由的有種種風流趣話演了出來。第四種亡命客。則更有趣了。諸君須知此次的亡命客。與前清的亡命客。大有分別。前清的亡命客。多是窮苦萬狀。仗着熱心毅力。拚的頸血血頭臚。以糾合同志。喚起國民。

四今日的亡命客。則反其事了。凡來在這裏的的多半有捲來的欵項。人數較前清時又多了幾倍。人數既多。就賢愚雜出。每日裏豐衣足食。而初次來日本的。不解日語。又强欲出頭領略各種新鮮滋味。或分賍起訴。或吃醋揮拳。醜事層見報端。惡聲時來耳裏。此雖由於少數害羣之馬。而爲首領的有督率之責。亦在咎不容辭。

五不肖生自明治四十年卽來此地。自願於四種之中。都安插不下。既非亡命。又不經商。用着祖先遺物。說不讀書。也曾進學堂。也曾畢道業。說是實心求學。一月到有二十五日在花天酒地。

六近年來。祖遺將罄。遊興亦闌。已漸漸有倦鳥思還故林之意。祇是非鴉非鳳的在日本住了幾年。歸得家去。一點兒成績都沒有。怎生對得住故鄉父老呢。想了幾日。就想出着這部書作敷衍塞責的法子來。

七第一種第二種。與不肖生無筆墨緣。不敢惹他。第三種第四種。沒奈何。要借重他作登場傀儡。遠事多不記憶。不敢亂寫。從民國元年起。至不肖生離東京之日止。

八古人重隱惡而揚善。此書卽綸善而崇惡。人有罵我者。則不肖生三字。生固是我的美名。死亦是我的佳謚。由他罵罷。倘看此書的。不以人廢言。則不肖生就有三層請願。一願後來的。莫學書中的人。爲書中人分過。二願書中人。莫再做書中事。爲後來人作榜樣。若後來的竟學了書中人。書中人復做了書中事。就祇願再有不肖生者。寧犧牲個人道德。續着留東外史。以與惡德黨宣戰諸君勉之。

九且看此書開幕。話說湖南湘潭縣。有個姓周名撰字卜先的書生。四歲失了怙恃。依着叔父度日。他叔父原做木行生意。稍有積聚。中年無子。遂將周撰作自己的兒子教養。十六歲上替他娶了一房妻室。這周撰雖是在三家村裏長大。却出落得身長玉立。顧盼多姿。笑貌既逾狐媚。性情更比狠貪。從村塾先生念了幾年書。文理也還清順。乙巳年湖南學校大興。周撰就考入了陸軍小學。

一〇當時清廷注重陸軍。周撰實欲借此作終南捷徑。奈他賦體不甚壯實。每到了操場上作起跑步來。就禁不住嬌音喘喘。香汗淫淫。住了半年。覺不堪其苦。那年湖南咨送學生出洋。周撰就想謀一官費。然苦無門徑。恰好他同學楊某。也因想得官費。求同縣大僚某作了封書與湖北制台關說。那大僚作書的時候。原囑揚某親到湖北呈遞。不料

楊某的母親病了。不能前往。周撰知道此事。遂乘機詭言適有要事須往湖北。楊某不知是計。就託信與他帶去。

一一周撰得了信。到私處開看了。就弄神通添了自己名字進去。逕往湖北。投信之後。果然效力發生。得了一名留東官費。在日本混了幾年。中國革命事起。留學生什九回國。周撰也跟了回去在岳州鎭守府。充了一名副官。

(一)民國三年十二月十五日の午後三時飛び來る塵霧一室を罩める、此時不肖生が東京の宿屋で留東外史の紀念物を起草してゐる。

(二)抑もこの留東外史とは是れ如何なる書であるか、書中に說くのは何事であるか、不肖生が此の書を著はすのは如何の利益があるのであるか話せば中々に長いこと、諸君乞ふ急かずに、僕が追々說き出すのを待つて居たまへ。

(三)さて、我國の人で今日本に居るのは、一萬餘りに達してゐるが、公使館の各職員と、各省から來てゐる留學生の世話係を除けば、大約四通りの種類で、第一種は公費或は自費の留學生だから、これは先づ精神から學問をする爲めに來てゐるもの、第二種は、いくらかの資本で商業に從事してゐるもの、第三種は國家の費用で來てゐる人間であつて、商業をするでもなければ、學問をやるでもなく、唯女を買ふことや、食物を賞翫するが專門の連中、第四種は、第二次の革命で失敗した爲めに亡命した連中といふ色分けになる。第一種と第二種とは、毎日一定の學科や職業があるから妄に自由行動をとることも出來ないけれ共、第三種の連中は、國家の費用を費ふて終日飽食してゐるのであるから、自然の結果でいろんな面白い話題を作り出すことになる。第四種の亡命連と來ては又更に面白い話題の持主であらねばならぬ。

(四)諸君見玉へ、今の亡命客といふ連中は、前清時代の亡命者とは頗る其趣の異なるもので、前清時代に日本へ逃げた亡命者は孰れもいろ〳〵の

窮苦を忍び、命がけで專心同志の糾合に力を注ぎ、何とかして國民の睡りを醒さうと心掛けたものであるけれ共今の亡命客は決してそんな者ではない、日本へ來て居る程の連中は、過半は本國から集めた金の持逃連中で、人數から謂へば前清時代の幾倍にも當るのであるから、其の内容は賢愚混合、毎日飽食暖衣で爲すこともなく、初めて來た運中は、日本語も分らない癖に、何か人知れぬ旨い事をやらうと工夫する所から、或は持逃した金の分配から訴へを起したり、或は燒餅喧嘩から腕力騷ぎを仕出來したり醜い事實は、毎日新聞の餘白を賑はしてゐるではないか、こんな事は、マア少數の馬鹿や惡黨の仕事であるにしても、其首領として監督の責任ある連中が構はないで置くから出來るものと謂はねばなるまい。

(五)僕は明治四十年から此國へ來てゐるもので、以上の四種中孰れに屬するかといへば、一寸其定規に當て嵌らない人間で、亡命でもなければ、商人でもなく、祖先傳來の財産若干を持つて來て、學問しないとは言ふものゝ曾て學校へも這入つた事があり卒業したこともある。一生懸命に學問したとはいふものゝ、其實一月の内二十五日の間は、色酒で浸つてゐたこともある。

(六)近頃、家の遺産も盡きさうになり遊びも最早倦きが來たので、そろそろ故郷へ歸りたくなつた。唯、どッち付かずに日本に留まつた此數年故郷へ戻つても、別に成績として算ふるものすらない。思へば國の故舊に會はす面目もないのであるから、せめては、此紀念の一書を著はして聊か責を塞がうと思案を凝した賜が、茲に出來上つた留東外史といふ一産物である。

(七)第一種と第二種とは、僕の筆とは由緣がないから先づ構ふことが出來ぬけれ共、第三種と第四種とは、舞臺に上せて適はぬこともない。久しい出來事は、餘り記憶が確かでないから無暗に出鱈目を書くわけにもゆかぬ。此所に書くのは、民國元年から僕が東京を離るゝ迄の出來事に過

ぎぬ。

（八）古人は惡を隱して善事を揚ぐるのを尊いことゝしてあるが、僕の此書は善を蔽ふて惡事を顯はすやうな形ちであるので、若し僕を罵倒する者があるならば、僕は不肖生の三字で其罵りを甘受する、三字は僕の生前では美名で死後には好個の諡であるから、罵る人には罵つてもらう。が此書を讀む人で、若し人を以て言を廢せないならば、僕不肖生茲に三つの願ひがある、一つは、後の人が書中の人物を學んで書中の人物と過ちを分たない樣にありたい事、二つの願は、書中の人が再で書中の人物となつて後の人に雛形をくれるやうにならぬ事で、若し後の人が只管書中の人物を學び、書中の人が再び書中の事を行ふやうならば、願くば再び不肖生となる者が出て、寧ろ個人の道德を犧牲にしても、續いて留東外史を著はし以て惡德連中に宣戰して欲しいこと是である。諸君請ふ之を勉めよや。

（九）と、前置していよ〳〵本題に入る扨て、我國湖南の湘潭縣に、周撰字は卜先と呼ぶ學生があつた、四歲の年に兩親に死別れ、叔父の厄介になつて成長した。彼れの叔父は材木屋が營業で相當の財產を蓄へたものであるが、中年になつても子供がない所から、甥の周撰を自分の子として育てることになつて、十六の年に嫁を娶つてやつた。所が此周撰、山家に育つたにも似ず頗るの美男子で、加之に性質は極めて惡黨の素質を具へてゐた先づ村の先生から日用役に立つだけの書物を習ふて巳の年に湖南の敎育が盛んになると、彼れは試驗を受けて土地の陸軍幼年學校へ這入つた。

（一〇）此頃、淸朝政府では最も陸軍の改良に重きを置いてゐた時であるから周は此機に乘じて大に出世の緖口を作らうとしたのである、けれ共彼れの生れつきは甚だ虛弱で、演習や操練のある度毎には、少し駈足をやつてさへ氣息奄々と絕え入るばかりになる始末だから、半年ばかりも居る內に、迚も其苦みに堪へないやうになつた。所が其の年湖南から外國留學の學生を送り出すことに定つたので周は何とかして自分も官費の

留學生となりたいと思ふたが、生憎少しの手蔓もない。煩悶してゐる最中、彼れの同窓であつた揚某といふが、矢張り官費の留學生を希望して縣の大官某から推薦狀を認めてもらひ、それを湖北の總督に持參する手筈となつてゐて、折柄揚は母親が病氣で、總督の許へゆくことが出來ぬと聞いた周撰の喜びは如何ばかり？早速揚の所へ出向いて、『僕は丁度急用が出來て、湖北まで行かねばならぬ、若し何か君の用向で、僕の使で間に合ふやうなことでもあらば、ついでだから遠慮なく言ひたまへ』と、旨々揚の思ふ壺に打ちこんだ、揚は、周撰にそんな企みがあるとは知らない、至極都合の良い幸便だと『それでは、君濟まないが、此手紙を湖北の總督まで屆けてくれ玉へ』と例の推薦狀を周撰に渡した。

（二）周撰は大喜びで、早速其手紙を持ち歸り、密々開けて見た上自分の姓名を書込んで、直樣湖北の總督へ持參して行つた。暫らく經つと、果然書き込みの效力が現はれて、忽ち日本留學の官費生を命ぜられる。旅支度もそこ〳〵に、日本へ渡り、二三年何をするともなしに轉ついてゐる內革命の騷ぎが起つた爲、留學生は九分通り國へ歸るやうになつた、周撰も矢張り其仲間と一緒に鄉里へ戻る。運が良いのか偶然か、忽ち岳州鎭守府の副官に任ぜられた。

一那時岳州南正街茶巷子內。有一個同昇客棧。這客棧的主人姓翁。原籍浙江。夫婦二人。帶着親生女定兒。不知因何事到岳州。開此客棧已有八九年光景。那定兒年紀雖在二十以外。然尙沒有婆家。頗有幾分姿色。遠近有大喬的名目。

二一日。周撰到棧內會朋友。無意中與定兒見了一面。兩下裏都暗自吃驚。周撰打聽得是棧主女兒。又沒有婆家。想可以利動。

三遂每日借着會朋友。與棧主通了幾次慇懃。那革命的時候。在軍界的人。誰人不怕。誰人不想巴結。況周撰容儀秀美。舉動濶綽。又是東洋留學生。棧主豈有不極力拉攏之理。往來旣熟。就時時與定兒眉

眼傳情。眞是事有湊巧。一日周撰到了棧內。恰好棧主夫婦均不在家祇有定兒一人坐在窗下。周撰心中喜不自勝。忙跨進房去。定兒見是周撰。止不住紅呈雙頰。心中冲冲的跳動。慢慢立起身來。說了聲請坐。就低着頭一聲不做。此時正是十一月天氣。周撰看定兒。穿了件竹青撒花湖縐羔皮襖。罩了件天青素緞坎肩。繫條桃灰摹本褲。着了雙纖條條白緞地青花的鞋。高高的挽了髮結。淡淡的施了臙脂。周撰見了這種嬌羞模樣。心癢難撓。也不肯就坐。涎着臉兒。挨了攏去。扯着定兒的手。溫存說道。定姑娘。發慈悲。救我一命罷。定兒將成手輕輕的捽了一下。道周先生你待怎麼。還不尊重些。外面有人聽見。什麼樣兒。

(一)此頃、岳州の南正街に、同昇客棧と呼ぶ宿屋があつた、此處の主人は翁といふ姓で生れは浙江省、夫婦二人の中に定兒といふ一人娘があるばかり、如何して岳州あたりへ流れ込んだのか、知らぬが、此宿屋を始めてから最早彼是れ八九年になる。娘は二十歳を越してゐたが、未だ婿がない、一寸十人並みの容貌なので、遠近の評判者となつてゐた。

(二)或日、周撰は友人と會ふ爲めに此宿屋へ來て偶然定兒と知合ひになつた、よく聞いて見ると此家の一人娘で、未だ亭主もないといふのであるから、好色者の周は『此一奴は何とか物になる哩』と心に領會いた。

(三)其れから後は、毎日のやうに、友人を待合せるとか何とか用事を拵へてはやつて來る、而して頻りに主人の機嫌をとるやうに持掛けた、此時は革命騷ぎの間もない頃で、軍人といへば恐もてにもてたもので何とか取り入らうとする者が多い時代だ、殊に周撰は、美男子で鷹揚な所があり、加之に日本留學生の出身と來てゐるから主人も頗る歡待する、僅かの間に、懇意な間柄となつて了つた。時分はよしと、時々定兒に眼顏でそれと情を通はせる迄に運んだ。

旨い事には、或日又例の如く遊びがてらに尋ねて來た所が、主人夫婦二

人共何處へか用達しに出かけた後で、定兒一人がつくねんと窓の下に座つてゐた。周撰の喜びは譬へ樣がない、づか〳〵室の中へ這入つてゆく、定兒は一人の所へ周撰が來たので、思はず顏を赤めて胸をどきつかせ、徐かに椅子から立ち上つて『入らッしやいまし』と細い聲で挨拶したまゝ俯首になつて一言も出さない、時は十一月で周撰が定兒の支度を見ると淺黃に大模樣の縮緬に、子羊の皮をつけた綿入を着て、空色繻子の袖無しに桃色繻子の袴を着け、花模樣の靴を穿き、高々と髷を結ふてあつさりと薄化粧を施こしてゐた。周撰此の羞かしげな樣を見ると、心の中で堪らない程可愛くなり、坐りもせずに、涎を流さむばかりに立ち竦んで居た。暫らく無言で釘づけのやうになつてゐたが、軈て定兒の傍近く寄つて靜かに手を引ッ張りながら、嬌しい作り聲で『定ちやん！僕を助けて吳れないの？……』といふた、定兒は、敢て强く手を引もせずに、輕く振り放しイ『知りませんよ周さん、貴郎御戲言をお仰るものぢやありませんよ、人が聞いたら困るぢやありませんか……』

『遠近有大喬的、は岳州に小喬の墓があるので、アチコチの人が翁の娘は澁皮が剝けて居る所から特にそれに對照して斯の綽名を付たのである。

第三十四　小說の譯し方（其三）

前の小說に續く。

一翁老兒夫婦恰走了回來。見了二人情景。知道自己女兒。又被人家欺負了。周撰懷着鬼胎。不便久坐。辭了出來。說不盡心中快活。

二翁老婆子見周撰去了。喚過定兒問道。方才周先生說了些甚麼。定兒將周撰的話。一五一十的說了。翁老婆子聽了道。少年人的話。祇怕靠不住。你如信得他過。須要他趕緊請兩個岳州正經紳士作媒。光明正大的娶了過去才好。這偸偸模模的。終不成個結局。定兒答應了。次日周撰到了棧內。定兒就悄悄的和他說了。周撰忙點頭道好。歸到

鎮守府內。與同事的商量。同事中也有說好的。也有說定兒是岳州有名的養漢精。不宜娶他的。

三　周撰胸有已成之竹。也不管人家議論。卽着人請了岳州的一位拔貢老爺黎月生。一位茂才公周賓卿來。將事情對他二人說了。求二人作伐。這二人最喜成人之美。毅然應允。翁家夫婦。見有這樣兩個月老。知道事非兒戲。祇一說卽登時妥貼。也照例的納采問名。擇吉十二月初十日親迎。

五　周撰就在城內佃了一所房子。初三日就搬入新房子住了。也置辦了點零星木器。使用了幾個下人。將房子收拾得內外一新。居然成了個娶親的模樣。

四　轉瞬到了初十。周撰同事的來道賀的也不少。倒很費了幾桌酒席打發他們。定兒自過門之後。眞是一對新人。兩般舊物。男貪女愛。歡樂難名。周撰自初十日起。祇每日裏名花獨賞。那有心情去鎮守府理事。如此過了十來日。這風聲傳到鎮守使耳裏去了。起初還作不知。後來見他全不進府。祇得將他的缺開了。索性成全了他兩人的歡愛。周撰得了這個消息。不覺慌急起來。忙託了同事的柳夢菰。與鎮守使關說。這柳夢菰平日很得鎮守使的歡心。這事他又曾贊成。周撰以爲一說必有效驗。

六　第二日。柳夢菰走了來。說道。這鎮守府衙門。不久就要取消。鎮守使不出月底。便當上省。你這缺就復了。也不過多得十幾日薪水。周撰聽了。無法祇索罷休。於是又過了十多日。鎮守府果然取消了。同事的上省的上省。歸家的歸家。祇勝他一人在岳州過了年。所發下的薪水。祇用了兩個多月。已看看告罄。天氣又漸々煖了起來。他去年歸國的時候。已是十月。故沒有做得秋季衣服。

七　此時見人家都換了夾衣。自己還拖着棉袍。雖不怕熱。也有些怕醜。又籌不出欵來置辦。祇得與定兒商量。要定兒設法。定兒想了一計。

要周撰將棉袍的絮去了。改做了一件夾衫。周撰依了定兒的計。又過了半月。終覺手中拮据。想不出個長久的計畫。

八一日。那柳夢菰以公事到了岳州。知道周撰尙貪戀着定兒。就走到周撰家內。祇見周撰扱着雙鞋。衣冠不整的迎了出來。看他容顏。已是眼眶陷落。黃瘦不堪。那裏還有從前那般丰采。彼此寒暄了幾句。周撰卽叙述近來窘迫的情形。求柳夢菰代他設法。柳夢菰笑道。祇要你肯離開岳州。法是不難設的。現正咨送學生出洋。老留學生尤易爲力。你從前本是官費。祇求前鎭守使替你說聲就得了。仍往日本去留學。豈不好嗎。周撰也心想再不趁此脫身。把甚麼支持得來。等柳夢菰去後。卽入內與定兒說知。檢了幾件衣服當了。作上省的船費。定兒雖是難分難捨。然知道周撰手頭空虛。斷不能長久住下。沒奈何祇得割捨。

九次日周撰果然上省。那時謀公費的甚是容易。所以周撰不上幾日。就辦妥了。領了路費執照。仍回到岳州。定兒接了。自是歡喜。萬分。

二人朝歡暮樂。又過了半月。周撰遂和定兒計議。退了房子。將定兒寄養在同昇棧內。與翁家夫婦約定一二年後回來搬取。翁家夫婦雖不願意。然也沒得話說。

一〇這日周撰寫了船票。與定兒別了。就向東京進發。船上遇了幾個新送的留學生。他們知道周撰是老居日本的。就有許多事要倚仗他的意思。周撰是個極隨和的人。最知情識竅。卽一口承應到東一切交涉。都在周某身上。那些初出門的人。有了這樣的一個識途老馬。那得不諸事倚賴。

一一不幾日。到了上海。落了棧房。周撰卽出去打聽到橫濱的船隻。恰好當日開了。祇得大家等候。

一二第二日。周撰卽買了副麻雀牌。逗着他們消遣。他們問道。我們在此又不能久住。專買副麻雀牌。鬬不到幾日。豈不可惜。難道到日本還可鬥嗎。周撰笑道。有何不可。我不是特買了帶到日本去。買來做

甚麼。若專在上海門。租一副豈不便宜多着。他們又問道。聽說日本法律。禁賭狠嚴。倘被警察查出了。待怎麽。周撰道。放心。決不會查出來的。日本禁賭雖嚴。然須拿着了賽賭的財物。與骰子作證據。方能議罰。我們若先交了錢。派作籌碼。如警察來了。祇急將骰子藏過。仍作不知有警察來了似的。門牌如故。警察拿不着證據。必悄悄的去了。萬一骰子收藏不及。被警察拿着了。也不要緊。我們祇粧作全不懂日本話的。來的警察。問不出頭腦。必將我們帶到警察署去。我們到了警察署。切不可寫出眞姓名來。他就登報。也不過寫支那人如此這般的罷了。他旣葫蘆提的寫支那人。則現在日本上萬的中國人。誰知道就是你我。那新留學生聽了。都狠佩服周撰的見識不差。

幾個人在上海盤桓了幾日。買了春日丸的船票。到東京來。不日抵了横濱。周撰帶着新來的上岸。坐火車到新橋。喚了幾乘東洋車。坐了兼拖着行李。逕投早稻田風光館來。這風光館係中國人住的老旅館。周撰揀了樓上一間八疊席子的房間住了。

(一)其內に、翁夫婦が戻つて來た、定兒のソワ〳〵落付かぬ風を見て、訝しげな眼を睜つてゐた。周撰は何だか薄氣味が惡くて仕樣がないので、挨拶もそこ〳〵に歸つて去つたが、心の中では言ひ知れぬ喜ばしさが漲つてゐた。

(二)定兒の母親は、周撰の出てゆくのを見ると、定兒に問ふた。『周さんは何か言ふたかい?』定兒は問はるゝ儘に一伍一什を詳かに語る、母はそれを聽いて『若い者の言ふ事なんか、當になりやしないけれ共、お前若し眞に受けて左樣しやうと思ふなら、早く土地の相當な人を二人賴んで媒介に立つてもらう樣にして、世間並の婚禮しなきやなりませんよ、そんな野合みたやうな工合にして置いては、どうせ終に碌なことぢやありませんからネ……』と謂ふ、仍て定兒は、翌日周撰の來た時に、こッそり母に言はれた通りを話す。周撰は『そりや好いともゝゝゝゝゝ』と快く承諾し

て、鎮守府へ出勤し、府内の同僚に其事を話すと、至極結構だ早速やり玉へと賛成する者もあれば、又定兒は岳州有名な浮氣者だから、あんな者を娶つては不可と不賛成を唱へる者もある。

(三)が、周撰は獨り自ら成算ありて、人の彼是いふことなどは格別耳にも止めず、早速人を賴んで土地で學者の麗月生と、も一人周寶卿と呼ぶ秀才との兩人を表立つた媒介に承諾してもらうことを請ふた。此二人の紳士は、幸ひそういふ事の好きな人達で快諾してくれたので、翁夫婦もいよ〳〵周撰の言ふた事が戯談でなかつたと喜び、萬事の相談何の障りもなく取運んで、世間並に結納も濟み十二月の十日が吉日だといふので其日に式を擧げることゝなつた。

(四)そこで、周撰は早速城内で家を一軒借り込んで、三日に其新宅へ引越した、それから世帶道具を買揃へる二三の召使を雇ふて家の内外を手入れさせる、忽ち婚禮の支度が出來上つた。

(五)間もなく十日になると、同僚や友人の祝ひに來る者も少なからずあつて、振舞酒も餘程費へた。定兒が來てからといふものは、水入らずの若夫婦二人で夢のやうな歡樂に醉ふて居る、周撰は十日の日から毎日名花獨賞で納まりかへり、鎮守府へ事務を執りに行く氣にもなれない、十數日も缺勤してゐると、初は氣がつかなかつた鎮守使も、餘りに缺勤が永いので、いつそ周撰を免職してしまひ、若夫婦の歡樂を徹底させた方がよからうといふことにした。其消息を聞くと周撰は非常の狼狽で、同僚の柳夢菰といふに賴んで、鎮守使に取なしてもらつた、此柳は平日から大層鎮守使の歡心を得てゐる男で、しかも此事情には賛成してゐたのであるから此男に賴めば大丈夫効驗があると安心してゐた。

(六)二日目に柳がやつて來て『此鎮守府も遠からず取消されることになつてゐるので、此月内には鎖守使も武昌に出ることになつてゐるから、君が復職した所で後十幾日かの俸給を得るばつかりだ』と知らせてく

れた、周撰は落膽りしたが罷るより外に方法はないと覺悟して居た。それから十餘日過ぐると果して鎮守府は取消されてしまつて同僚の誰彼は、武昌へ行くのもあり家へ歸るのもあるといふ風になり、岳州に殘されたのは周撰一人になつて了つた。年を越すと貰つた俸給は二ヶ月の間に費ひ果す、そろ〳〵天氣が暖かくなつて來たけれ共、彼が去年歸國したのは十月で、間衣の支度はしてなかつた。

（七）今、人がみんな袷に着換へても彼は矢張り棉入ばかり着て居ねばならぬ、些と位熱いのは我慢するにしても、體裁の惡いのには閉口だが、別に金を工面する所もないので新調などは無論出來ぬ、仕方がないので定兒は何とか方法がないかと相談すると、定兒は暫らく考へて居たが、軈て綿入から綿を拔き出して袷にしてくれた。こんな工合で又半月ばかり過すと、いよ〳〵生計が立たなくなつた、とても永遠の計畫などは考へも及ばぬやうになつた。

（八）或日、例の柳夢菰が公用で岳州へ出張した序で、周が矢張り定兒にへばり着て居ることを知つてゐるので、どんな樣子かと尋ねて來た。と見ると周が取揃はぬ姿で靴を引きずり乍ら出て來る、顏はと見れば、眼は陷ち凹んで色は黃色に、少しも以前の俤がない。互に一別以來の挨拶を終ると、周撰は近頃の窮狀を訴へて、何とか方法を設けてくれ玉へと賴む。柳が笑つて『君が岳州を離れさへすれば、何とか方法のつかぬこともないサ、今は丁度、外國留學の學生を送り出すことになつてゐるから、古い留學生なら殊に往き易いであらう、君は以前官費生なのだから、以前の鎮守使に話しさへすれば、屹度纏まるだらうと思ふ、どうだ、もう一遍日本へ留學したら？』周撰も、此樣な機會で脫け出さなくては、何時迄經つても浮む瀨がないと思うた折柄であるから、柳が歸つてゆくと、定兒に其事を話して、二三の着物を質入し、武昌までゆく船賃をこしらへた。定兒は離れともないが左ればといふて、周撰の手は無一物で迚も此儘一緒に暮す方

法もないので、當座忍んで別れることにした。

（九）翌日周撰は武昌へ來ると、當時の官費生は甚だ得易かつたもので、幾日もかゝらずに周も留學と確定した、そこで、路費やら證書やらを受取つて、又岳州へ舞戻り、定兒と夢の樣に半月餘りも樂んで居たが、何時迄かくてあるべくもないから、定兒と相談して借家を明渡し、定兒は親元の同昇棧へ暫らく預かつてもらうことに話す。翁夫婦も心中には悅ばしくもないが一兩年の後には必ず歸つて引取るといふのに、それも厭だといふわけにもゆかず、不承不承に肯諾ふた。

（一〇）周は卽日船の切符を求め、定兒と別れて東京へ出發する。船の中で新たに行く多くの留學生連と落合ふたが、彼等は周が古參の留學生で日本通であるといふ所から、いづれも周に賴る氣になつてゐる、周は日本へ着いてから一切の事は凡て僕が引受けたといふ賴もしい言葉に、新米學生などは無性に安心し切つてゐた。

（一一）數日の中に船が上海に着くと、一同が宿屋に着く、周は出掛けて橫濱行の船を問合せると、丁度其日出帆したばかりだといふので玆に幾日か待たねばならぬことゝなつた。

（一二）翌日、周は賭博札を一組買つて來て一同に一番やらうではないかと慫めた、一同が問ふには『我々は玆に幾日も滯在が出來ないのに札を買込むのも惜しいぢやないですか、それとも日本へ往つてから又やれるのですか』と、周撰は笑つて『やれないことがあるもんか、僕だつて只上海に居る內だけ行るのなら何も一組買つて來るには及ばないサ、そこらから損料で借りて使つた方が餘程割がいゝからナ』『日本では法律で賭博を嚴禁してあるといふことを聽いて居ますが、若し警察に發見つたらどうしますか……』『安心なもんサ、決して發見るやうなことはありやせんよ、日本では賭博を嚴禁するといふものゝ賭けた金や骰でも證據に獲められない限りは處分されッコがないのぢやから、僕等が若し先にコ

マを買賣して置いて、警察の來た時骰を藏してさへしまへば、知らぬふりでやつて居ても證據が無いから奴等はスゴ〳〵歸るばかりサ、萬一骰が匿しきれなくて、一緒に捕まつた所で、大したことはないよ、何でもちッとも日本語を知らぬフリさへして居れば來た巡査が取調べる譯にゆかぬから、結局警察署へ引ッ張つてゆくだらう、警察へ引ッ張られたッて、眞名を名乘りさへしなければ、新聞に載せられても、只支那人が斯う〻〻したといふ事だけだ、漠然と支那人云々と書かれた所で、現在日本に居る萬からの支那人で誰が君や僕が行つたことゝ思ふものか』と、說く、新米の留學生は一も二もなく周の見識凡ならざるに感心してしまう。斯うして上海に二三日滯在する內春日丸が出るやうになつたので、其船に乘り込んだ。橫濱へ着くと、周は新米學生を引率して上陸し、汽車で新橋へ着き、幾臺かの人力車を呼んで、荷物と共に早稻田の風光館に乘りつけた。此風光館は、支那人得意の古い下宿屋であるが、周は二階の八疊一間を選んで自分の部屋に充て、新參の連中又それ〴〵に室を定めた。

第三十五　小說の譯し方（其四）

前の小說に續く。

一話說周撰到東京。會了幾天朋友。一日到了他同鄉鄭紹畋處。這鄭紹畋。從乙巳年卽到了日本。他父親曾在張伯熙家敎書。所以得了一名前淸的官費。

二初來的時候。進了成城學校。嗣後以該校功課不合意。遂退了學出來。至今尙沒有一定的學校。與周撰是幾年前的老友。今日見他來了。不勝歡喜。閒談了幾句。周撰卽問道。別來遇合如何。有滿意的沒有。鄭紹畋笑道。說什麼滿意的。祇求可以將就下去的也沒有。倒是你這周郎有福。居然被你把姨姊都弄上了。周撰笑道。那不過哄着他們頑頑罷了。我那裏有什麼眞心要娶他。鄭紹畋點頭道。這些事原是頑意

兒。認不得眞的。周撰復問道。夏麓蕁現在搬往那兒去了。他近來怎麼樣。鄭紹畋拍手笑道。你不問。我倒忘記了。他於今注重國貨。已不買東洋貨了。住的地方。隔這裏不遠。就在光明館。周撰道。光明館不是在三崎町嗎。鄭紹畋道是。周撰道。什麼國貨。是那個。還好嗎。鄭紹畋道。豈但好。風騷極了。這個人。說起來。大約你也應該曉得。就是金某的夫人。姓黃的。於今金某回國去了。祇賸了這位夫人在此。不知怎麼就與夏瞎子勾搭上了。周撰詫異道。他就是他嗎。便宜那夏瞎子了。不知那黃夫人在那兒住。鄭紹畋笑道。你也想染指嗎。那就頗不容易呢。他與夏瞎子同住。周撰也笑道。不過問々罷了。這樣染指了。想也沒有什麼味。鄭紹畋道。近處却有個好雌兒。不知你手段如何。倘弄上了。倒是段好姻緣。周撰忙問道。是不是國貨。鄭紹畋搖頭道。是日貨。難道你也排日貨嗎。

三周撰笑了一笑。鄭紹畋接着說道。年紀才十六七歲。雖是小戶人家女兒。却有八分風致。祇可惜是件非賣品。周撰問道。見面不難麼。鄭紹畋道。會面倒不難。祇不能說話罷了。周撰道。祇要能見面。事情就有五六分好辦。日本女子。有種特性。祇怕不能時常看見。凡得時常看見的。祇要自己不十分醜陋。就沒有弄不到手的。除了他丈夫朝夕守着。你方才說的那女兒。既不是大家子。年紀才十六七。可知沒有丈夫。這就狠容易。你祇說他姓甚麼。叫什麼名字。怎的才能見面。鄭紹畋道。你不要誇口太早了。我到了日本這多年。倒不知道日本女子有種什麼特性。你的面孔雖生得好。我不信日本就沒有不喜歡你的女子。周撰搖頭道。不是這般洗法。對於日本女子。不能全仗面孔。日本女子的特性。就是不肯太給人下不去。祇要知道他這種特性格。就沒有不好吊的女子了。古語說得好。精誠所至。金石爲開。卽如江佐廷去年住在四谷的時候。隔壁住了個陸軍少佐。那少佐的夫人。着實有幾分姿色。江佐廷見了。就去吊膀子。那少佐夫人起初那裏肯理他

呢。禁不得江佐廷誠心誠意的調了兩個多月的眼色。尙兀自不懈。弄得那夫人實在過意不去。祇得略假以詞色。江佐廷就乘着少佐不在家的時候。趕着那夫人說了許多仰慕顏色的話。並說道。倘夫人竟不應允。我這單思病就害死了。也沒處喊寃。祇是夫人怎忍心平白的將我一個書生害死哩。那夫人聽了。也無可奈何。祇得說道。你既這般愛我。教我也不忍十分辜負你。但我有丈夫的人。萬一敗露。兩下均不得了。今日趁着他到橫濱去了。以後萬不可再來。

四

周撰說到此處。望着鄭紹畋道。你說江佐廷那種面孔。還算好嗎。一個有夫之婦。也居然被他睡了一次。你且快說那女子的姓名住址來。見了面。我自有辦法。鄭紹畋道。既是這樣。我就看你的手段。那女子姓櫻井。名松子。就住在這表猿樂町七番地。他每天到渡邊女學校上課。必走這門前經過。我已打聽清楚。家中並無別人。祇有個娘。搬到這裏還不上三個月。周撰道。你知道是親娘不是。如果是養娘。就更容易了。鄭紹畋道。那却不知道。周撰道。他每天什麼時候上課。什麼時候下課。鄭紹畋道。他上課有一定的時間。每日午前八時。下課或早或晚不定。周撰道。既如此。我明日午前七時。且到你這裏來。看你的眼力如何。鄭紹畋答應了。

五

周撰卽別了出來。到天賞堂買了副十八金的眼鏡。回到風光館內。將一身嶄新的春服。並外套檢了出來。重新折好了。叫下女來囑咐道。明日的早飯。須五點半鐘開來。今晚可將我的黃皮靴磨刷乾淨。我明早六點鐘就要出外。下女應着知道去了。周撰這晚胡亂睡了一覺。驚醒起來。看錶已是四點半鐘。不敢再睡。就在被內揣想了一會。剛打五點鐘。就扒了起來。洗臉刷牙已畢。對鏡將西洋頭着意的梳理。施好了美顏水。揀了一條流行高領。衣服穿着才完。卽一片聲催着拿飯來。草草用了早膳。穿了外套。戴了帽子。架了眼鏡。下得樓來。忽想起忘記了件東西。仍上樓。尋了條白絲汗巾。噴了許多花露水。仍

下樓。穿了靴子。提了手杖。匆匆的出門。叫了乘東洋車。坐到江戶川停留場。換電車到了鄭紹畋家。鄭紹畋還睡着沒有起來。

六　周撰也不待通報。逕走到他房內。將他推醒。鄭紹畋睡眼糢糊的。見是周撰。驚道。你怎的這般早。周撰笑道。與美人期。何敢后也。你快些起來。現在已是將近七點鐘。恐怕就要過去了。鄭紹畋坐了起來。一邊穿衣。一邊說道。還早。我每日七點半鐘起床。下去洗臉的時候。恰好見他走過。現在還不到七點鐘。那裡就會來。周撰笑道。寧肯我等他的好。若遲了。他已過去。豈不是白費了一天工夫。說時。鄭紹畋已穿好了衣。收了舖蓋。洗了臉上來。與周撰閒話。

七　周撰取了錶出來看。已到七點十分鐘了。就將錶放在桌上。望着他走。看看已是七點半。周撰卽催着鄭紹畋下去打望。若來了。祇咳嗽一聲。我卽下來。鄭紹畋眞個走了下去。周撰一人坐在樓上。屏心寂虛的等咳嗽聲響。等來等去。不覺已到八點鐘。那裡有些兒影響呢。心中正在懷疑。祇見鄭紹畋垂頭喪氣的走了上來道。今天眞怪。怎的還不見來。周撰作色道。知道你搗甚麼鬼。害得我早覺都沒有睡。你作弄朋友。是這樣作弄的嗎。你昨天所說。我就有些不肯信。既有這樣好的主兒。你是個魯男子。就肯平白的讓給我。鄭紹畋聽了着急道。你以爲我說的是假話嗎。論人情。我何嘗不想。祇是我這面孔。怎戳得上吊膀子。還是我不顧利害。吊了幾日。果然他連正眼也不瞧我。你說這勾當。不讓給你。讓給誰哩。周撰道。既是眞的。怎的每天走這裏經過。偏偏的今天不來哩。鄭紹畋道。我也是覺得狠詫異。周撰想了一想問道。今日是禮拜幾。鄭紹畋搖頭道。不記得。等我去問問來。

八　說着又下樓去了。不一刻笑着上來道。難怪難怪。今日正是禮拜。周撰也笑道。你這鬼東西。禮拜都不弄清楚。害得我瞎跑。鄭紹畋道。這須怪我不得。我多久不上課了。弄清楚作甚麼。誰曉得這禮拜與你吊膀子有大關係呢。好在今日知道是禮拜。明日就不會錯了。你還是

明日早些來罷。　周撰嘆了口氣道。也罷。說不得。要求魚水之樂。不得不三顧茅廬。（但願我那松子姑娘）知道我這一番至誠就好了。說着。別了鄭紹畋。回到風光館內）

（一）周撰は東京へ着いてから、數日の間は友人の訪問に暮した。或日、彼れの同鄕人なる鄭紹畋の所へ尋ねてゆく、此鄭は乙巳の年から日本へ來て居る、そして其父が曾つて張伯熙の家に家庭敎師を勤めてゐた關係から、前淸時代の官費留學生となることを得たのであつた。

（二）初めて來た時には、成城學校へ入つたが、其の學課が氣に喰はぬとて退學して以來、今に一定の學校といふものがない。周とは久しい友達である所から、周の尋ねて來たのを見ると大喜びで、閒談數刻、周は聞いた『どうだい、別れてから後の工合は？、何か旨いことでも有つたかい？』鄭は笑つて『旨い事だと？、願つた所で一寸話せる丈けの事すらありアしないよ、それよりは、君こそ馬鹿に旨くやつたさうぢやないか妻君や妾はどうしたんだい？』『ハ、ハ、なアに當座の玩弄サ、何で僕が眞面目に貰ふもんか』鄭は點頭いて『左樣サ、いづれあんな事は慰みぢやからのう、眞面目にやつちや居られないサ』周は又問ふ、『夏麓蓴は今何處へ越して居るかい彼奴は近頃如何ぢや？』鄭は手を拍つて笑ひながら『さう〳〵、君が言ひ出さなきや忘れて居つた、彼奴は今では國產に重きを置いて日本品は買はないことにしッちやッたよ、居る所はスグ近くのソラ例の光明館サ』『左樣か、光明館は確か三崎町だッたネ』『うん、左樣ぢや』『國產ッて一體どんな品だい？まだ好い仲かい？』『好い仲どころか！實に風流極まつたもんぢやよ、相手は話せば君も必ず知つてゐる筈だ、例の金某の妻君よ、黃さんと言つたネ彼れは今の所では金が國へ歸つて妻君ばかり此方に殘つて居るんだがネ、夏の奴メ如何して私通きやがッたか旨くやつてゐるんだよ』周は不思議さうな面をして、『うん、彼奴か！夏の奴メ旨くやり居つたナ……、所で例の黃夫人は今何所に住居してゐるのか

い？』鄭は笑ひながら『君もお仲間入りがしたいのか？そりや中々容易でないぞ、夏と一とッに住居してゐるんだよ』周も笑つて『ナーニ閉いて見たばッかりサ、お仲間入りしたつて格別旨い品物でもないからナ』『左様サ、夫れよりか、近所に好い牝があるがネ、君の腕前は如何か知らんが、旨く捕まへたら、いゝお慰みだがナ！』聞いた周撰は大慌ての態で『國産かい？違ふかい』鄭はかぶりを振つて『日本品サ、君はまさか日貨排斥の組ぢやあるまいネ？』

(三)周撰はにやり〳〵と笑つてゐる、鄭は更に續けて話す、『まづ年は十六七かナ、餘り上流家庭の者ではないが、然し中々良いぞ！只惜いことには賣品でないんだ……』『顔が拜まれないかい？』『會ふ位は何でもありやしないが、只話は出來まいネ……』『會はれさへすりや、事は五六分通り出來たといふもんぢや日本の女には一種の特性があつて、平生會ふことの出來ないのが困るんで、若し時常會はれさへすりや、此方が馬鹿に醜男でない限り、手に入らんことなんかありはしない、朝晩亭主が傍に見張つて居るのゝ外はネ、君が今言ふた女は既に大家の令嬢でもなく、年も十六七だとすれば亭主が無いに定つてゐるから此れは譯がないよ、まア君何といふ姓で何といふ名で、そして何うすれば會はれるのか話して見たまへよ』『君餘り大きな口を利くもんぢやないヨ、僕は日本へ來てから暫くくになるが、日本の女の特性とはどんなものか知りやしない、君がいくら美男子だつて、日本中の女が君に惚れないのがないとは受取れないネ？』周は搖頭を振つて『イヤ、左様いふ譯ぢやないがネ、日本の女と來ては、只面付ばッかりぢやいけないよ、其特性といふのはッマリ人に恥を搔かせないといふ點にあるのだから、此特性を會得さへすりや、決して釣れないことはないんだよ、古人の所謂「精誠至る所金石爲めに開く」ぢやないか、江佐延なんか如何だい？去年四谷に居た時、隣家に陸軍の少佐がゐて、奴メ、とう〳〵此呼吸で其夫人を引ッかけたもんだ、少佐の奥さんといふのは、

一寸澁皮の剝けた女であつたから、江は見るとすぐ引ッ掛けにかゝつたものだ、少佐の奥さんも初めの間は、てんで相手にもせなかつたのだが、何しろ、江は誠心誠意で二タ月餘りも根氣よく秋波を送つて、結局其奥さんに氣の毒がらせたもんぢや、此上は旨い言を並べさへすれば可いやうな程度になつたから、江は少佐の留守を見込んで、奥さんに想ひを焦してゐることを話し、若し奥さんが肯いて下さらねば、僕は片思ひの戀煩ひで死んで了つても恨みのやり所が無いのですから、つまり奥さんが殺して下すつた道理です……なんて述べたもんぢやすると、其奥さんも氣の毒がつて、已むを得ず、貴郎がそれ程迄に妾を想ふて下さるといふことは全く貴郎に對してお氣の毒になるのですが、妾も夫のある身體ですから、萬一知れたら双方とも大變なことになりますのです、今日は丁度夫が横濱へ往つた所ですから、宜うムいますが、以後は決してお出で下さらぬやうに……てなことになつたものだ』

(四)周撰は此所迄語り偖て鄭の方を見て『どうだ、君！江佐廷の奴メ、彼奴の顏は餘り好い方ぢやあるまいどうだ、君！それでさへ夫のある立派な奥さんが兎に角一度は彼奴に許したぢやないか！君早く例の女の住所姓名を聞かせたまへ、會ひさへすりや、僕に自ら方法があるよ』といふ、周は『ン、左樣いふ譯なら、僕は一とつ君の手腕を拜見しやう！其女といふのは、姓は櫻井、名は松子といふのだ、住所はすぐ此の表猿樂町七番地で、其奴は毎日渡邊女學校へ通ふ爲に屹度此前を通るんだよ、僕は疾うにスッカリ調べて置いたんだが、家族は別になく母が只一人で此方へ越して來てから未だ三月にもならない』と說く、周は『其母といふのは君實母かどうか知つてるか、若し養母なら更に雜作がないがネ……』『そいつは知らん』『其女は毎日何時頃往つて何時頃戻るんだい？』『學校へ往くのは一定の時間で、毎日午前八時だが、戻りは早い時もあり遲いこともあるネ』『左樣か！ぢや、僕は明日の午前七時に、君許まで來るよ、そして君の眼

識を看るんだネ、ハハハ……』

（五）周撰は暇を告げて出掛けると、それから天賞堂へ廻つて十八金の眼鏡を買込み、風光館へ戻ると新らしい着物と外套とを引ッ張り出して、すッかり折目をつけ、下女に明日の朝飯は五時半に出してくれ、今夜の内に、僕の赤皮の靴を磨いて置いてくれ、明朝は六時に出かけるんだからと囑咐けた。

此晩周撰は一寸一と睡りして飛び起きて時計を見ると朝の四時半だ、二度と睡らないで、蒲團の中で、あゝして、かうしてと考へ廻して居たが、軈て五時を打つと跳ね起きて顔を洗ひ齒を磨いてしまうと、鏡と首ッびきで洋風頭を御丁寧に梳きわけ、それから美顔水を塗りつけると流行のカラーで支度が終る、そこで飯の催促をして、そこ〳〵に朝飯が了ると外套を着、帽子を冠り、眼鏡をかけて二階から下りて來たが、忘れ物を思ひ出して又二階へ上り、白絹のハンカチーフに香水をたッぷり振りかけて二階を下り、それから靴を穿きステッキを持つて匆匆に下宿を飛び出し人車を呼んでそれに乘り江戸川終點から電車に乘りかへて鄭の下宿へ來て見た所が、鄭は未だ睡つて起きなかつた。

（六）周は、取次も待たずに、ずん〳〵鄭の室へ通つて搖り起す鄭と、は睡さうな眼をこすり乍ら周を見て吃驚『君は何て早いこッちや。』『美人と會ふのに後れてなるもんかアハハ、君も早く起きたまへ、もう七時になるよ、事によるともう通つて往つちまッたかも知れないよ』鄭は起きると着物を着ながら『未だ早いよ、僕は毎日七時半に起きて、下で顔を洗つてゐる時分に奴が通るんだからネ、七時にもならぬ前から、何で通るもんか』周は笑ひながら『マア僕が少し待つてゐる位が丁度宜いんだよ、若し遲れた日にや、奴が通つて了つて一日無駄になつて了うぢやないか』言ふ内に鄭は着物を着、夜具を疊んで、顔を洗つて來た。

（七）周は時計を取り出して見ると、七時十分だ、軈て時計をテーブルの上

に置いて其女を見に往く、七時半になると上つて來て鄭に『下りて往つて見張つてくれ、若し來たら咳拂ひをしてくれ、そうすれば僕が下りて見にゆくから』と言ふので、鄭は下へ下りてゆく、周は一人で二階に待ちつゝ今や遲しと咳拂ひの音を聞き洩さじと構へてゐる、待つこと暫時、八時になつても音沙汰がない、不可思議千萬に案じ煩ふてゐると、そこへ鄭がガッカリした顏付で上つて來る、そして『今日は實に奇態だよ、なぜ來ないんだらうネ……』周は怒つた顏付をして『君は一體何寢ぼけてゐるんだい？僕はお蔭で昨夕なんか碌々睡りもしないぢやないか、君は友人に調弄ふのも大概にしたまへ、昨日の君の話もどうも些し可訝いと思つた、そんな好い的があるのなら君が自分でせしめないで、何で僕になんか讓るもんか』鄭は焦き込んで『イヤ、君は僕が嘘を言ふと思つてるんだネ！人情から言へば、成程僕だつてせしめたいと思はないことはないサ、併し僕の此面では女を釣ることなんか容易の業ぢやないよ、實は僕だつて利害なんか考へないで何遍となく釣り出しにかゝつて見たんだよ、けれ共、振り向いてさへ呉れないんだよ、見玉へ、此樣自分に不相應な玉は君にでも讓らないで誰に讓られるもんか！』周は腑に落ちた。『成程左樣だナ、したが毎日此處を通る者が、どうして今日に限つて來ないんだらうネ!?』『僕も不思議で堪らないんだよ』周はしばらく考へてゐたが『時に、今日は一體何曜日だい？』鄭は首を振つて『知らない！どれ往つて聞いて來う！』

（八）言ひ乍ら二階を下りて往つたが、間もなく笑ひこけて上つて來た。

『アハハハ、來ないのも道理だ、今日は日曜だつたよ、ハハハ』周撰も笑ふ『ナーンのこッた、此奴め！日曜も知らんで居やがつて僕に無駄足を踏ませやがつて！』『だつて君、僕にすりや何も不思議がないぢやないか、僕は學校へなんか暫らく御無沙汰してるんだものを！そんなことを知つて居たつて仕樣があるまいぢやないか、日曜と君の釣出しとどんな關係が

あるか誰が知つてゐるもんか、マア今日は日曜なら已むを得ないサ、明日は間違ひッこがあるまいから又明朝早く來るサ』周は嘆息した。『アーア仕方がないナ、魚水の樂を得んとせば三たび草廬を顧みざる可らずかネ、アア好いヲ、只松子嬢が僕に此樣誠心誠意のあることを知つてくれさへすれば、それでいゝサ、アハハ、ぢや失敬するよ君！』周はとぼくさ光風館へと戻つて往つた。

『魯男子』は石部金吉堅造の意である。

支那語飜譯法講義終

大正九年九月十五日印刷
大正九年九月二十日發行

定價金貳圓

著作權所有

著者　石山福治
東京市本郷區本郷一丁目六番地

發行者　田中慶太郎
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷者　加藤保
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所　文明社印刷所

發行所　文求堂書店
東京市本郷區本郷一丁目六番地
電話園小石川四八〇番
振替口座東京二一八番

323
556

終